川柳塔

昭和六十年八月二十五日　印刷
昭和六十年九月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻七〇〇号

日川協加盟

No. 700

七百号特集

九月号

60年度 同人総会と 二賞表彰10月句会

日　時　昭和60年10月6日（日）午後一時開場

会　場　メンズファッションセンター3階
地下鉄谷町線「谷町4丁目」下車2号出口
谷町3丁目交差点西南角
電話　06（941）1918

▼同人総会　午後2時～3時30分
〔議事〕①会計報告―高杉鬼遊　②事業経過報告―樫谷寿馬　③役員改選　④質疑応答

▼二賞表彰句会　午後5時30分から
おはなし　西尾栞
路郎賞・川柳塔賞表彰
兼題　「例」　塩満敏選
「指定」　阿萬萬的選
「種」　阿部柳太選
「ゴール」　橘高薫風選

席題　当日二題　各題3句
会費　五百円

川柳塔社

NEW FORMAL COLLECTION

泣いて笑って……
夜を通り過ぎたら
また陽がのぼっていた。
男のロマンと
フォーマルと。

OSK JEFF ORIGINAL DESIGN®

株式会社オーエスケー
〒540　大阪市東区南新町1－13
☎ 06(941)8015

夜市川柳

西尾栞

七月三十一日は有名な堺大浜で魚の夜市が徹夜で開催される行事である。

その夜市にかけて川柳会が開催されるのが夜市川柳である。

そもそも夜市川柳の先祖をたずねると、大萬川柳会にさかのぼる。

大萬川柳は故松江梅里氏が、彼の経営するお寿司屋の店へ、巻紙に水茎のあとも美しく当選句の一句一句を書いて貼り出したのが始まりで、故麻生路郎先生選というのが大いに受けて多数の応募者があり、一年に一回の総決算にはベストテンを決め、横綱・大関が出て大変賑やかであった。その後、梅里さんが歿くなり先生もおなくなりになって、川柳雑誌から川柳塔に改題と同時に、第一七三回大萬川柳会が復活して、選者は故清水白柳氏になった。白柳氏が昭和四十五年十一月に急逝されたので、一月号から選者が中島生々庵前主幹にひきつがれたが、翌二月号から川村好郎氏が選者となられた。爾来昭和五十七年一月号まで「最終」という題を最後に、好郎氏の身体不調により大萬川柳の幕がおろされた。

その後、大萬川柳のユニークなシステムにあこがれている柳人諸子は、ぜひ大萬川柳の復活を希求されたので、誰か良いスポンサーはないかと探していたが仲々まとまらなかったが、アイディアマンの天笑君が、月毎の選者をかえて、堺名物夜市の日に総纏めの大会をもつことにされた。

大萬川柳以来、投句は清記されて選者に句主がわからないのが味噌である。この清記が隘路であって、スポンサーがあっても仲々話が進まなかった。それを克服して、天笑君と月子さんが毎月せっせと清記する努力をつづけていられる。

今年で第三回の大会を得て、夜市の夜堺市の勤労会館で盛大に開催された。

夜市川柳会も愈よ定着したようである。益々のご発展を祈る。天笑君！　おめでとう。月子さん頑張って!!

座右の句

俺に似よ俺に似るなと子を思ひ　（路郎）

私の句

職責が白髪頭に変えていき　広井すえお

川柳塔 九月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

夜市川柳……西尾栞……(1)
私の思い出……川村好郎……(2)
川柳塔（同人吟）……西尾栞選……(4)
自選集……(30)
■川柳太平記(88)　川柳の群像　高須啞三味……東野大八……(34)
■連載　誹風柳多留廿六篇研究（二十二丁）……(36)
江戸川柳に現われた八百屋お七（二）……阿達義雄……(38)
水煙抄……黒川紫香選……(40)
秀句鑑賞「同人吟……工藤甲吉……(33)
　水煙抄……藤村メ女……(63)
路郎賞・川柳塔賞候補作品中間発表……(57)
愛染帖……橘高薫風選……(60)
東野大八自選百句……(64)
八木千代自選百句……(66)
作品……黒田草舟……(78)

私の思い出

川村好郎

麻生路郎主宰「川柳雑誌」二二八号昭和十八年一月一日発行定価三十銭。私が初めて川柳をやってみようと買って読んだのがこれだ。今、「川柳塔」通巻七百号の発行を知った。私の部屋の戸棚には「川柳雑誌」、「川柳塔」がぎっしり入っている。静かに見ると感慨無量であり、色々のことが思い出され、尽きないことどもを私に語りつづけている。

戦争が次第に激しくなった頃、私と実弟松江梅里とは徴用逃れのため軍需工場に就職した。そして同僚四、五人にも川柳を勧めて毎日昼休みの時間を利用して工場の鉄材場所に集り、それこそ毎日小句会をしたものだ。その内に一度は是非本社句会に出席したいと言い出したほど愉しく作句をつづけた。しかし月月火水木金金で工場は休めない。遂に梅里と相談して、架空の叔父を殺して、課長に私たちの叔父の葬式が今日で詣らせて欲しいと頼んだら、快くその許可を受け、課長から香典料まで貰い、梅里と私とA君と三人で御津

700号記念

生駒だより……麻生葭乃…(68)
天皇様の稿料……東野大八…(70)
■座談会「川柳塔」過去・現在・未来……(72)
〈アンケート〉初心者時代の想い出……(80)
安平次弘道・榊原秀子・寺田裕美・中村優・小島蘭幸
月原宵明・川村映輝・松尾柳右子・浜本義美
初歩教室……阿萬萬的…(84)
「軽い」……森下愛論選…(86)
一路集「式」……土居耕花選…(86)
「突然」……松岡三吉選…(87)
柳界展望……(88)
本社八月句会……(90)
各地柳壇(佳句地10選/井上喜酔)……(94)
■紹介「川柳にみる大阪」/板尾岳人 83 各地句会案内 107
■句会だより「もくせい川柳会」/田中正坊 106 編集後記 109

座右の句

信じねば今日の心が寒いだけ　(美代)

私の句

北斎の描けぬ演習富士裾野

松尾柳右子

八幡宮社務所内の本社句会へ出席した。その時、梅里が入選僅かに二句、私は全没、A君も全没。一生懸命に作句し投句したのにとがっかり。やがて三人で撃ちてし止まん、撃ちてし止まんと笑いながら帰路へ。折角香典料まで貰い課長に嘘を言ってまで句会へ来たのだから、選者も二、三句ぐらい抜いてくれたらええのに、とそんな不平を言うものは無く梅里は弟だのに、もう負けだ俺も川柳は止めだ、とは決して思わなかった。さあ頑張ろうかと励み合ったのだった。

愈よ戦争が激烈になったが、私宅で三人で川柳を続けた。警戒警報が発令されたら作句、警報が解除されたらそのとき投句締切。あの時の燃え上った川柳のたのしさは忘れられない。梅里が生きておったら、A君が戦死しなかったら今でも談笑しながら作句したり、激励したり、されたりしたであろう。親友でありライバルであった。

今、川柳塔七〇〇号を手にすることが出来るのは、川柳に生き川柳に生かされてきた倖せな半生のおかげである。改めて感謝している。

曳張られ縋りつづけて八十路旅　好郎

西尾栞選

仰山な本屋の本に酔うて出る
食べ頃に帰ってこいと稚魚放ち
蟻の列一匹逆に歩くのは俺
レポーター死角へいつも腰を据え
働き蜂送り出したら一眠り
歳月が夫婦を水の様にする

熊本市　有働芳仙

綱渡りともかく夏を乗り切らん
油蟬日毎に母の背が曲がり
人妻のホットパンツは罪深し
正論は正論として床の間に
その時はきっとやさしい河馬の牡
やがて秋紺の背広が待っている

松原市　谷垣史好

理科の宿題メダカの澄んだ川が無い

和歌山市　垂井千寿子

蟹穴に入って世間を狭く住む
国境ははっきり国交は霞ませて
遺言を書いて淋しい安堵感
嫁が来て時計の要らぬ日々くれる
考えてやっぱり黙っている姑

竹原市　小島蘭幸

ポケットの底は妻にも見せられぬ
生まれ変わるともう結婚はせぬ男
もう一度童話を読んでみよおとな
飢えたおとなに童話を読んで聞かせよう
酔い覚めの水宣誓をしてしまう
老いた犬も家族よ静かなる日々よ

松江市　舟本与根一

嘘のない顔であります団子鼻
馬鹿笑いすることにする健康法
達者すぎてゲートボールの閑がない

この歳で離婚はないと思い込み
風鈴は一等席へ吊るしとく
孫三人隔世遺伝が一人いる

八尾市　高杉鬼遊

献立というほどでなし香と汁
花白く老いの汚れがうとましい
かぶと虫オス一匹の値よ盛夏
葬式へ男と女の待ち合わせ
人の子を都会へ還す秋の海
糸瓜忌や子に遺すもの何もなし

大阪市　本間満津子

花買うて下の中位いも悪くない
愛されていると叱られてから判り
三度目のテルテル坊主が笑っている
キャッシュカードが中流意識を唆す
理想とはまるで違った今の幸
塾の児に影踏みさせたお月さん

島根県　小砂白汀

針に糸通したぐらいを喜ばれ
十指みなあなたのために磨きたし
押花を愛の形見として嫁ぎ
カタカナに催眠術をかけられる
何んとでも読める字を書く医者のペン
自信など無いというのが怖ろしい

和歌山市　西山幸

一日が逝く一善を急がねば
人を選り人に選られて孤独なり
耳疼く不協和音を聴きすぎて
急にかなしい郵便の来ない午後
莫蓙布団人を待つのは馴れている
天の川笑って訣れられるかな

伊丹市　樫谷寿馬

やわらかい耳で聞いとく妻の愚痴
戦争を知ってることを自慢する
ステーキが美味いきっと優しい牛だった
親おもう心も二色赤と藍
透明な情け触れ合う生ビール
水虫と別れたあとにある空虚

大阪市　江城修史

父ありき一つの主義と特高と
老いて尚尖る心の捨て処
海鳴りよ亡父の居場所を教えてよ
振り向かぬ後姿にある驕り
ドラマにもなるよな過去を持つ命
ゆれる世相憎しみだけは捨てましょう

倉敷市　野田素身郎

今できることは献血よりほかになし
忙中閑あり古本屋をのぞき
歌えないからせめて手拍子でもとろう
管理職手当に倍するほど飲まれ
本当の勇士いくさを語らない
転轍機ここから先は赤字線

桜井市　岩本雀踊子

怖いこと妻が先に死にたがり
負けて勝つそんな器用な僕じゃない
鷺草に過去に泣かせた女見た
信用の出来る夫で頼りない
愛妻家は加山雄三だけじゃない
御先祖に酒乱がいたのか酒が好き

大阪市　津守柳伸

台風も割り込んでくる雨つづき
遮断機の向うに小判埋めてある
さくらんぼ2つもらったおつき合い
塩分を押さえて娑婆にある未練
未来図を描いて鳩を飼いならす
満月にほっと自分を取り戻す

岡山県　嘉数兆代賀

親の心へ何の未練もない船出
言うだけは言うて虚しさだけ残る
つまずいた石の言葉を聞いている
それからをもう振り向かぬおんな坂
二人三脚歩いた闇があたたかい
夕陽真っ赤やがては冬の駅に着く

平田市　久家代仕男

向日葵が基地前線で見張りする
影絵には話しておこう明日のこと
鈍臭い返事すべてを弁えて
肩揉んで娘の縁談に加勢する
真直に歩くと嵌る落し穴
知らぬ間に先行核も病根も

富田林市　岩田美代

字あまりをもてあそんでる梅雨の午後
今日の主張曲げぬコーヒーを熱くする
限界を自覚出来ない二枚目で
大ジョッキ長持唄は似合わない
女運悪い男の梅雨の屋根
下町の少女に成ってるところてん

大阪市　中川滋雀

ご先祖が聞いてる今日の鉦を打つ
余生には遠く喜劇の中にいる
栖山の哀れを包む雲の峰
ピンセット傷の深さに触れたがり
泊る気でいるのか効き目のない箒
ティシュペーパー丸めた嘘も拭いておく

八尾市　宮西弥生

水銀が上ってはやるホルモン屋
追いぬいた分だけ敵が多くなる
両陛下泊りし次の間で眠る
童心にかえって裸になってみる
こんなとき母にすがりたい日の微熱
まだ女賭けてみる日の髪洗う

尼崎市　春城年代

他人ばかりのバスで思索をめぐらせる
女ひとり背中にも目をつけて生き

野の花は根から種から子をおもい
許せない影法師だが連れてゆく
いとこ会の言い出しべえが逝っちゃった
節くれ指に遠い先祖が見えてくる

弘前市　波多野　五楽庵

山菖蒲なぜかはたちの妻になる
チョキばかり出さねばならぬ雨の指
しきたりの中でひっそり嫁が住む
改札がはじまっている便秘症
いつからか妻に移った笑い癖
蛍火をつつんで帰る朝帰り

西宮市　林　はつ絵

ペン先にわたしの影が吊される
やすらぎを両掌で志野の碗に受け
樹のてっぺんで会うのは白い風ばかり
濡れつばめなさねばならぬことがある
菩提樹の下にわたしの椅子がある
みんないる夕餉の卓のシルエット

和歌山市　福本英子

鈴振れば社に深い水の音
七夕が過ぎ亡夫の忌がまた巡る
泣き笑い笑いの方が悲しくて
その先は聞かないことにして平和
教材の枠で消されてゆく唱歌
戸締りの忘れ一駅過ぎてから

米子市　林　瑞枝

黙りっこ較べを手として見よう
年上を誰も気にせぬ比翼雛
メダカ三尾跳ねてわが家のプログラム
負け犬の背に参道の青い風
童話読む胸にひとりの蜻蛉釣り
友達の手品の意味を考えよう

近江八幡市　前川　千賀子

バクに遣る夢ばかり見る熱帯夜
ケーキ付きコーヒー一人でバースデー
愛よ永遠にとハレーに千度言うつもり
片恋が芸術的な隠し撮り
妻として時に小さなノラになる
哀しみを忘れてしまう夏帽子

兵庫県　遠山可住

一万円札にさもしい心聞かそまい
熟れて来た西瓜が見えている烏
委せとけば良いと仕組みがわかりかけ
水虫と聞いてどこかで通じ合い
ふんばりが効く戦前の腰を据え
ぼろ過ぎる話は判こ押すでない

倉敷市　小野克枝

生み終えし娘は知りました親の情
席譲る少女の頬の丸さかな
ロボットに職をとられた二本足
背を向けたままで夫婦の無言劇
一ランク落せば笑い顔になる

五体満足であったら次の欲

大阪市　西出楓楽

生真面目で毎日飽きぬ米の飯
ほんとうのなさけが死語の中にある
胸刺してくるのは優しい語り口
わたしの都合で廻す日もある地球
独楽の芯お前がはずむことはない
選びたいものは柩のはいり方

岸和田市　福浦勝晴

少年の野望をそそる夏の雲
秋風に萎びた乳房抱く女
へべレケに酔って阿呆のプラカード
独身と勝手に決めて焼くサンマ
倫落の渕でトマトの摘み食い
羽毛布団驕るテリアが昼寝する

和歌山市　松原寿子

終る旅はじまる旅の鼓動とも
消極に生きてあなたを愛し抜く
好きだから不意の情けをつき放す
心にくい言葉と受話器おいてから
理性のなかで哀しいまでに人を恋う
どこまでも白いままなり夏の罠

松原市　玉置重人

それぞれに話を合わす票を読む
ロボットの許可をもらった夏期休暇
補聴器がしっかと聞いたいい話
蹟いたとこから妻のナレーション
悪口はよそう貧しくなるばかり
まだ嫁かぬ娘がひとりいる夜の長さ

島根県　堀江芳子

と言う話は胸に入れて置く
ほどほどの頑固にしてねと注ぎこぼし
間を持たす煙草を吸えぬ夫の指
季節追う蟬こおろぎも夫の友
どの星も光る泣きごとなど言わぬ
水子霊などと弱さをゆさぶられ

島根県　堀江正朗

振り返るゆとりの中に年重ね
盃に想像広げ輪を広げ
怒っても同じ痛みだ笑っとく
正座して聞きいる雨にも教えられ
手さぐりの広さごろりと寝て感じ
輪の中にいる気易さに惚けまいぞ

米子市　林荒介

枕を裏返してもやはり昨日
神様の心に叶う面を買う
友だちの肩に時々手をのばす
弱い者同士で遊ぶ褒の底
ぴったしの石を石屋で見てしまう
絵日傘をたたんで姉を置き去りに

松原市　小池しげお

ニンニクの声がだんだん派手になり

役員が出し合い収支を合わしとく
終戦の頃に育って背が足らず
新聞少年朝刊少し露にぬれ
漏るとこが変り今年の梅雨続く
落し穴でしたと善人笑わない
岡山県　土居耕花

にわとりの恋はあんまり忙しい
地蔵さんの傍に座ると眠くなる
ちぎり絵で妻の笑顔がむつかしい
こんないいドラマが惜しい妻の留守
父として僕も御在位五十年
大正の眼にはビックリ箱ばかり
大阪市　天正千梢

泥くさい言葉背負って上野駅
いとなみの終えし綿毛の軽がるし
哀しさは芙蓉の花のひと日かな
責任のがれ方向音痴と言うておく
香りがほしくて原語読みなおし
寝屋川市　柴田英壬子

パリ祭の唄をパリでは忘れられ
闘病記軽いうち切り悔いている
闘病記マロングラッセ一つ食む
腕が鳴るけれど請求書病んでいる
淘汰して聞いてあげよう老いのぐち
島根県　錦織文子

或時は婦唱夫随の花菖蒲
新緑の雨情へ染まる女傘
今日だけは少し優しい鬼あざみ
望郷の風に出逢うた父母の忌よ
投げられた言葉の棘はそのままに
今治市　越智一水

子の嫁をほめて余生を無事に生き
七癖は言わず家族に和が続く
俺よりも先に死ぬなと肩を揉み
迷うてる恋川影もゆれている
参禅の一食限りへ萩こぼれ
八尾市　山下みつる

漫画読む夫の横で妻安堵
ハイジャック黄色いリボンつけて待つ
人殺し助けずカメラ取りまくる
照れくさい顔で定期を見せ直す
年寄って親父のぼやき良くわかり
高石市　牛尾緑良

数え唄故郷の空が遠くなる
海鳴りの浜へ晶子に逢いにゆく
二人三脚僕には重い連れの足
ヒロインになれぬ女の太い眉
脛に傷あるから効いてくる小言
大阪市　鈴木節子

通り雨言いたいことがたんとある
中流の意識でベートーベンを聴く
来年のことは知らないバラ植え替える

ここまで生きて医療手帳を貰う
お付き合い浮き世の風を庇い合う

宇部市　平田実男

初孫誕生
初孫を抱いた軽さと違う汗
言論の自由へ邪魔な喉仏
豪快な笑いの方へある不安
ローカルへ乗り換え遠慮のない訛
能力のないのが爪を出したがり

松江市　恒松叮紅

世話好きな夫婦で小鳥犬二匹
会葬でパッタリ逢った笑い声
つっぱりが素直にもどる無人駅
妻なにかいいことがある片手鍋
ロボットに職人気質わかるまい

吹田市　西川景子

疑問符に答えぬ使いすてカイロ
自販機であらかた済ませている無口
口裏を合わせてくれぬ秋なすび
自信過剰あせもの親にいさめられ
長い目でみていて未だに迷うてる

大阪市　西森花村

わらべうたうたえばわらべになる夕べ
三十代自分に因果ふくめられ
七夕さん私も待ってる人がある
ずる休み先生と生徒あいこです
お仏飯奇麗に私は山盛りに

倉吉市　渡辺独歩

神様も腹立ちそうなバイオニクスジー
月曜日夫の鬢(たてがみ)撫でて送る
音のない世界に手話のキューピット
その中で楢山行のわらべ唄
言うのならかごめの鳥になりましょう

松江市　柳楽鶴丸

逆深知したい貴男からの電話
僕のコマは左へ回るかも知れぬ
葱坊主の一番高いのがボスか
片仮名を使う男の卑怯者
妻のダイエット自転車で飛び廻る

富田林市　田形美緒

よこしまな誘いをかけるくちなしよ
突然に来た喜びは倍になり
お別れのビールの苦さに泣いてます
人情が欲しくて降りる無人駅
再来を皆で約して鳥羽の宿

大阪市　神夏磯道子

表札は隠居の顔をしておらず
好きなことさせたら治る肩の凝り
神様に委せた運へ欲が出る
月に夢描いているのは親の方
月光に心の中を照らされる

大和高田市　岸本豊平次

落ちつけと言ってる電話のオルゴール
目の毒と世辞の一つも言うておく
天守閣黄門様が炎をすえ
レポーター黒ネクタイの口で聞き
賢いと誉められ兄チャン辛抱し

姫路市　人見翠記

口々にしゃべれば猫も耳を立て
後髪引かれるような国便り
疲れたらベッドベッドから見る雨の糸
命日は菊の季なれかしと希うなり
おれに似ずおれに似ぬ子に助けられ

大阪市　藤田頂留子

四五日はだんじりばやし耳につき
待つうちが祭りで来たらあっけない
耳もとを威嚇するよな蚊の羽音
変装はしても仕草はだませない
事後処理に明るさだけが有る救い

寝屋川市　宮尾あいき

雨の部屋百合ぱっちりと咲いてみせ
愛過剰あじさい雨に身をくずし
生垣を抜けてまた風口なしが匂う
遠雷を独り聞く夜は亡母を恋う
梅雨空よ貴方のように思いきり泣きたい

和歌山市　内芝登志代

叩かれて太鼓の本能弾みだす
ひと言でこんなに変る人の顔
ささやきへ微笑みだけをくれたひと
ほどほどに遊んで免疫つけている
アイロンかけ好きで少女が熟れてゆく

和歌山市　若宮武雄

うっかりが罠を卑怯と決めつける
ひとりぼちは覚悟の上の鬼瓦
水かけてかけてかけても夏の墓
ふる里の駅の古さがなつかしい
仏壇にまだ生きのびているマッチ

竹原市　森井菁居

夫婦相和すと子供がついて来る
いい線を行ってる四十路のペアウォッチ
ときめきをアイスコーヒに盗まれる
出勤簿押し一匹の鬼になる
青春を追えば返事が戻る海

和歌山市　後藤正子

生きることばかりが先になる本音
人間らしい言葉に窮地救われる
習性が無残に若葉食い尽くし
着る見込みないが水着はとって置く
抱きしめてあげたい子ネコ濡れている

米子市　田中亜弥

えこひいきせぬ約束で芽が伸びる
百物語トイレに立てぬ子がいるよ
二つ目の坂でつまずき取り戻す
本棚に近よりにくい兄の本

森眠りふくろう自信湧いてくる
岸和田市　島崎冨志子

自家菜園茄子とトマトの彩が冴え
たこやきの丸さに心なごむ時
難民救済私も小さい輪をつなぐ
養子とるつもりはないが次男選る
婿という憎みきれない人が居る
富田林市　藤田泰子

花の自負雨に咲くから艶やかに
音の無い雨が高層ビルに降る
本能で策略はないバラの棘
電話ベル心待ちして梅雨ごもり
杖にして陽除けにもして男傘
岸和田市　古野ひで

北海道旅行
おみやげも孫にあわせたキタキツネ
句の中に女の涙見てしまう
耐えるだけ耐えた人生まだ続き
いさかいの言葉も楽し老夫婦
逢えば直ぐその気になってゆく女
東京都　増田次章

左遷の地野心の昂ぶりもてあます
何んにも言わないが妻は識っており
しなければならぬこと捨て友と飲む
良い話二つ舞い込み暦みる
浮浪者が鳩と分けあうパンの耳
米子市　寺沢みど里

ひぐらしに今日一日を急かされる
居るだけで里の落ちつく兄の位置
この先を注げばこぼれる母の壺
雨三日すかさず伸びる草の丈
牛の背を追って夕日とすれちがう
岡山市　時末一灯

生き方を真似て足場を踏みはずす
口真似が上手な鳥で羽搏けぬ
逆らった流れと知った石である
我が家にもいたと気付いた青い鳥
勝ち馬のうつむいた眼を見て帰り
寝屋川市　江口度

雨降って地かたまらぬは新開地
法螺貝もしめりがちなる山開き
夾竹桃真っ赤に咲いている悪夢
金魚ゆらゆら休日プランつぎつぎと
街はいくさで黒い眼鏡が売り切れる
宝塚市　丸山よし津

子に譲り増築の庭こわされる
身許探す苦労を笑う写楽の眼
持たせても袖は通さぬ娘の箪笥
投げた石戻らぬ事を言い聞かす
玄関で夜店の金魚生き続け
鳥取県　金川満春

老妻に少し派手なネックレス

ニューリーダー賢いだけでもの足らず
賢さにやる気もあって男上げ
めでたさは天皇在位六十年
バラ色の人生罪を深くする
寝屋川市　稲葉冬葉

まなうらに秘めて余生の花日傘
梅らっきょう漬けて姉さん人嫌い
ひたむきに歩いて牛の瞳に負ける
遊び癖ついてしまったねぎ坊主
性格の不一致などと申します
倉敷市　小幡里風

あの時の疵へ触れてた遠花火
テーブルマナー苦手ラーメンに決める
ボクボクと親爺なんだか若返る
煩悩をみんなが捨てる濁り水
白足袋がつかれる人の波を縫い
大阪市　大塚節子

年々に月日のサイクル早くなり
あじさいや月が暈きて風呂がえり
子の進路親の夢からそれてゆき
隠し事出来ぬ女房で五十年
梅雨最中喪服同士が行き違い
呉市　林野甦光

禁煙の電車で記憶薄うなり
木洩れ陽に聞きたい椅子を置き替える
虚と実のずれをこけしは棚で聞き
鵜簀りの舳先も少し酔い加減
水攻めの城址と聞く美水田
鳥取市　森田熊生

雲ふわり国境のない空がある
うそのない後ろ姿を子に残す
だまってた目にこってりと意見され
腕組みの沈黙解決策立てる
黙々と伝統守る指のたこ
松原市　北野久子

だんだんと夫可愛く見えてくる
こっそりと夫も嫁に買っている
嫁思いポックリ寺へまいりましょ
子に聞けば捨てるオモチャはどれも無し
筆談の用意忘れて引っ返す
鳥取県　森田布堂

災害地孤立の村へヘリが飛ぶ
シルクロード古都の歴史を砂が埋め
窓あけて呼び合う位置に別居する
悪徳商法自業自得の顛末記
悲しみのパンダの母は笹持たず
京都市　松川杜的

雨宿り本尊さんに尻を向け
賽銭箱だけはデラックスになるお寺
賽銭の音も雨の日は雨の音
経蔵の死角で紫陽花雨にぬれ
みんなしゃべってはる雨宿り

米子市　菅井　とも子

洋上のマストは鳥に貸しましょう
ライバルに雅兄と書いた仲である
街角にポストがあって落着ける
お悔みが言葉にならぬ雨しきり
文学論嫁の本棚から借りる

西宮市　西口　いわゑ

びっくり箱のバネがこわれている不安
せっかくのトリックだびっくりしてやろう
鍵穴をのぞけば漫画読んでいた
言うべきや迷いの闇へ揚げ花火
逢える日の女の髪は艶を増す

出雲市　吉岡　きみえ

少しずつうすれて母の忌をかさね
路傍の石にくい石ともいとしとも
くやしいがしわのないのに負けました
ごくらくへ行く近道と善を積む
報恩感謝出来る奉公皿洗う

西宮市　奥田　みつ子

甘い実をいっぱいつけた隣の木
観世音きのうと同じ顔でいる
夫の息子のシーソー妻はどこに佇つ
情熱にまかせて走る白い靴
こけしの眼情熱秘めていて細し

高槻市　竹内　花代子

初対面は親戚だった通夜の席
掛けたままテレビドラマは夢うつつ
猫に膝とられ落着く友の家
北海道一周へ友のフルムーン
つまみ食い誰はばからぬ独りいる

豊中市　田中　正坊

還暦が古稀に若いとうらやまれ
おや年金が残ってた貯金帖
幸うすき一生だった女文字
宝石箱おんなをあざむいてはならぬ
落語家がブルゾンを着て歩いてる

鳥取県　林　露杖

花菖蒲京の老舗のひと偲ぶ
忘却の色よみがえる水中花
失明の友の記憶の鮮明さ
失明の友の陽気につり込まれ
古傷の呪詛がきこえる熱帯夜

島根県　木村　はじめ

炭鉱の惨事春雨降り止まず
生ビール妻と一緒に共稼ぎ
風化した過去は語らぬ夫婦独楽
健康でいる仕合せを忘れてる
倶会一処墓よりのびた草を抜く

和歌山県　天満　三千代

貪欲が口火を切っていた油断

悠々自適追いも追われもせぬ歩み
追憶は天寿の母を中に入れ
あきらめの底でうごめく自尊心
繁茂する松の息吹きを聞く名所

和歌山市　中島正博

遊んでる蟻一匹が見当らぬ
鈍行で行こうと決めた遊び好き
田に水を満たせば旅がしたくなる
損をした話をすればよく受ける
金貯めて安心貰う筈だった

和歌山市　堀端三男

刺のある祝辞も交じる廻り椅子
慶弔費だけで年金消えてゆく
父の忌兄弟の記憶にある平手
余生まだ塗りたい彩が多過ぎる
会合も一雨来そう戻り梅雨

和歌山県　寺田裕美

蛇になり蛙になってゆく勝負
引退をすれば記録が光りだす
歳月や笑い袋が空になる
掌の痛みわかってくれるまで叩く
電線で帰る相談するつばめ

神戸市　山口美穂

今日もまた雨です遺影の父へ告げ
こんなとき亡父はどう言ったかなと思う
鯉に餌をやってた亡父思うみどり風
釣りしのぶ水やる父のいない夏
こんなにも軽く小さい亡父を抱く

七尾市　松高秀峰

抜け目ない気配り笑顔で栄転す
癌の母仏壇の花水を替え
母さんの猫背小さな影法師
肝心のとこで聞こえぬ母の私語
孫帰り冷蔵庫も空となり

大阪市　黒田真砂

レース編むとても素敵な夢を編む
紫陽花の一枝リビングはなやげり
虹渡る夢に心のさわぐ日々
いたわられて老いのもろさにつき当り
孫誕生其の後意見の多い母

米子市　桑原伊都

道化師の化粧の下はなみだ顔
老兵の手柄自慢も風となる
画廊から出よう冬の絵つづくから
歳月へふたりで築く一里塚
二三日誇りを捨てぬおち椿

大阪市　北勝美

梅雨晴れ間傘一本にある迷い
柳の葉箒てこずる雨上り
バスの屋根柳の下をくぐり抜け

愛染祭出店ためらう空模様
予報官すまない様に今日も雨

仙台市　川村映輝

社交ダンス八十一歳の脚たしか
妻が居て八十一歳憂えなし
一本で足りる釘を二本打つ
古都税へ率先反対する僧正
五十年の馴染み妥協せぬ鏡

岸和田市　芳地狸村

万緑に朱の彩冴える多宝塔
ともかくも亀と兎で四十年
困ったら話しに来いと言う教師
交番の前でほえてる迷い犬
好きだから声もうわずる電話口

松原市　佐藤藤子

文月のなんと恍けた葱坊主
裁ち鋏思い違いをしてしまう
梅雨晴れ間あか紫蘇かいに塩買いに
一人きりなのにノックをしてしまう
パレードの先頭を行く鴨の母

岡山市　川端柳子

クラス会友と開いた玉手箱
折鶴の二羽寄り添わす彩を選る
追憶の彼方に五万と居る味方
玄関に今日を占う吊鏡
メリーゴーラウンドあなたひとりの愛信じ

倉吉市　奥谷弘朗

頑固だがものの道理を心得る
自信ない奴がして居る生返事
叩くまね逃げるまねして楽しそう
親しさは憎まれ口の仲で生き
沈まずに泳ぐことだけ考える

河内長野市　井上喜酔

腑甲斐ない笑いで嫌な腹の底
雑草に似た人生で無位無冠
飛鳥村モグラへ聞こう土器の謎
番犬のストレス知らず共稼ぎ
無駄遣い好きで余生にある不安

島根県　松本はるみ

さらさらと風紋描く砂の思惟
生と死をぶらり背負うて泥絵具
風鈴よ今夜の風はふざけてる
原爆忌亡兄へ軍歌のサキソホン
不貞寝するマリオネットが縛られる

米子市　石垣花子

本番に震えているのは花婿で
玉手箱あければ友達皆んな逃げ
友達に切らせてならぬ棘の花
器用さを女世帯が借りに来る
輪の中で器用に笑い袋あけ

家あって家庭無い子の非行歴
うちの子に限ってという親ばかり
控えめに言うても自信漲らせ
階段の最後の一段踏みはずし
親を見てこの縁談は思案する

大阪市　河井庸佑

どん底の続くグラスにわく闘志
悪友の口の重さは信じとく
妻のもつひもの長さにある自由
はっきりと君は一円硬貨ひろえるか
趣味多忙絆が一つずつ増える

枚方市　二宮山久

河川敷九月の風がほろ苦い
砂利船の闘志吃水すれすれに
風船を飛ばそう霊園の空高く
年金の海へポンコツ塩漬けに
昭和元禄上げ底文化平和呆け

守口市　羽原静歩

美世さんの御主人を悼む

柩送ると松風がうなり出す
地蔵札夏の椿の落ちる中
橋の上しばらく歩幅ととのえる
端末機でこぼしてしまう花の種
兄の辞書に春の童話をはさみたい

米子市　青戸田鶴

風で飛ぶ帽子に嘘がかくれてる
三面鏡閉じて安心した顔に
影踏みをしたくて並ぶ葱坊主
丁シャツに女の夏がこぼれてる
カンナの恋と紫陽花の恋

尼崎市　春城武庫坊

汗の肌熱い番茶でいたわられ
きりぎりすあの時蟻を笑ったが
出るとこへ出てもお金がものを言い
過去は過去揚羽の蝶の舞い姿
地下足袋の足音だったら信じよう

玉野市　小谷仙山

惚けたかなよその孫ととり違え
惚けたとは言われたくない写経する
惚けてない証算盤持って来い
惚け老を写すテレビに苦笑する
あの世への願望句碑と共に眠る

大田市　藤田軒太楼

記憶の中できびしく光る兄の瞳よ
渡し船のいい顔鬼も仲間入り
兄去って軍歌の風が吹きぬける
井戸水にうつる私の影がゆれ
逆光に父の背中を見た想い

米子市　沢田千春

新宮市　川上渓水

正直に答えて結局叱られる
判押さず情けの知らぬ人にされ
貯りかけた頃に女房の誕生日
金持ちの周りはいくつもあるチャンス
和尚かて極楽へ行くとは限らない

兵庫県　松本ただし

地球儀の此処が破れた飢餓地獄
孤独では溶ける他ないかき氷
式済んで皆が鬼になってゆく
バーゲンも金も熟年標的にされ
これ以上肥えたらあかん薬呑む

唐津市　浜本義美

日曜もボーナスもない職に活き
グラマーが素直に脱いで診せている
郵便を黙って差し出す女文字
競艇が流行らず質屋が涸れてくる
今のうち買うときなされ松浦漬（捕鯨禁止に思う）

唐津市　田口虹汀

一線を越すといたずらでは済まぬ
怖いのはもう一枚の見えぬ舌
七割はまだ日の丸を好きと言う
生前の誓いは重し鯨幕
無の中に蔵しきれない瑠璃瑪瑙

唐津市　久保正敏

妻にだけ言える言葉と言えぬこと
引金が次元の低い指と知り
惑星は私のものと猿の私語
女橋数えきれない渦を抱く
ライバルにシラノの鼻を許す句座

和歌山市　玉井豊太

がむしゃらに食うた黒パン売ってない
又しても父の残塁はがゆがり
ボーナスを均等割って父ははに
あかんべえした子が呉れる恩返し
聞き馴れぬ辺りの声は旅の朝

福岡県　横地雅風

都市の娘がやれ病気だとお産だと
乞食でも舞台姿は化粧する
指切りの指折れそうで破れそう
牛の瞳がほ鯨禁止が羨まし
挽回に酒断つ夫へ百度石

兵庫県　辻文平

愛のある嘘なら舌を抜かれても
歯切れよい言葉返ってくる節目
聞いてない振りで聞いてる老いの愚痴
肩の荷をおろして肩がこってくる
聞き流す耳で男の練るいくさ

羽曳野市　佐野白水

豊田商事のリストに吾が家のテレナンバー
難聴に豊田のセールス根負けし

カプセルから出たような胎内仏の顔
胎内仏が昭和の衆生見てござる
久し振り絵筆を持った夏景色
今治市　矢野佳雲

誰に引かそうジョーカーを抱いている
水槽の昼には乾く母の髪
反対も出来ず賛成して帰り
体重計娘は乳房抱いて乗り
間違っていたか足音それてゆき
唐津市　浜本久仁於

嬉しくて蹴った小石はよく弾み
子の軽い寝息へ主婦の夜が更け
門札を世襲で継いだくぐり門
式典へ臣康弘の影武者が
馴れぬ手の轆轤へ茶碗背伸びする
名古屋市　越村枯梢

こそこそとゴキブリもいる盗み酒
身の程を知らぬ蛙のハイジャンプ
白無垢に染み二つ三つ倦怠期
山の歌うたって友を茶毘に付す
青写真あの世で建てるマイホーム
倉吉市　野中御前

神の子を砂に隠して亀かえる
目隠しをされると走る閃光よ
ちぐはぐな夫婦で迎えた白い旅
弾ける日明日を迎えた鳳仙花
塀ごしの薔薇に良心盗まれる
出雲市　板垣夢酔

帰る日が近づきツバメ良く喋る
里帰り三食昼寝母使う
好き勝手言う女房は野党なみ
未亡人保険が入ってから狂い
鼻歌のパパだおねだりしてみよう
松江市　竹内寿美子

指抜きの枷が取れない私の掌
竹とんぼ友を忘れた罰に泣き
充足のひと日よ今日の種を蒔く
宿命やテトラポットが波を恋い
愚かにも指から取れぬ赤い糸
羽曳野市　中村優

親展をコピーで刷った茶封筒
花嫁の達筆配る夏見舞
電卓器叩いた欲が割り切れぬ
ばあちゃんの昔が見えるシャボン玉
税を取ることを許さぬ仁王門
米子市　小西雄々

心電図深いしこりが一つある
小声でも聞こえる他人のスキャンダル
胃壁には異状なかったビヤホール
逆転へ昭和一桁酎が好き

モナリザの眠る姿が見たくなる
出雲市　原　独仙

浮気するあなた甲斐性ありますか
五十年少さな秘密抱いて添い
おい居るかそうか冷戦最中か
器量だけは別です日本人規格
母ァさんは肥満体ですプール番
倉吉市　渡辺菩句

運命線のこの辺にいるのが私
大切な夢は獏にも与えない
どうしてもこわれぬ虹がひとつある
展示のどの壺も水欲しがってるよ
この車にも守り袋が吊ってある
豊中市　上田登志実

サラリーマンやめて価値観また変り
優等生ばかりじゃいやな世になろう
そろばんの勘定いらぬ暮しぶり
髪ゆいの亭主ゴルフが巧くなり
自己過信それも生きてくテクニック
倉敷市　稲田豊作

無愛想な顔で腹には慈悲を持ち
どん底で知るあたたかい世間様
薄給を祝結婚に噛じられる
ピンハネをされてる方が低姿勢
亡き妻に昨夜逢わせた良い枕
出雲市　園山多賀子

気の長い女でふっくら豆が煮え
梅干しが星の雫で美味くなる
恩返し出来ないままに枇杷熟れる
打ち明けて泣いてくれない紫陽花よ
美味い水蛍に採点して貰う
八尾市　宮崎シマ子

雨音とリズムを合わす七五調
階段を数えて余る七五調
電車来て途中で切れた七五調
観光バスとなりが邪魔な七五調
故郷も我が家も大雨注意報
姫路市　大原葉香

天気予報信じて一日棒に振り
シュプレヒコールいい年をした男達
爪切った事も日記にする無職
吉日を襖全部を外し待つ
値札見て矢っ張り止めにしておこう
東大阪市　森下愛論

飲む話決まれば雨の音もよし
カタカナの機械子供の知恵を借り
いい音をたててソーメンの冷えかげん
二遍目のおしぼりが来て座が終り
ケンかしてても嫁はんは飯を炊き
美祢市　安平次弘道

睡眠薬羊はひとつずつ消され
花名刺憎めぬ嘘を添えてくれ
おしゃべりなオウムが憎い失語症
復讐をしてはならないバラの棘
銀行が踏絵を踏ます社のピンチ

岸和田市　清野こう

白浜に旅して（三句）

町並を包んで愛し海紅豆
最後には振分けになる旅土産
女親分の貫禄見たり師の度胸
今日あの娘明日は此の娘と茄子きうり（自家菜園）
相談にのれば出さねばならぬ金

橿原市　岩井本蔭棒

一生を四年で稼ぐ天下り
媚を売る指で宝石虚勢張る
泣き言を口癖にして儲けてる
歯止めなど乗り越えてゆく三次会
佗し世の一期一会を温める

尼崎市　角野かず子

台風がまともに来ると見たカラス
ひとつずつドラマをたどる人名薄
断りの電話きれいな声を出す
手をつなぐチャンスを待った通り雨
手品師の鳩が一秒早く出る

浜田市　中川幸一

難聴も内緒ばなしは聴こえます
象の足蟻はちっとも怖くない
噴水を見に来たように待たされる
贅沢は敵と信じる妻と居る
東奔西走土壇場で飲む苦い酒

笠岡市　松本忠三

年だけの距離を保って兄の意地
細々と暮す家計に嘘がない
しんがりのデモが余所見をして歩き
出任せが真実となり呆れ果て
出来心なんて心があるかしら

名古屋市　大林曲ん手

本藍のゆかた地鯨尺が好き
盛り場へのんびり生きる顔が来る
旅の酒少し溺れてみたくなり
作文で裸にされた父でよし
虫干しをする程知恵は持っていず

島根県　西村早苗

終点まで寝ます疲れた日を埋める
割切った筈でこんなに気が重い
日曜は好き鍵っ子に母が居る
停年へ惜しい若さをもつひとみ
聞き捨てにならぬおんなの意地悪さ

西条市　片上明水

錠剤の色鮮やかに夏疲れ

蟻の列蟻に掟がきっとある
文鎮の錆父のもの祖父のもの
ほんとうの苦労話は母にせぬ
助太刀の刀の錆をみてしまい

米子市　野坂なみ

梅雨しとど文学散歩しませんか
歩き通して休むベンチが見当らぬ
鳥の怖さ飛行機だけは知りつくす
兄ちゃんになってだんだん鬼になる
一つの餌へ兄弟鴉もめ出した

米子市　政岡日枝子

母の手へ戻ると止まるブランコよ
いよいよの時の拳は握っている
予算削減いたるところに雨が洩る
遊び好きの風にリボン解かれそう
笹の葉に恨み言葉は吊るすまい

大阪市　板東倫子

人間の眼では覗かぬカメラマン
お人好しだけが取柄と自嘲する
パンダさま御出産スター様御成婚
ママゴンが阿修羅のような子を育て
紫陽花は業な女の涙色

柳井市　弘津柳慶

聴診器はずして首を横に振り
所詮一緒になれぬと知って騙し舟
小学校のちよちゃんあれが初恋か
祭壇へピッケル悲しく供えられ
雑学のささやき風が聞いて呉れ

神戸市　仲どんたく

腕をくむポーズで画廊の昼下り
徳俵で残した自叙伝肴とし
アイアンもウッドも眠る梅雨の歌
さぼったらあかんと医者の叱るほど
バースデー余命を削る日のごとし

京都市　都倉求芽

くちなしを何憎むかや梅雨止まず
誘惑に勝って淋しい帰路となる
ホイホイを仕掛けた朝を早起きし
ネクタイのリンチをうける顎の汗
全国のバス展示会本願寺

奈良市　森田カズエ

眼帯腹帯丁字帯くすりの臭いつきまとう
兵児帯と言うから年齢がばれたのさ
今日を生き明日へ弾ずむ車椅子
紫陽花を活ける大きな壺が無い
人生はバラエティだな慈雨豪雨

高知県　松岡三吉

親をみて呉れとは言わん事にする
若者よ東京だけが日本でない
考えている横顔がボケに似る

付き合いは久し越中くすり売り
泥棒を育てたように娘が嫁ぎ

高知県　赤川菊野

独り居の哀しきものに水枕
勝つまでと耐えた根性今に生き
ザーマスの仮面をはいだ酒の罪
老人と決める一線どこへ引く
見えみえの世辞へ男やにさがり

桜井市　河合茂雄

インテリのどこか冷たい人間味
逆転のドラマに男あこがれる
夢のない男に伸びる無精髭
陰に咲く花にも世間へ意地がある
憩の場知らずに兵隊蟻が死ぬ

小野田市　国弘半休門

長雨へ不快指数を上げる家
闘病の食事に味が出て美味い
夏場所も野球もベッドの上でみる
回復をみこして入歯も治しとこう
補聴器が無いと大きな声をさせ

今治市　長野文庫

欲ぼけた願いの極み不老不死
無駄と知りながら北の島返せ
ゴキブリが下手に動いて叩かれる
見て見ないふりで他人は行き過ぎる
叱るのは止めよう乳牛ちちが出ず

堺市　高橋千万子

百匹の蟻トンボへの葬列か
六十の恋それからの事業欲
言い訳のペンが重たい夏の午後
夏休み孫と一緒に虫も来る
雨が降る今日の言い訳見つかった

鳥取県　中原諷人

狛犬の首は後ろを振り向かぬ
合掌の八月へ沸く蟬しぐれ
無駄骨の音は極楽から聴こゆ
青い音する一冊のアルバムよ
熱い血を思い出させて葉鶏頭

和歌山市　神平狂虎

自分を苛めるペンとノートと酒がある
最高の気分で負けた事がある
少しずつあなたに溶けてゆく砂糖
当面の敵は鏡の中に居る
愛の嵐に心の雨戸締め忘れ

松江市　小林孤呂二

素直になれずまだ役人の殻を着け
地球危機カラスだんだん殖えてくる
湿舌圏内にあり傘を持って出る
函数を展くようにはならぬ末期梅雨
花菖蒲が光るうっとおしい梅雨あがる

尼崎市　奥山美智子

不器用に生きて心が満たされる
ある期待うしろの正面だあーれ
吊り革に今朝の吐息をぶらさげる
口達者その場になるとやれずいる
単純な振り子がある日ふと醒める

堺市　藤井一二三

大野寺にて（一句）
み仏のご慈悲を雨の音と聞く
O・A機器に押しのけられた窓の椅子
指切りの目付きは何もかも委す
白いのが髭に混じってきた恐怖
旅に寝てたびの心を探しあて

大阪府　坂口公子

紫のベールが欲しい遊歩道
釘のない枠でなかなかはずせない
甘すぎてとうとう地獄で裁かれる
鈍行で唯一冊の旅案内

西宮市　藤村宏子

貧乏くじひいて素直にたち上る
結び目がすぐほどけてゆく片便り
話半分甘い汁だと分っても
通ぶってカレーの辛さ極まれり

白浜で逗留して（二句）　岸和田市　原さよ子

不夜城の海のさざ波見て飽かず
逗留のぼちぼち料理にけちをつけ
ある時は三猿になって老い平和
髪染めて少し派手目の服を着る

京都市　山本規不風

綱渡りうまい女の空財布
約束を延ばす女の風見鶏
呪いが効いて女が退院す
守護神を大仏様から授けられ

出雲市　石倉芙佐子

古い木戸守る紫陽花はんなりと
遠い日を私に返せ木の葉づく
吾子とられ夫を捕られし朝の夢
浅はかな情で試す皿の数

大阪市　長谷川春蘭

謙遜とは自慢人柄左右する
蛇口から今朝もいくさの音が出る
ジーパンも今宵浴衣と塗の下駄
鳥篭を隣にあずけ帰省する

出雲市　落合正江

逆転の修羅場を抜けたよい男
げんまんの小声の指がいとおしい
目覚めれば又一人前欲を追う
参道の神の御風に頭下げ

島根県　岸本輝水

閃きも役に立たない二日酔

還暦が鼻たれ小僧の日本晴
ゲートまでとどかぬ球にとりつかれ
年金をひい孫の数で割って倖

豊中市　奥田満女

天気予報当って続く雨毎日
ばら模様服に咲かせて強い性
笑い声指話の世界の二人です
ハイヒール診察室の女医先生

町田市　竹内紫錆

震災をのがれた運でクラス会
運動不足いまやメガネも拭かぬ職
ナイターの記事寝床でたしかめる
吹替えの声優美人だったはず

芦屋市　竹中綾珠

パチンコの玉ばかり追う無我の境
クローバーの四ッ葉見つけた日のはずみ
幸福のくる四ッ葉のクローバーを信じ
病名をかくすに客も協力す

岡山市　行吉照路

国鉄よさらば出向燃えに燃え
みみず居たミニ菜園に埋めてやり
末っ娘が六十路の父母をこき使い
七色がゆらいで亡母の詩を聞く

和歌山市　山川克子

したたかに火の輪をくぐる寡婦の知恵
良心の押し売りとても疲れます
天罰がきっと来ますよと脅される
責任は私にもなどとしおらしい

島根県　石田清泉

紫陽花の叡智科学に挑戦す
愚痴っぽさ減ったと思う妻は老い
ゲートボール生きてる証の輪をくぐり
補欠選待ってましたと立候補

境港市　細木歳栄

流れ星もう決心は変えませぬ
秘めている恋は重罪かも知れぬ
生き伸びて辛いあの日を甘美とも
定年へ急に女が強くなり

大阪市　北山悟郎

気短かを義足がブレーキかけてくれ
戦場で拾った命がしなびて来
スランプに四季の変りが早すぎる
寝られては困る妻だが粗末にし

羽咋市　三宅ろ亭

執拗な降りこれでもかこれでもか
忘れてたころに水魔の爪を見た
片鱗を見せぬ手法に操られ
活けられた百合に話かけた朝

高石市　浅野房子

腰巾着可愛くもありうるさくも

争って空しいだけの夕餉とる
ぎりぎりの接点で生き梅漬ける
熟年は程よいところで身を交し

東大阪市　崎山美子

敵を知る口車にも乗るゆとり
ソロバンをはじいて交際申し込む
口車にのせてトラの子巻きあげる
買物のうまい女房の預金帳

姫路市　丁坪サワ子

自惚に助けられてる趣味の道
だまされる宝も無くて日々凡々
宇盂盆の亡夫も白髪が増えたかな
痴呆の人見舞うて明日を知る思い

貝塚市　行天千代

惚けた友先逝った友が迎えに来
幸と不幸紙一枚の裏表
どの鈴も一つ一つの思い出が
梅雨明けが来れば猛暑が待っている

枚方市　稲葉星斗

国宝と言われる門で撮るポーズ
マッチ箱集めて廻る京の旅
ジョニ黒は棚に飾って角を飲む
一詩を吟じて高し梅雨晴れ間

西宮市　山片紀雄

嚙っても未だ当てにする七光り
税払うて片身の狭いタバコ吸う
新兵器ベール外せば古くなる
日日好日あそび心で満たされる

西宮市　野呂鵜汀

蜜蜂は幸せものよ花と蜜
一合の酒で二時間待ってます
何処をどう歩いて来たか悲しみに
民宿は月に蜘蛛の巣張った窓

尼崎市　西村かすみ

有るだけの鈴を鳴らして一つ買い
落日の森で妥協を考える
どの顔も悪女に見えるビヤガーデン
お言葉に甘えられては困る夜具

奈良県　宮川古都路

杖片手東西南北せかぬ旅
つれあいに聞かねばならぬ母の愚痴
つれあいに相談事あり知恵借りる
屢鑠な父を見上げる里帰り

守口市　野呂右近

いただけぬ物に男の愚痴がある
一週の早さ話して見るドラマ
カラフルな薬で寿命伸びてゆく
まだ五欲捨てず七十髪染める

箕面市　坪田紅葉

その内にわかると思う気の弱さ

ぼけるまで聞きたくないぼけ話
余生なぞ思わず今日も張り切って
気楽さがよろこばれるお人よし

岡山市　井上柳五郎

二十一世紀見えるかなあと指を折り
平均寿命あと何年に妻むくれ
憎らしさ今は味方で頼もしい
サクラサイタはや退学へ六月尽

交野市　山本テルミ

なつかしい蛇の目に出会う京の雨
雨も又疲れて梅雨の中休み
旅プラン足の弱りを気にしだし
ニコニコと日課こわしに孫が来る

島根県　大屋秋峰

やっと出て命短かい籠の蟬
口紅が冴えて柩の中にいる
平等に年を重ねてきた笑い
四面楚歌仏にすがるある孤独

和泉市　西岡洛酔

ちっちゃなちっちゃな宝に孫の夢
友情の警鐘背にけたたまし
無粋なるブザーが続く春の夢
サングラス背中に重い荷を隠す

綾瀬市　大山と金

ふるさとの訛が抜けぬ話好き
チャンスとは思いもかけぬときにくる
諦めずやればやったで実を結ぶ
いい加減にしろ挨拶長すぎる

倉敷市　藤井春日

真実の友情つまずいてから解り
うす汚い欲望純潔を売り物にす
ヨボヨボになっても口だけ老いていず
飲み仲間俺を悪友にして仕舞い

島根県　大森孝華

対岸へネオン流れて旅の景
ライバルの相手大きい後影
ふまれても雑草故郷の風が好き
影もまた我が影腰が曲げられぬ

大阪市　岡田ふみ

成りゆきで画いてしまった設計図
一人一人のモラルが欠けている歩道
一点の非もない女が日蔭とは
あさりとる目と鼻の先ジェット機が

岡山県　岩道博友

隣から名器の皿が帰らない
建て替えて長屋の人情味が薄れ
許すとは言わぬが入り口開けておく
ワンカップ飲んで生きがい持って去ぬ

鳥取県　新家完司

竜の子と遊んで一人帰らない

ほんものの光さがしているもぐら
ぴったりと寄り添ってくるおともだち
とむらいの家の前ではお辞儀する

寝屋川市　平松かすみ

また伸びた寿命へ軽い玉手箱
蝶の恋お邪魔をします布団干し
雨宿り大根半分分けにする
外出の娘にきらわれるハリ薬

西宮市　朝山千世子

あさがおの蔓巻けど私に頼るひとが無い
三人旅孤独がひしと身にしみる
アメリカで国技が光る大相撲
曽孫の服可愛ゆく縫えて梅雨晴間

岡山県　直原七面山

生かされて薬漬け
腹の児に語り掛け
目を閉じて待つキッス
世に拗ねてまだ惚けず

岡山県　二宗吟平

肩上げの一針一針亡妻が居り
明後日がいつまで続く歯の治療
笑うこと忘れた電話切れる音
ひまわりがわが世の春を歌う畑

大阪市　中西兼治郎

私でもよければあげると演歌言い
熱狂が三塁側で破目外し
半分を又半分に切る西瓜
こゆく塗る口紅親子生きる道

鳥取県　清水一保

まな板に乗ると立派になる男
田植機にあの早乙女の歌がない
愛と恋そんな理くつは抜いて好き
六十歳俺の出番は俺が決め

大阪市　坂本仙吉郎

虫干しに秘蔵の版画色褪せず
突然に海中火山頭出し
突然に起きた事だと言い逃れ
成人の式にもんぺの時ありて

大阪市　吐田公一

人がみな気楽に見える火の車
すぐ治りますよと軽い嘘をつく
催促がしにくい程を借りてゆき
突然の赤紙寡婦にされました

浜田市　佐々木裕

止り木にうしろめたさの腰をすえ
白百合も賞めれば高慢ちきな花
故里に父と母置く苦い酒
雨だれのリズムに合せ嘘つけぬ

寝屋川市　堀江光子

美しい姉に弟さからわず

冷蔵庫足で締めてはいけません
四五人で来てOLの中ジョッキ
几帳面な気性どおりに塗るペンキ

西宮市　津山冬子

お隣の雨戸気になるまだ開かず
天災と片付けられぬ梅雨に泣き
古都税の様子を奈良の目が見つめ
労わりの言葉忘れた夾竹桃

島根県　松本文子

雨の日は夢を煮つめている女
姿見に写して中止するデート
愚かさを写して鏡から離れ
赤い花供え亡妹の一周忌

大阪市　松尾柳右子

サーファーよ戦艦大和知ってるかい
学生の気まま叱って自己嫌悪
窓つたうひょうたんの花聴くピアノ

姫路市　松浦輝月

胎動をギャザーで隠し披露宴
頑固爺色と欲とにだまされる
えらそうな名前さっぱり出来ない子

島根県　藤原鈴江

逆立ちをしても緑が見つからぬ
腹立ちを微笑に変える壺をもち
口紅をワイングラスに盗まれる

珍らしく弁当ほめた喉仏
花菖蒲四十九日に咲いたとて
定退が再々就職して老いず

島根県　星野侑正

部屋明けて深き緑の中に座し
老鶯よ嘆くな俺も生きてるぞ
簾吊るゆとりがほしい暮し向き

和泉市　岡井やすお

大学へやった真面目な子が刺され
炎昼に男ワイシャツネクタイで
吊皮にノースリーブの脇涼し

寝屋川市　岸野あやめ

笑うこと少くなりぬ老姉妹
おかしくもないけど笑う義理の仲
おふくろの知恵と金とを借りに来る

兵庫県　藤後実男

総菜へ小言を言わぬ白い皿
退職へ庭木の格好が変りかけ
一目ぼれした間違いで早や二十年

大阪市　町田達子

ひとときを過去振り返る夢二展
時代とも息子の存在が遠くなる
月の国ベールのままの頃が良い

自選集

工藤甲吉

サケ・マスに米ソ国旗をはためかせ
勤勉をよその国から叱られる
政治家に「励ます会」でたかられる
世間とはえてして針を棒にする
レントゲン我が酒ガメの偉なるかな

大矢十郎

福耳に長寿二物を与えられ
水師営以来暴落した握手
方向音痴方向音痴の妻を連れ
同情の顔で弱点拾われる
三猿を逆にたとえて荒稼ぎ

野村太茂津

憐れとや暗闇ばかり向く思考
楢山はお伽噺にとっておく
ひとつ覚えで島の桟橋釘着けに
楢山の坂も島桟橋も昏れ残り

文法をわざと外して北叟笑み

山内静水

おふくろの味ほろにがい旬の味
魚なら跳ねてる丸ごと食う胡瓜
メデタシで話がついた昼寝する
忙し忙し蟻はくるりと向きかえる
式次第書いておこうか葬式の

水粉千翁

鷺草の闇のほのかな心知る
盃にくつろぎを酌ぐ遠花火
朱は赤に真紅に愛は偽れず
とぼとぼと歩いて拾うものばかり
生きざまという片道をふり向かず

米沢暁明

頂上へ一ふんばりの汗をふく
ままごとへ父さんの真似母の真似
参拝の傘燈籠へ預けられ

味つけは母の日だってやはり母

結論は出まい本音のさぐり合い

市場没食子

検温から詰所の朝がさあ始動（入院（五句））

点滴と手術室から戻って来

経過良好付添さんに欠伸が出

酸素吸入出番がのおて夜が白み

夫婦箸どちらも剝げた輪島塗

藤井明朗

初盆へ六十七の走馬燈（第67歳死去）

太りたいやせたい人間創られる

不足など言えぬ暮しは三世代

思い出の川辺に残る渡し舟

地の恵み四季折々の味に触れ

高橋操子

借る時はサラ金様とおもたはず

釣り堀の鯉は手のなる方へ来ず

ふるさとの四季急配の荷が届く

善意の重さよ難民キャンプに童話の声

正体はかくし持ってた鬼の面

八木千代

紫陽花の赤は殺してきた月日

昨日のお湯を捨てきれないでいるポット

枯野の入り口で絵具は捨ててきた

火打石だけは濡らさぬ雨の中

雨に彫れば面の目鼻も母に似る

小出智子

故里に近くて遠い冷蔵庫

良心が捨ててあるのでほっとけぬ

押入れをそろそろ整理しておこう

今日も老母とおこったり笑うたり

夏が逝く忘れることも大切な

金井文秋

しあわせと不幸同居の中で生き

今の子に月見だんごは旨くない

テレビの音を少し押さえて受話器とる

長生きをしよう幸せに出逢うかも

イッキイッキわたしは一気に眠りたい

月原宵明

夏の海望遠鏡に狙われる

恩給をもった守衛の挙手決まる

屑篭へ優柔不断丸められ

満腹のとき公平な裁きする

年率を日歩に直してまだ惚けず

藤村〆女

白雲のしばらく止る句碑の上

喜寿金婚炎えた男の物語り
足跡を語る男の喜寿の宴
純粋な男炎を抱いて老い
妻の舵で流れに乗っている平和

川口弘生

誠実さサファイアが澄む九月青
台風の日も遊びに出る若さ
ご先祖がやきもきしてる核家族
こいと又他姓を名乗り孫頼み
心不全と言われた日も明日を持つ

小林由多香

新築の壁へすまない釘を打つ
ライバルのめでたい酒が喉を刺す
心地よい泡退院の髪洗う
悲しみをますます深くする弔辞
大ジョッキの泡にくちびる舐められる

黒川紫香

雨降ったことしか書かぬ旅便り
片恋の女に会釈をされただけ
野良犬と迷うた月の道を行く
ご意見が済めばビールを抜いてくれ
土産など要らぬと万札握らされ

市川鱗魚

元警視不肖なる子と邪魔な髭
裸婦の絵にまとも小咳をした紳士
雑学な父で木馬の太い首
ふる里の話ねつきの悪い父
父の声で叱ると我が家らしくなる

本田恵二朗

つむじ風そっとなだめるのも内助
決めかねる返事が宙に浮き沈み
思索いま夜霧の道で踏み迷い
雨宿り拾ってくれる傘と会い
話上手と聞き上手が乗り合わせ

正本水客

馬鹿を通した友達だけ残る
美しい人の欠伸を見ていたり
舌出して自分の心なぐさめる
兄嫁の大阪弁に負けて置く
よく金が続くと私語を聞いている

児島与呂志

亡者にはなり度く無いけど欲しいもの
今時の人はと言うたらほっとかれ
あれこれと思案したのが馬鹿らしい
他人様のことでは済まぬ破目に会い
金塊に騙されそうな銭を持ち

—同人吟—

秀句鑑賞

—前月号から—

工藤甲吉

壮大なゴミとなる日の地球かな
谷垣史好

気宇広大な句である。国の内外にも目を。

人生観変りましたと退院し
増田次章

病気によって悟りを開く人もあるはず。

うなぎの匂い遠い日の茜雲
稲葉冬葉

蒲焼には必ず招んでくれた畏敬の人亡し。

大陸を駈けた膝にも水溜まる
小西雄々

今頃になって〝戦争〟が再燃とは。

刃こぼれが多くて思い断ち切れず
島崎富志子

青春二度なし。さもあらん、さもあらん。

風鈴が耳元で鳴る兎小屋
岸本豊平次

サッチャーのヒステリーがおかしくなる。

かあちゃんよ今夜も寝酒飲むとする
弘津柳慶

かあちゃんは死んだのだろうか。哀れだ。

目に青葉よくぞ平和に生れける
清水一保

平和であることの意味を忘れないで。

色々な理由で朝の生卵
土居耕花

「色々な理由」が絶妙である。脱帽。

一直線歩いた跡の美しさ
川村映輝

清廉潔白、真実一路。清くて気持がよい。

むしゃくしゃのやり場に妻が居てくれる
若宮武雄

良妻のいる句主は幸せだ。我亡妻を思う。

ドン底の倖せ無色透明で
山本規不風

「無から有を生ずる」。今に運が向く。

本心はきっと淋しい餓鬼大将
野坂なみ

秀吉だって時には淋しい思いに耽った？

寡婦二人亡夫の良さを語り合う
野呂鶏汀

死なれると初めて良い点が分かるものだ。

怖いのはもう一枚の見えぬ舌
田口虹汀

三枚舌もあるという今の世の中。要警戒。

病む友に慰められている見舞い
冨上光代

女同士によくあること。愚痴は慎むべし。

弁護士が詐欺商法の指南番
岡井やすお

他に脱税顧問もある。ああ世も末か。

新体操パッと横臥の像で終え
竹内紫錆

新しいものへの目配りは大切な事である。

山二つ女が寝てる型に浮く
宮川古都路

そこはかのユーモアがただよってくる。

うちだけでは偉い男の咳ばらい
岡田ふみ

実は私もその一人の哀れな男である。

行数に制限があるので一句四行を見込み、無理して二十句にしぼったが、トップが三行ですんだので全部三行とした。それで余白が出来、埋め草が必要になったのである。

さて、中曽根首相はフランス革命記念式典で俳句「三色旗捧げ雷鳴にたじろがず」を作り、彼の国の著名な女流作家を感心させたというが、この句の俳句としての善し悪しは、もちろん私には分らない。

また首相の俳句そのものがどの程度のものかも同様であるが、首相は概ね「自分の俳句は下手だから川柳になりたがる」と言ったことがあったのを記憶している。してみると「三色旗」の句もいささか？だが、ただ首相の「川柳にならないよう」にという作句態度は、裏を返せば、川柳は川柳の本分を守り、川柳は川柳なりに、という事への示唆ともなろう。

「川柳は川柳」は私の持論であるが、〝妙な川柳〟が大流行の昨今。「正しい詩」を復活させた李白・杜甫が川柳界にも出てくれることを祈るや切なるものがある。

川柳太平記(88)

川柳の群像

高須啞三味

東野大八

高須啞三味が交通事故により左手を失ったのは昭和34年2月8日だった。爾来「無左手」をもじって「武蔵庵」を称し、出口夢詩朗名筆の掲額の下で、日毎旧知の川柳人を呼びあつめての川柳サロンであけくれ、好きな弄牌を中心に気楽な晩年を過した。

筆者も戦傷で左手亡失でこの方では先輩、そのためか満州以来無沙汰のこの武蔵庵からよく便りを貰った。拙著「人間横丁」が川雑叢書で出たときは、「川柳雑誌」誌上二頁にわたり過分の賞詞をうけたものである。

「啞三味はね、あれで三十歳の少壮気鋭の頃には小説作家を志しエライ勢いだった。このことが彼の人生に大いにプラスした」とは大陸時代にきいた石原青竜刀の話だ。

それによると既に川柳作家だった彼は、菊池寛の「文芸春秋」や、中村武羅夫の「不同調」に対抗する文芸運動を展開すべく「並行文壇」を創刊。自宅を本拠に提供活躍した。同人には今東光、中野武雄(後の品川陣居)北林透馬、山口青邨、福富青児といった顔ぶれである。結局この清気発らつたる文芸誌も三号雑誌で終るのだが、右の同人中の福富青児がのちに満鉄社員会機関誌「協和」の編集長となり、啞三味をその社員会発刊の出版主任に招くことになる。時に昭和13年5月18日(啞三味書簡)だったとある。

川柳雑誌の古本からノートした資料と、啞三味書簡を加味した高須啞三味なる川柳人生はつぎのようなことになる。

宮尾しげを編「昭和川柳百人一句(初)」掲載の自歴によれば、彼は明治27年2月3日東京丸の内有楽町で生まれた。本名、鷹巣清治(たかすきよはる)で略称、高須清二(たかすせいじ)柳号は彼自身が筆者に説明したところによると、誰も顧りみない不倖せなあざみの花からとったものだそうである。

文学青年高須清二は、明治から大正へかけての往時の若者たちの習性である読むものは明治文学、見るものは芝居、きくものは寄席という諸式にそって、彼は鏡花、漱石、芥川と順を追って後、狂句、川柳へとたどりつく。

彼の厳父は「自由新聞」(板垣系の政友会院外団)を経営。その影響から当然彼は往時のマスコミの波をかぶったわけだが、もの怖じしない記者タイプの洗礼をうけながらも、その父の事業に打ち込めず、その新聞を父の同志に惜しげもなく譲り「実業の日本」社へ入社する。

早大政治経済科中退の彼ではあるが政治より文学が性に合っていて「婦人世界」「東京」などの編集に携わり、ついに大正14年川柳人近藤飴ン坊の縁故で「ラジオ新聞」へ入ったとき、居合わせたのが塚越正光こと柳号迷亭と称する川柳人である。この彼との交友について啞三味にいわせれば「友情の金婚式」だそうで、女房以前からのつきあいとある。

啞三味が一子夫人と結婚式をあげたのは大正13年10月で仏前挙式、ところは川柳和尚で知られる西念寺で西島〇丸の司祭だった。

挙式前に啞三味は迷亭はじめ並いる川柳連に盛んにタコをあげたのが自称インポテンツ（性交不能）その自己ＰＲが強烈なため、海千山千の柳友連も啞三味をすっかり清教徒と信じこみ、これを医すためと称し盛んに春画をはじめワ印の蒐集にこれつとめ啞三味の手許へ持ちこんだものだそうだ。

一子夫人は川柳人五味茶童の令姪で、式は挙げたがなんとインポテンツのはずの花婿がまたたく間に四人も子供を作ってしまった。迷亭はじめ一同は、花婿に持ち込んだワ印が花嫁の官能刺戟に役立ったのだと解釈し一件落着とはいかにも川柳人らしい話だ。

結婚後、啞三味は興文社に入社、小学生全集を手がけたが、昭和3年の興文社時代の彼の大きな仕事の一つは、日本名著全集の編集にたずさわったことで、この中の「江戸文芸第廿六巻・川柳雑俳集」は、川柳界の有名な稀覯本として珍重されていることは周知の通り。これを啞三味が編さんに当ったものでこのことはあまり知られていない。

啞三味の人生にとって最も大きな収穫をもたらしたものは、友人知己に数多の人材がいたことで、特に川柳人では近藤飴ン坊（東京日日社会部長）や矢野錦浪（東京毎夕新聞役員で岡辰押切帳などのベストセラーの著者）を識り、それらの伝手で往時のマスコミ畑で気ままに動きまわれたこと。また川柳界では迷亭がおり、彼の「きやり」に助力を与える一方、昭和7年から錦浪の世話で国民新聞社に転じ、社内に柳友会を作り「柳友」（四六版のちＢ６）を発刊。ここから品川陣居・山路星文洞など多くの眠れる川柳人を発掘したことがあげられる。マスコミ畑と川柳界で、最もあぶらの乗り切った四十代の啞三味の活躍期は、興文社と国民新聞社時代であったといえる。

昭和13年5月、時の大陸雄飛ムードもあって彼は満州大連の満鉄本社出版部へ乗り込むことになる。このあっせんはかつての文学青年仲間、福富青児であったことは前記の通りである。

彼の盟友塚越迷亭もこの頃、台湾日日新報社に招かれ、台湾で活躍していた。川柳人はどこへ行っても川柳仲間が欲しいらしく、彼も台北で「国姓爺」を興し台湾川柳社を作りあげている。時に昭和15年であった。

しかし啞三味も迷亭も、日本敗戦の悲劇を外地でもろにひっかぶることになる。両人ともわずかな身の回り品だけをリュックに詰め日僑乞食の風態よろしく海外引揚邦人の惨めさで帰国した。

敗戦の東北地区（満州）で、開拓地に次ぐ最も悲惨な阿鼻叫喚の地獄絵図を描き出したのは大連だといわれている。

啞三味は昭和21年暮やっとの思いで内地の佐世保へ引揚げてきた。その翌年、帰国後初めてある川柳会へ顔を出したときは「私が啞三味です」と名乗らなければ誰とは気づかないほど憔悴し切っていたという。

かつて大島の対の着物にセルの袴の小肥りの身体で颯爽あたりを払った啞三味の面影はみじんもなかったとは迷亭の述懐である。

敗戦後の暮らしにくい世相のなかで、一年三ヵ月ぶりに東京タイムスの編集の職にありついた啞三味は「これも在京川柳人のおかげ」と筆者あてしみじみとした書簡をよせている。筆者も戦傷の海外引揚者の身だからだ。

乞食にもなれず強盗にもなれず　啞三味

句は敗戦帰国の折の実感句であろう。

「啞三味は私川柳作家である。彼の弱気とまっとうさが最もよく出ているのが川柳だ」迷亭のこれが的を射た啞三味評である。

昭和四十年十一月十一日武蔵庵の遍額を残して脳溢血で死去した。享年七一。徳念院清信士が法名で、東京多摩霊園で眠っている。

★次回は「塚越迷亭」

誹風柳多留廿六篇研究（三十二丁）

本多正範・石田成佳・大屋六郎
八木敬一・鈴木　黄・石田晋一
南　得二・小野真孝・多田　光
故岡田　甫

358　**長うたへ妾枝折をはさむ也**

本多＝暇つぶしに長唄の教本を開いて、三味線の弾き唄いの最中に、殿のお呼びがかかった、それで唄いかけの個所へ栞をはさんで、という場面でもあろうか。

石田成＝賛。情景は種々考えられる。また栞をはさむのは長唄の一種であるめりやす本と思われます。

八木＝礎賛。

妾宅へ旦那が来た、と解してもよい。

多田＝賛。状況は限定できない。普通枝折は論語とかその他普通の本に挟むのだが、お妾だから……。というのであろう。

岡田＝大名の妾だと、普通は「お妾」と書く。従ってこの句は八木説が可。

359　**春の式法事おはり嫁の礼**

本多＝嫁の年礼を詠んだ句。句意は、彼岸会がすんでから、春の賀を述べに嫁は年礼に出掛けたというのである。春―式―法事と仏教関係語を用いて縁語仕立てでまとめた句。

年々歳々花の頃嫁の礼　三九・9
松の義理桜へのべる嫁の礼　四四・9

八木＝ハルのシキホウ　コトおはり　ヨメノレイ、と読むのではなかろうか。

鈴木＝なるほど八木説は面白い。春の正しい儀式の仕事が終ってから嫁の礼が始まるということであろう。

多田＝しかめつらしく表現した点がおもしろいのでしょう。「右大将ヨリ以後、公方家、代々ノ式法ヲ取り立テ、政ヲ能ク行ヒ給フ」（甲陽軍鑑五、品第十三）。

岡田＝同右。

360　**上へ下タに揚貴妃のある真ッ盛**

本多＝仲の町の桜を詠んだ句。

「楊貴妃」は吉原美妓と楊貴妃桜との秀句。句意は、二階には容色艶やかな遊女が並び、桜花満開、仲の町は上も下も百花繚乱の華やかさで、まさに花で埋った感がある。

八木＝上―桜、下―遊女であろう。

多田＝同右。私ははじめ奥様の花見と解して花の山の花とその下での花見に来た美しい奥様と思っていたが、仲の町に限定した方がよさそうである。

岡田＝賛。

361 **娵の礼おはるみじかに成て出る**

本多＝「おはるみじか」はお春短かで、春もあと僅かで去る頃である。年礼が家事や雑事に追われて、つい遅くなるのは嫁の常。もう夏がそこまで来ているという頃になって、ようやく暇を見出して、年礼に出かけるというのである。

かれ是と夏を隣に嫁の礼　五一・22

多田＝賛。**岡田**＝同。

362 **男の中の豆入リが幅をする**

本多＝「豆入り」は男の中に女の交じっていること（『江戸語大辞典』）。「幅をする」はみえを張る、うわべを飾っていばる（『広辞苑』）の意。

男の子たちに交じって遊んでいる女の子が男たちがチヤホヤするのをいいことに、いつの間にか男の上に立ち、男を見下して遊びの指揮をとっている。紅一点のご利益である。

石田成＝ウーマンリブの先駆か、七福神、神功皇后かもとおもいましたが、よく解りません。

大屋＝六歌仙ではないかと思います。

八木＝諺は「女の中の豆いり」のようである。それをひっくり返しにいった趣向であろう。ケースとしては「お妾」を考えていたが、大屋氏説が適当か。

多田＝一般的にも限定しても考えられ、私としては決められない。

岡田＝子供の頃（東京）八木氏のいうように「女の中の豆いり」とはやしていました。女の子の中に男の子がまじって遊んでいる場合です。それを逆にもじったところに、句の山があるのでしょう。多田氏のいうように、一般句の方が強いか。

363 **うしよをひけなど、葵の上の供**

本多＝『源氏物語』葵の巻にある有名な「車争い」を詠んだ句。

祭礼の喧嘩も書いた物語　三一・36

句意は、「牛を引け、かたあけよ」などと葵の上の供があらあらしく相手の牛車に向かって言い放ったなどの意。「がさつなはあふひのうへのとねり也」（二一・32）の柳句もあるから、葵の上の供達は相当に横柄で高飛車というのが川柳作者の見方といえる。

石田晋＝賛。但し「うしよを引け」の「よ」は何か。牛よく引けの音便か。

南＝「うしよ」は「うし」を「よー」と引っぱった語でしょう。

小野＝賛。「うしよを」は「牛を」の言便でしょう。今でも「ウシヨー」などといいます。但し、上品な言葉遣いではなく、がさつな供の者を表現するためにこのような使い方をしたものと考えます。

多田＝小野説賛。**岡田**＝同。

364 **礼帳に去年とやいわん硯箱**

本多＝「礼帳」は年始帳のこと。年礼に来た人毎に、姓名を記して貰う帳面。これを玄関に置き、いちいちの応答を省略するために置かれた。

句意は、礼帳を前にして新年の賀をという時、礼帳の脇の硯箱が、去年のうらみを語っているかのように感じられる。物言わぬ硯箱ではあるが、「きのふの姿引かへて御慶也」（二六・21）と背中合わせの悲喜の感慨を硯箱にたくした句。

大屋＝賛。古今集巻頭の歌「年のうちに春は来にけり一年を去年とやいはん今年とやいはん」（在原元方）の文句取り。

多田＝硯箱は「去年とやいはん」去年の（さらにその前年も）と同じだというのではないか。

岡田＝句は、めでたい正月、去年の暮の気まずさもガラリとお互いに忘れることが出来るのは硯箱があって顔を合わせないですむため。

江戸川柳に現われた八百屋お七 (二)

阿達義雄

(二)お七と吉三

天和二年十二月廿八日未の刻(午後二時頃)本郷駒込の大圓寺から出火するや、折しもの西北の風に吹きまくられて火は次第に拡がり、本郷・下谷・神田・日本橋・浅草・本所・深川の数万の民家を焼き払い、その他大名屋敷七十五、旗本屋敷百六十七、神社四十余、寺院四十八という広地域の多数の建築物が紅蓮の炎によって一なめになめ尽されてしまった。

井原西鶴の『好色五人女』には、この火事によって、お七一家がその旦那寺たる吉祥寺に避難したと考えて、「おしつめて二十八日の夜半に、わや〳〵と火宅の門は車長持ひく者……」と書いているが、お七一家の実際避難したのは小石川の圓乗寺で、その火事も大圓寺から出た火事ではなく、元和元年丸山本妙寺から出た火事なのである。だが、江戸文芸や演劇は、皆、「八百屋お七」文芸の先駆たる西鶴の『好色五人女』に做って、お七の家も此の火災で類焼し、一家を挙げて駒込の吉祥寺に避難したことになっている。

此の吉祥寺に美しい小姓がおって、ふとした機会から遂にお七と恋の語らいをするようになったのであった。この小姓が吉三郎即ち吉三である。

〔注〕お七と恋に陥った若衆の名を「好色五人女」は小野川吉三郎とし、「笑委集」には生田庄之助、「江都著聞集」「我衣」は山田左兵衛としている。が、山田左兵衛という方が実名のように思われる。

お七が吉祥寺の小姓吉三と恋に陥った動機について西鶴は次のように巧みに描いている。

「やごとなき若衆の銀の毛貫片手に、左の人さし指にあるかなきかのとげの立ちけるも心にかかると、暮方の障子をひらき身をなやみおはしけるを、母人見かね給ひ、ぬきまいらせんと、その毛貫を取りて、暫くなやみ給へど、老眼のさだかならず、見つくる事かたくて、気の毒なる有様、お七見しより、我なら目敏きの目にて抜かん物をと思ひながら、近寄りかねてた、ずむうちに、母人よび給ひて、是を抜きてまいらせよとのよしうれし。

彼御手をとりて難儀をたすけ申しけるに、此若衆我をわすれて自らが手をいたくしめさせ給ふを、離れがたかれども、母の見給ふをうたてく、是非なくも立別れさまに、覚えて毛貫をとりて帰り、又返しにと跡をしたひ、其手を握りかへせば、是より互ひの思ひとはなりける。」(『好色五人女』の「恋草からげし八百物語」)

右の文によっても知られるように、お七は積極的な、なか〳〵隅に置けない女となっており、西鶴は彼等の恋愛のモチーフを、如何にも西鶴らしく肉感—触感から入ったものとして表現している。

江戸川柳の八百屋お七関係の句は、巷談によって詠んだものが多いようであるが、仔細に調べてみると、むしろ紀海音の浄瑠璃、又は之を骨子として趣向を加えていった歌舞伎芝居の影響が大きいことが認められる。

いたづらな娘八百屋と材木屋(柳多留一六七編・6)

(『恋娘昔八丈』における白子屋お駒の実名はお熊で、材木屋の娘)

吉祥寺は時ならぬ火災避難客で、長老様の

寝間から赤子の泣く声が聞こえたり、仏前に女の腰巻を取り散らしたり、淫婆気の多い寺となってしまった。川柳子は若い娘のお七からお雛様の壇などを連想して、

吉祥寺雛に毛氈借りられる（柳多留四編17）

打敷をしいて八百屋は雛を立て（『桜の実』6）

何しろ、死者の衣服で造った仏壇前机の敷物、即ち打敷を雛壇の毛氈の代りに使って、お七のお雛様の祝をしようというのだから、寺内の小姓や小僧共にまで、気を浮き〳〵させるわけで、こんな雰囲気の中に、小姓の吉三と八百屋のお七とが、遂に二世を契るようになったのであった。

川柳子は振袖紅鹿の子のお七が、前髪姿の美少年の吉三にジリ〳〵接近していく刹那の情景を次のように巧みに捕えて、

耳のわき掻き〳〵お七そばへ寄り（柳多留三・41）

と詠んでいるが、之は恐らく歌舞伎芝居の濡れ場のスケッチであろう。なお、この舞台スケッチと見られる句に、

八百久が乾物箱は壁に書き（宝暦十三年信2・ウラ）

などというのもあり、右は八百屋久兵衛見世先の場の舞台装置であろう。

この句は宝暦十三年十一月十五日開の川柳評万句合中の、信印二枚目の裏に記されてある、芝の「あふみ」という組連への投句で、

「こしらへにけり〳〵」の前句（即ち題句）に付けられた句であることを知れば、舞台装置（背景）の写生句であることが一層明らかになる。

なお、参考までに、この十一月十五日開巻の万句合に投稿された句数を調べてみると、「惣句高九千貳百九拾三貫」となっており、実に万句合の名に背かない莫大な数と言わねばなるまい。

この万句合の選者は柄井川柳で、入選句は摺物にされ、開巻の日付によって、天・満・官・梅・桜・松・仁・義・礼・智・信・鶴・亀等の合印がつけられている。右の句は宝暦十三年の摺物の信印四枚ある中の、二枚目の裏に見える句である。

さて、八百屋お七が吉祥寺の小姓と濡れ初めて次第に熱くなり、火のようになって、遂に其の身を滅ぼす元となったことを、

八百七は小姓を呑んで暑くなり（柳多留五〇編18）

八百屋だから胡椒を売っている。之を呑めば身体が熱くなる。それを小姓の吉三と関係して、恋の炎を燃やすようになったことに掛けて言ったもので、或はまた少し破礼気味にお七めは小姓の水が毒となり（柳多留九七編3）

などとも詠んでいる。

痔の神へお七何だか願をかけ（柳多留一六五編10）

お七が痔疾に悩んでいるのではない。お七が愛人小姓の吉三の痔疾平癒の祈願をしているのである。痔の文字は寺と病垂から成っているが、その通り痔は寺において特に多発するとされている。寺小姓とは和尚に召使われている美少年で、稚子などとも言われ、多くは和尚の男色の対象にされていたのであった。

江戸庶民文芸では、男色に痔疾はつきものとして扱われている。之を裏書する参考句を示してみよう。

底倉は寺方の名をよく覚え

（宝暦十二年義印6枚目）

〔この前句は「うやまいにけり〳〵」である。箱根の底倉温泉は痔疾の湯治場として知られている。寺方の客が多い。〕

仕合せな小姓始終はぢもち株（柳多留六九続編32）

〔地持と痔持との洒落。和尚に可愛がられているのでいつも痔の気味〕

痔になるは承知和尚と小姓の其（柳多留一一一編17）

〔痔を其の持（ぢ）にかけたもの。持（ぢ）は持其の略称〕

芳町の釜は箱根でいかけさせ（柳多留九四編28）

〔芳町の釜は、芳町の陰間（男色の相手）のことでその痔を箱根の底倉温泉で治したというのである。釜は尻又は肛門のことで、男色に「お釜を掘る」などという、その釜。〕

一説によると、吉祥寺の和尚が吉三とお七の仲を割いたのは、和尚が嫉妬しての業とも言われている。（つづく）

黒川紫香選

藤井寺市　赤木和子

一人一党どこで死のうと生きようと
小石なら跳び越えられるほどの鬱
愛らしきオバケその名もQ太郎
夜が明けて街からやって来た刺客
雲を追いかけて不思議の国に着く

滋賀県　安田志津

仲の良いとなりへ向いて花が咲き
合作の絵日記も待つ新学期
出ていった娘の便り待つ案山子
麗人のとなりの席が空いている
日記帳フィクション入れたい時もあり

大阪市　清水康恵

ふり返ることはよそうよふたりなら
中流の想い広げるいわし雲
いたわりの言葉待ってる足の裏
一本の釘も打てない妻だから
いろいろの言葉を捨てたごみ袋

尼崎市　福田礼子

滝壺を越えると水も楽になる
徹夜して二倍生きてる訳でなし
怠け癖のついた時計がすぐ止まる
何でもない人と夜明けに飲むコーヒー
蜘蛛一匹殺し動悸が鎮まらぬ

八尾市　高杉千歩

老人医療ますます募る医者嫌い
得手勝手遊びにいくらし多弁さよ
人情につけこむ狡さ見てる雑魚
長月や笑いばなしと散文詩
夫婦絵図妻はいつでも釦つけ

今治市　野村京子

娘に妥協出来てカレーのうまい事
初夏の陽にピエロの鼻が少しはげ
引き金をひくのはいつも女たち

影法師に手紙書いてる失意の日
私の話聞いてきいてと水中花

熊本県　大川幸子

父の傘まだ破けたら困っちゃう
心の隙間がサイン読み違え
知り過ぎて出過ぎた女になってくる
何となく眺める星が語りかけ
飲む事へ女たのしくついて行く

熊本市　永田俊子

散らしても片づけてもさびしい独り者
迂余曲折干潟にあった水の道
掃除機の音に吸わせる夫の愚痴
あじさいの気ままを見せる七変化
先頭がころべば喜ぶあさましさ

熊本市　宇野昭代

三人目育児日記はメモ程度
気が付けば私はピエロの役まわり
プロ入りの打算へ本人そっちのけ
会える日の鼓動聞いてるコンパクト
おみくじの凶へ神様変えてみる

尼崎市　田中晴子

ひらがなで不実を責めるあきざくら
仏彫る木の香が遠い罪を消す
泣きそうになると心経口ずさむ
豆腐屋に寺町あたり下駄の音
天国は電話の届かぬ距離である

東予市　小山悠泉

ピッチャー強襲急所狙うた訳でなし
自己暗示かけて自信を取り戻し
炎天へ打水湯気になる酷暑
言い訳をする唇が乾き切り
全快へ疲れ忘れた千羽鶴

西宮市　紀市郁栄

二度と逢わぬ遠くへ飛ばす夏帽子
泣かれると弱い男も黙りこむ
おせっかいな義理人情が多すぎる
無位無冠亡父の肖像かけてある
老練な棟梁あまりしゃべらない

長岡京市　木本如洲

年金がくる日めがねに艶を出す
八十の生涯蒼い海を見ず
鉛筆を削り聞いてる裏話
友だちになれぬ団地の赤いバラ
明日のない地図が机に置いてある

名古屋市　藤井高子

愛される老いを見つめて星降る夜
ひとり咲くことの哀しさ鬼あざみ
今日へ明日継いで惰性と呼ぶ湯舟
心底は読めず靴音よくひびき
正装の大和撫子汗がない

鳥取県　中原みさ子

カゴメの輪抜けた小鳥は森へ行く
賢さを見せず女の思慕に逢う
亡父に逢う夜釣りの海が凪いでくる
二十五時ネオンを消して闇に出る
釣り趣味の夫へ包丁研いでおく

鳥取県　中原汲香

触れてみた心はみんな温かった
菩薩の首で青い勾玉眠らせぬ
悪友になりましょうかと声をかけ
人生の下り坂にも友がある
めでたい日迎えて老母に役が無い

守口市　森川まさお

思うまま曲って胡瓜場所をとり
川沿いのタバコ屋パン屋水着売る
熱帯夜隣が不意にピアノ弾く
人去ったあとの小川が音を立て
銀行でまごつき人の目に出合い

西宮市　松本一郎

楽しさと疲れも少しバスツアー
遊ぶ子を横目で塾に子が急ぐ
昔々そんな童話が消えてゆく
竜安寺石の遊びと対話する
渓谷に庭に置きたい石がある

米子市　茂理高代

台風を知らす風鈴鳴りやまず
突然に孫に赤紙来る予感
病葉はひらりひらりと秋運ぶ
竹を踏む足のリズムが歌にする
草笛を吹くとたのしい道になる

富山市　舟渡杏花

金魚さえ器量よしから掬われる
棚ざらしの般若の面と向い合う
昏れかたの十一階の旅愁とや
錯覚と三面鏡が承知せず

熊本県　高野宵草

のど鳴らすうちに切られた猫のひげ
しゃしゃり出た妻へセールス断られ
虫も食う野菜だ安心してたべる
写真撮るからマニキュアも塗りましょう

熊本市　黒田緑

塾の子の頬に涙が見当らず
それとなく励ましている褒め言葉
街角へ空しい風を待つ独り
ポーズとる時の虚像は誰のもの

滋賀県　久保和友

海苔を干す浜には邪魔な露天風呂
還暦後に砂漠の旅を考えた
耳飾りより横顔が気にいらぬ
昼花火しきり町はずれのパチンコ屋

笹舟よとどけ女の片思い
根廻しが過ぎて不信の音がする
愛される日の夏帽子白と決め
源氏蛍も平家蛍もやがて死ぬ

鳥取県　土橋　蛍

娘の本音それとなく聞く散歩道
家のローン終って夫婦で旅プラン
挫折した影を月夜に見失う
老いの淋しさ誘われて摘む毒の花

尼崎市　丹下玉子

湯けむりの中で次なる旅行練る
女系三代すべて観てきた雛の顔
大型店に客を取られて招き猫
午前二時ビデオ回している男

高槻市　河瀬芳子

うれしい夢まくらに御礼言いましょか
味見てと嫁は優しい事も言う
ふだん着が好きで達者な母が居る
淋しゅうて今夜は酔うて見とうなる

岡山県　山本玉恵

年金の暮しへ義理がおびやかす
口軽へ話の的ははずしとく
ハンカチでぬぐえる程の軽い嘘
ボーナスは税金の額聞いただけ

京都市　松川芳子

笛吹いて空の旅でもしませんか
膝少しくずして恐い話する
ローカルの始発一人を乗せただけ
バーゲンで迷った服がよく似合い

兵庫県　森脇和子

子に誇る略歴などはない父で
旅心しきりに夏の風動く
孫からの絵だより山川夏の彩
故郷の祭を想う冷や奴

大阪市　上田柳影

小料理と看板だけにある構え
チャンネルを独占させて子煩悩
口紅をぬりくらべてる退社ベル
男名で来ても字体が承知せず

熊本市　北川一進

ジーパンをはくと女が消えそうな
鷹になる希望托した塾通い
運のよい女でだんご鼻がつき
横向いて拗ねてる顔が好きなんだ

兵庫県　脇田米朝

金持ちで後家とは話うますぎる
折れた傘うれしく借りた雨やどり
千円を毎朝貰う下級武士
のど乾くときはお茶より酒がよい

尼崎市　山田保蔵

尼崎市　児玉歌子

残り火へまだ策を練る厚化粧
ガンだとはまさか思ってない笑い
玉砂利をすっかり濡らす通り雨
彼のことだけで埋まる走り書き

高槻市　笠嶋恵美子

夏草やおんなの戦静かなり
いつの日か飛ばせてみたい鶴を折る
困ったらおいでなさいと仏様
やさしくてロマンチックで好きなひと

吹田市　茂見よ志子

弱気にはなるなと風が背なか押す
通過する電車に裾を乱される
試着室まだ着ぬうちに如何です
新品を買っても包丁捨てきれず

弘前市　田中叶

信号は青だよ愚図なお父さん
宴会を抜けてロビーで見る新聞
女も吸う煙草を男買いに出る
解決になってはいない一人の死

今治市　月原つくし

おかめの面はずす里には母がいる
冷静さ粧う舌がもつれ出す
わが妻をさんづけにして父弱し
一善のない日もともす仏の灯

和歌山市　桜井千秀

台本を外しスムーズになる舞台
譲られた席で素直に目をつぶり
着飾ると世辞がすらすら口に出る
割り箸の不機嫌歪になって割れ

羽曳野市　麻野幽玄

葬送の日はもう鳴かぬ烏なり
蘭鉢へ蘭納って心満つ
京菓子で提げ訪うお茶のすきな人
まだ不安残る退院だがはしゃぎ

羽曳野市　吉川寿美

刺ぬいて抜いて優しい鬼になる
多情多恨な風にゆれてる縄電車
男にも時にはほしい東慶寺
深爪に追いつめられた女の記

大洲市　横田放人

優勝のまず監督が宙に舞う
お若いと言われうっかりそう思い
花開く一つ一つにある香り
転んだ子三つ数えてやると起き

鳥取県　西川和子

女です虫歯の痛みなど隠す
足元を見てから前に進みます
友と旅想い出詰める壺を買う
記念日の指輪絶対はずさない

唐津市　米倉彩女

可愛い年寄りになれという鏡
ごちゃごちゃとうるさいやつが先に酔い
背中掻く柱を一本決めておく
老い先のこと尺取虫に聞いてみる

八尾市　鷲見章

わらび餅団地の昼を拡声機
古都税に揺れて仏に暑い夏
ベランダに母を待つ児のシャボン玉
湯の街の路地で出合った塾通い

兵庫県　奥野テル

茶柱に吉を信じて朝の靴
正直な鬼で切札など持たぬ
紅白の荷物あちこち大安日
愛一つひとつ編み込む毛糸玉

尼崎市　鈴木良征

ほどほどに降れば琵琶湖の水も清む
輸入品買えと言うので豆腐買う
臭い物にする蓋がなくて困る
曲水の宴をしのぶ柿葉寿し（奈良大会にて）

大阪市　古川美津枝

ソーメン流し美人の箸にかかりたい
錦絵を目のあたり見る鉾流し
一城の主宣言ワンルーム
愛用の僕のベレーにあるドラマ

岡山県　千原理恵

生きざまは語らぬ母の座りだこ
シャンソンを唄うにふさわしいベレー帽
伝書鳩放してからの空が好き
二十一世紀のロボット夢枕に立つ

鳥取県　土橋はるお

臆病な子には麻酔がよく効いた
京都だよ亡母のお骨に言い聞かせ
噴水に二人で触れてさようなら
勿体ない一番前で法話聞く

鳥取県　津村八重子

窓越しの雀が朝の夢くれた
弱点は言うまいそっと誉めておく
湯煙りが豊かな話題つつみこむ
ボソボソと思い出が墓地から洩れる

岡山県　杉本伊久栄

寄せ書きの日の丸父の青春譜
来年は咲かそう菖蒲の株貰い
改築で余儀なく気兼ねの貰い風呂
美しい夢で終った片思い

愛媛県　八塚三五島

平社員の方が第二の職につけ
酸欠で不平分子の中にいる
世話好きの二人いい線だしてくる
墓地にまで栄えてる家絶えた家

吹田市　栗谷春子

ゴキブリの律義時間も道順も
潮時と知って膝から下りる猫
スリッパを替えたそこから梅雨あがり
枇杷の種あんな所へ行くなんて

尼崎市　吉永伊三郎

飾るもの外して淑女露天風呂
年金で小さなラッパ吹いている
七色の園児の傘に雨が降る
御先祖は立派だったといい聞かせ

吹田市　西岡豊

再生のビデオが悟す舞扇
笛吹けばわんさと踊るいい仲間
ヘルメット取れば優しい主婦の笑み
元校長自治会長にかつがれる

弘前市　斎藤ゐん

教室の窓から消えた村のかじや
三角も四角もやがて○になる
名人のねぶたは空へ飛びそうだ
りんごの実一つ一つに陽は昇る

旭川市　朝倉大柏

さっきいたベレーまだいる花時計
飲んで来てまた晩酌もちゃんと飲み
前列の頭をヤジが越えてくる
愛のムチなどと本当は腹を立て

京都市　森川春子

音のする花火がこわい手を握り
キャンプの火消えて歌声まだ残る
着こなして外人さんの粋なこと
振舞いの酒にみこしの威勢よし

鳥取県　羽津川公乃

カロリーも目分量です母の味
日々好日虹の行方は気にしない
脇役に賢い妻の居る安堵
税金の額は中流かも知れぬ

守口市　結城君子

表札の横へおしうりお断り
ロッキングチェアの知恵は宙にうく
落し穴落ちた方にもある苛責
腰痛が治ると口数多くなり

伊丹市　山崎君子

サングラスまぶしい恋をさけてゆく
夏の夜挨拶ぬきの友と逢う
知恵袋普通サイズを持っている
知恵袋少さいままで生きている

吹田市　井上照子

針の穴にじんで少し老化見え
葛藤の果てに一夜で消えた夢
傷跡の記憶日ごとに癒えていく
神様も多忙できいてくださらぬ

倉吉市　広本文子

病む息で紙風船をふくらます
握りつぶす話を森にすててくる
ライバルを迎える花を活け終る

鳥取県　さえきやえ

八人目の敵の斟が気にかかる
花の噂風は孕んだままにげる
ぴったりとついてくるから裏切れぬ

静岡市　渥美弧舟

古希やよし足跡残す一行詩
渋滞の窓夕焼けの富士眩し
孫の手を握り温める老夫婦

尼崎市　野瀬昌子

爪染めて大人振ってる幼な顔
病んで見て母の在ますはありがたし
他人様眩しく見える病がち

島根県　岩田三和

嫁にきてカスリのにあう花と咲く
桑の実が下校の子等にゆさぶられ
天井の木目にそうて夢は飛ぶ

大阪市　末永芙久枝

燃え尽きて限界を知る夜のコーヒー
家計簿に医療費ばかり書いてある
捨て猫を飼って孤独を慰める

米子市　祝部寿美子

パレットの混濁部屋から動きだす
午後の部屋おしゃべり好きの花をおく
太陽と語れる部屋を開けておく

愛媛県　西山えつ美

スーパーの軒でつばめの巣に出合う
子守り歌変わりに絵本読まされる
ほんの少しやせて目立たぬ肥満体

寝屋川市　立床晴風

うちの三毛小骨をたてて帰って来
美女連れた上司と出会う戎橋
地蔵さんへ傘差し掛けた通り雨

大阪市　桝本蕗児

女です美容院へ行く化粧
残高をながめて暮らす余生なり
女とはいくつになってもドラマ好き

大阪市　宇久はる子

四帖半どう置き換えても四帖半
地下街を小犬が散歩雨の午後
式次第何べんもみる義理の席

米子市　光井玲子

家中が好きでたまらぬ茄子の艶
ふんぎりがつかぬ間に自動ドア開く
思い出の軍歌につきる夫の酒

米子市　小村てい子

仁王さん笑ってごらん楽になる

山寺の風の音だけ動く影
謎解が出来ないままに仰ぐ天
竹原市　信本博子

神域へ踏みこみ科学者神に逢う
ポケットの底にまだまだあるロマン
庭いじり今はペンダコ消えており
貝塚市　池田寿美子

あの世には落し穴などきっとない
九月十一日命日
宵待月亡夫の好きなレコードかけ
アルバムを整理している有難さ
大阪市　亀井円女

二、三本捻子の抜けてる呑気もん
枯れる日を夢に見ている水中花
下手なうそ夫の小鼻が動いてる
岡山県　小林妻子

散り際は牡丹に聴いてはなりませぬ
頂上の辺りは激しい風が吹く
ガラあきで走る親子の縄電車
羽曳野市　田中隆二

登校拒否したい先生もいるだろう
いずもやが食卓に乗る土用丑
二次会の帰りタコ焼買ってくる
河内長野市　大西文次

離婚すると言われないかと心配で
げんまんの好きな小指をもてあます
しょうもないことにこだわるのは妻だ
鳥取県　乾喜与志

重荷おろしてから西方の旅に
賢い妻へ鼻毛を抜いてみせておく
海老で鯛釣って喉もと犯される
倉吉市　淡路ゆり子

電柱を数えて故郷辿り着く
亡母の忌を迎える準備ふとん干す
夕焼けに呑まれてしまいたい孤独
山口県　高崎雀声

残り酒集めて幹事何次会
子育てがすみスポーツの灯に集う
七転び何で八回起きられる
出雲市　小白金房子

葉の裏を返せば動かぬかたつむり
蛇口から今朝が始まる水の音
掛軸の読めぬ字も賞め茶もよばれ
岡山県　福原悦子

夕立に座り直した長話
夏帽子夢を乗せてと旅に出る
母と子の夢を広げる青い空
高知市　北川竹萌

中瓶のビール疲れを忘れさせ
酒二合飲んで二合を喋り出す

大尉眠れず移る大広間

出雲市　小玉満江

バターたっぷり今朝もパンが焼け
植木屋は遙か遠くで煙草喫う
風呂の順アミダできめるナイター戦

西宮市　秋元てる

尊敬する人のどこかに父の影
生きているだけの人生西より雨
ちょっとだけのぞきたい二十一世紀

大阪市　渡部さと美

言いすぎをわびたい酒を下げて来る
饒舌も少しすぎます保険屋さん
ロボットに似たバイトから買うて来た

新潟県　高野不二

事故の記事笑顔の写真まで並べ
研修旅行泊りはやっぱり温泉地
金が有り余っていてハト麦茶

高槻市　笠松高子

現代っ子塾の梯子で遊びます
子離れし主婦あつまって何処へ行く
今日も雨あじさい一輪活けて観る

泉南市　坂根流水

盆近し空から故里俯瞰する
独り旅寝言と鼾憚からず
妻の亡い独り旅です風と往く

兵庫県　東浦砥代

中流の生活が皿に盛ってある
捨て去った女が鏡の裏にいる
正直に話せばこわれそうな夢

尼崎市　尾宮弘治

そうめんの長さに合わせ息をつぎ
高砂を謡った祖父が高いびき
盂蘭盆の灯に囲まれてバスが着き

尼崎市　佐藤美代子

虫かごに小鳥飼ってる社長さん
筆まめにたまの返事は金送れ
関白亭主包丁だけはといでくれ

大阪市　横山為子

アジサイの赤に染まらず雨蛙
内緒ごと知っているから内緒にし
宿かりの手狭になって蔵替えす

鳥取市　若林一止

若後家の喪服それでも紅を刷き
直線が最短拒離とは限らない
腹の皮つまんで老いを知る五十

堺市　桜沢あか里

問うことは止めよう糸が縺れ出す
気配りが過ぎて風船割れている
梅雨去れば銀河鉄道よく走る

大阪市　今西静子

小さき小さき去来の墓に言葉でず
自問自答一日が又過ぎてゆく
清貧の抵抗鍋を光らせる
富田林市　田原久子

私にも覚え牧水好きでした
骨もなき小さな墓よ終戦日
酒タバコさびしい女がポーズする
竹原市　石原淑子

少年のような瞳をした方と会う
ふりむけばいつでも妻がでんと居る
パラソルの下ではみんな夏美人
青森県　福士トキ

スタートに孫が並んで目に涙
旅帰りずっしり膝に孫重し
反抗期空へ大きく毬を蹴る
川西市　野村静雄

足跡の無い人ばかりどやに居る
人間の弱さが酒の上に出る
寝返っているらしいのが一人見え
堺市　江辺天鳳

中国旅行（三句）

謝謝（シェーシェー）の一つ覚えで事が足り
この足とこの目で長城見とどける
憧れの寒山寺なり詩を詠ず
岡山県　伏見すみれ

石蹴りの子供夕焼け唄となり
編物の趣味を生かして子を育て
珍らしく早起きすれば雨となり
高槻市　芦田静江

趣味の彩溜めて満ち足る一人べや
花いちもんめ添うてよかったうば桜
肩パット張って風切る爪の色
橿原市　西本保夫

朝の陽にさわやか妻の話し好き
聞きたくない話が妻の足を止め
花ひとつひとつに話しかけ水をやる
新発田市　上鈴木春枝

育児書に子への答がみつからぬ
鍵っ子の帰宅迎える母の文
ストレスへ派手に笑った電話口
竹原市　岩本笑子

線香花火たちまち子供と同化する
新札に慣れてもサイフにとどまらず
この辺が潮時御飯さっと出し
竹原市　佐藤令子

擦れ違い銘々皿も淋しかろ
少しずつ外野に回る父の椅子
酒の味男が男に弱くなる
鳥取県　灘尾民子

ファッションショー犬もおしやれをする世だな

姑を生き字引とし丸く住む
息切れをするまで走る父の貨車
唐津市　浜本ちよ

佐志川の流れに散歩の足伸ばす
善人はルール守っていつもビリ
拾う神捨てる神にも手を合せ
愛媛県　石手武

碧い瞳の大げさな程ワンダフル
婦人服売り場で妻は生き返り
形だけ座禅痺れがきれただけ
茨木市　井上盛雄

先頭が好きで一番前に乗る
一発で熊を仕留められぬとき
蹲いた石が教えてくれました
青森県　波たただお

手応えを期待し今日も釣りに出る
釘一本打つにも妻と意が違い
珍らしくなった燕に話しかけ
青森県　荒田つる

親バカの顔舌うちの程でなし
アフリカの飢餓にすまないダイエット
姿婆と縁切る日は予告なしに乗る
島根県　堀江百代

あと味の悪いあの日の口喧嘩
鈍行も乗れば意外に味があり
一日が初まる朝のお味噌汁
鳥取県　福田あや子

故里へ帰れば五体のネジが抜け
帰省する度に故里年を取り
飛込めばやんわり包む母の海
島根県　喜島ノブ

待ち合い所誰が忘れた藁帽子
庭の木に照る照る坊主泣いて居る
雨洩りに天井裏の世界地図
岡山県　後安ふさえ

豊満な白桃思わす秋の女
パトロンは大物らしいと言う噂
心眼で貴女の人柄見えてます
岡山県　富坂志重

派手を着て皆の視線がこそばゆい
向き合って話す小鳥の愛の声
朝顔のコボレ種にも二輪咲き
泉佐野市　真崎浪速子

六十過ぎ生き甲斐くれる初孫が出来
表札に肩書があり故郷の実家
父母の背中にあった温い愛
米子市　川上より子

良妻の面の在庫が増えている
戦列を離れて野の花が見える
生き字引返上ワープロに凝っている

ほどほどに妥協するのが老いの知恵　八尾市　松下蕉露
止まり木のない生活が板につき
拍手するためにだけ出る会議　広島市　望月晴彦
電子レンジの中で時間が切り取られ
人工衛星もう帰らない空の星
父も子も無口火花は散らさない　益田市　里本たかし
前線は動かず糸瓜伸びつづけ
責任を負わぬ広報車が走る
離婚届預けた儘に寡婦となる　米子市　金山夕子
太陽に詫びてくちなし白く咲く
見たいとき見えない虹を追いつづけ
花いっぱい花のサーカス旅が好き　大和郡山市　岡田寿美礼
七十八今も健在船頭さん
はす池で小鳥長閑にさえずりて
カルガモが親子十三羽無事引越し　西宮市　飯森泰世
宝くじもう買うまいと急ぎ足
我が庭のトマト真赤になりました
あまだれに面影しのび独り寝よ　八尾市　椎尾公子

義歯に義歯粗食になれた老夫婦
死んだ子を指で数える萩の花
交番の壁に指名手配の写真貼る　指宿市　渡邊伊津志
孤独癖裏に潜んだエゴイズム
お裾分け又裾分けの目刺焼く
ロッキングチェアの脚の独りごと　吹田市　山田里子
機械では落ちぬ汚れを母の手で
陸橋の影を轢いてく救急車
ベランダの曲った胡瓜が人気呼ぶ　堺市　宮本かりん
残り物集め豪華な昼の膳
手抜きした夕餉に花を少し添え　藤井寺市　菊地繁男
退屈な猫トイレまでついてくる
コーヒーのカップの中で痴話喧嘩　弘前市　真喜内實
りんごみな幼く青葉よくそよぐ
或る宵の妻はやはり他人でした　大阪市　田中節子
肩書をはずした夫と昼を出る
きれいに平げる孫等の食欲さわやかに　新宮市　山田平和
台風が来そう夜食を用意する

エリートでない雑兵に人間味
唐津市　山口高明

一群に成って強がる雑魚の群
泳ぐ気も無いのに女のニューモード
唐津市　筒井朴竜

中流を自負す意識も平和慣れ
鍵っ子の扉も叩け星の使者
八尾市　葛幸子

駅前の鯛焼き女によくもてる
待ち呆け伝言板に未練あり
和歌山県　森三枝子

梅雨晴間旅に出たがるカタツムリ
台所母の性格置いてある
尼崎市　木下義嗣

妻の留守親しい女に長電話
生涯を歌に綴った母の彩
尼崎市　的場十四郎

盛りレタス今宵飾って主を待つ
近頃は鬼の下着も花模様
豊中市　一瀬福一

あるだけの指が光ってまだ欲が
そむかない女となった丸い爪
八戸市　島田昭治

飲めぬのに今夜は飲もう嬉しくて
退職のお礼参りで惜しまれる
大阪市　大倉圭介

ベランダでふとお隣の猫の鈴
呆け老人時にひらめくこともあり
兵庫県　円増貞子

汗拭きつカレー二杯目を食う若さ
合図なぞいらぬ家族の回す独楽
岡山市　中嶋千恵子

見栄捨てた女の足にローヒール
女です紅を引きたい時もある
米子市　大田みさと

船旅も港近くでひとつ揺れ
あの山に神も仏も鬼もいる
島根県　高尾よし子

こけし選ることも旅情の旅ゆたか
歩の悪い話は補聴器外しとく
茨木市　堀良江

乙女の目になって見上げるねむの花
丁度よいとこで目覚めて降り支度
守口市　若林市郎

二次会へまだ飲み足らぬ顔が寄り
鮒釣りが性に合った人になり
呉市　蔵重成人

釣書まで十八番を書き添える
ささやきの中に嫉妬が込めてある
島根県　園山世似

快く蝸牛遊ばす梅雨の墓
紫陽花の喜怒哀楽の顔の色
岡山県　池田半仙

湯加減がよくて鼻唄ひとり出る
吸い殻を溜めてはなしが捗らぬ
兵庫県　野々口悠也

この石に眠る亡父いる亡母もいる
背伸びして歩けば老骨煙がられ
大阪市　冨岡温子

確率を裏切る様な雨となる
定年の朝もやっぱり五時に起き
堺市　山本半銭

この辺で手を打っておく顔になる
鎌倉
駆け込み寺あじさいの彩静かなり
大阪市　堀口欣一

歌舞伎座と科学万博二日旅
ああまた夜が明けたなというくらし
倉吉市　田中八太朗

腹が減る嬉しいことに腹がへる
二本目は妻をおだてて飲むビール
広島県　田村新造

幸せは夫婦岩背に写ってる
雨降りやまず裏の山気にかかる
兵庫県　平和茂一郎

阪神が負けたと子供早寝する
派手になる結婚式に悩む親
岡山県　平田たけよ

嫁ぐ娘に笑い袋を用意する
日盛りをよけて草取る祖母の日々
岡山県　戸田種子

バイトして大学出たが職が無し
うそ一つ言えぬ女に生きた馬鹿
和歌山県　北山凡太

養生の為と時々義理を欠き
軽量を誇りにしてる娘達
唐津市　相葉あき

飴一つ貰い入歯が持て余し
気楽です二十四時間思うまま
島根県　菅田かつ子

無力だがたまにはギャフンといわせたい
この時とばかりボーナス振って見せ
島根県　小田川智重子

受けやすく投げれば軽く受けてくれ
腕によりかけても漬物には勝てぬ
奈良県　和田萬里

梅雨空にひっそり閑と高野山
女学生気分抜けずに五十路越す
岡山県　松本元江

片恋の窓に冷たく星が降る

若人の熱と力が湧き上がり
大阪市　野村八重

風鈴の音にそよ風あるを知り
川ふちの柳静かな昼下がり
高知県　小澤幸泉

出張の宿で上司の背を流す
一日はまだ終らない昼の酒
西宮市　待田麻黄

大鳴門橋一番乗りを待つ車
病む母へまじない枕の下に置き
大阪市　服部頼一

突然の客にまごつく妻の留守
旧式の親の頭を子が舐める
大阪市　塩田新一郎

大いなる旅を男が独り行く
お酒やめてと言いつつ肴作ってる
岡山県　牧野秀香

鉄橋を渡ればトンネル待つ人生
憶い出は良かった事だけ十三忌
大阪市　喜多佐津乃

好きな花見れば一枝ほしくなり
待望のパンダの赤ちゃん星になり
西宮市　山田喜代子

登山歴山は何かをくれました
幾年も経て思い出の卒業式
大阪市　平井露芳

騙しついで見本の金も偽でした
菖蒲園おたまじゃくしも顔を出し
大阪市　安西カネ

手折られずただ一筋に水中花
音もせずストーンと落ちた肩のこり
大阪市　山脇正之

妻病気やっとの事で炊事出来
久し振り田舎言葉で若返る
米子市　宮本佳女男

生き甲斐に孫の勉強みてる祖父
彼岸への坂道越えている余生
大阪市　田渕晴子

ビールの栓歯で取る人の羨まし
招かれて広い式場面映ゆし
大阪市　川原章久

三十石浪速囃子の川下り
道草に蛙飛びした雨上り
新宮市　船越正

黒板の色は確かに黒だった
スネ噛る息子が一張羅のシャツを着て
島根県　森山英子

タクシーが欲しいマンモス駐車場
軒ごとに花を咲かせる路地の奥
大阪市　松岡久留美

入学式お母さんの満艦飾
豊中市　額田明吉

突然の赴任すまじきは宮仕え
豊中市　額田明吉

もくせいの馥郁まじる萩の寺
大阪市　橋本悦子

忠魂塔白蓮わびし柵さびて（曽根の公園）
大阪市　橋本悦子

高くついた式服今の役立たず
大阪市　北田秀月

梅雨空に突然の雷雨あけるのか
大阪市　北田秀月

私の出番があった式次第
鳥取県　松本みをき

草の露踏みに行ったも闘病記
鳥取県　松本みをき

飴玉に化ける年金羽根があり
岡山県　笹井小安芸

沈黙はしても頑固の文字消さぬ
岡山県　笹井小安芸

有名を力んで影武者縛られる
大阪市　朝田晃世

思うこと言うて世間の爪はじき
大阪市　朝田晃世

突然にしあわせ呼んだ春の風
大阪市　北脇清治

祝賀式皆の心はアドバルン
大阪市　北脇清治

商魂さ歩行者無視の店構え
河内長野市　植村喜代

突然の便りがもとで縁結び
河内長野市　植村喜代

アルバイト出来るうちは花も咲く
和歌山市　三谷周三

本物を造花見たいという子供
和歌山市　三谷周三

漫才師だけの中折帽となり
大阪市　山本炉斉

汚れたね母は満足気に笑い
大阪市　山本炉斉

永年の恋が実って式となる
堺市　本田草生

長雨にうんざりしている老いの日々
堺市　本田草生

泣かせどこ母はおゆみと申します
大阪市　神崎貴代美

孫に手を曳かせて花の墓まいり
大阪市　神崎貴代美

式場をかけずりまわる議員さん
富田林市　松本今日子

突然の雨を理由に喫茶店
富田林市　松本今日子

名も知らぬ花でよかった蝶も来る
大阪市　井上白峰

片棒はもうかつがないやじろべえ
大阪市　井上白峰

入門書かず持つほどに句汗えず
枚方市　二宮摂子

核家族きのうのメニュー今日も出て
枚方市　二宮摂子

ジュニアの部

父さんもスタミナつけてがんばろう
枚方市　二宮正彦

ばあちゃんと母さん性格反対ね
枚方市　二宮正彦

長電話母さんしかられちぢこまる
あせかいてかえってクーラかけている

昭和60年度

路郎賞 川柳塔賞 候補作品中間発表

自 60年5月号
至 60年8月号

路郎賞候補作品

（到着順）

野村太茂津

すべて皆夢でありしかすみ草　谷垣　史好
ファックスで胸のもやもや送ろうか　西山　幸
かぎろいし野辺で交わさん相聞歌　前川千賀子
舌出した女が傷の奥に居る　土居　耕花
糸くずを払ってあげただけのこと　春城　年代
神様の数え唄なら知っている　堀端　三男
抱かれて抱きしめている蓮の上　草刈　堕駄
添寝する老母の布団が凹んでる　福本　英子
好きだからその手に髪をゆだねてる　西川　景子
小さい嘘ついて二人に春がくる　内芝登志代
さり気ない言葉で怖いことを言う　石垣　花子
言い勝ってみたってしょうがない夫婦　上田登志実
妻のない男に仲のよい夫婦　高杉　鬼遊
曼陀羅の糸がほどけてゆく夫婦　牛尾　緑良
似合うかと言われ似合うと答えとく　松川　杜的

正本水客

春ざわざわ一級河川まだ眠り　谷垣　史好
あまい汁吸われたあとの役につき　大山　と金
旅の終りのビール一本呑み干しぬ　小島　蘭幸
したい事言いたい事も先越され　北野　久子
長靴を穿けば男を蹴りたがり　西森　花村
下駄をぬぐ形も昼の色街は　春城　年代
春愁や机上の乱れそのままに　古野　ひで
したいこと山積みにして寒い部屋　雑賀　美世
夜桜へ息子夫婦が誘いにき　原　さよ子
大波の打つ日よこころ海に似て　林　はつ絵
言い勝ってみたってしょうがない夫婦　上田登志実
雑草もみずも五月の雨が好き　福本　英子
少し威張り過ぎてはいぬか鯛の骨　越村　枯楠
自由だと錯覚してた無重力　藤田　泰子
恋やっと実りほうほう蛍来い　原　独仙

黒川紫香

影法師あなたも齢をとりました　西山　幸
耐えることばかりだったと鯨尺　春城　年代
野良犬に好かれて困るマルチーズ　稲葉　冬葉
庭のない人も立ち寄る植木市　浜本　義美
まん中を独り歩いて草臥れる　小砂　白汀

風にまぎれて春はコントを撒きにくる　林　瑞枝
花ビラを拾うて乙女の日に還る　冨上　光代
春風に可愛い嘘の二つ三つ　奥田みつ子
お父さん遊ぼと軽く見られたり　小島　蘭幸
ひたひたの水で金魚は遠出する　高橋千万子
ボール投げぎっちょの孫が頼母しい　福本　英子
忙しい家にはせわしい客がくる　神夏磯道子
芸の無い鳥です軒の下が好き　小野　克枝
雨あがり虹をくぐるは長い貨車　前川千賀子
茄子の花夢の続きを見ています　後藤　正子

西田柳宏子

いつからか止り木持っている夫婦　遠山　可住
妻だから丸く納める嘘もつく　堀江　芳子
落ちこぼれなどは知らない青い空　町田　達子
老夫婦昔ばなしはせぬ事に　柿花紀美女
春の潮胸の中まで満ちてこい　神平　狂虎
すみません言える夫婦になりました　松岡　三吉
干し竿に二男一女が揺れている　片上　明水
三つとも無事に帰った弁当箱　松本　文子
下手な嘘だけど心をもらっとく　本間満津子
真すぐに生きておじぎを先にする　松岡　三吉
負けて勝つ勇気黙って茶を入れる　森田　熊生
良いところばかりが見える眼鏡買う　小野　克枝
気忙しく余生へ落ちる砂時計　伊藤　春子
残り火やだまされ上手な妻になる　林　瑞枝
スポットライト浴びて仮面が外せない　安平次弘道

橘高薫風

あまい汁吸われたあとの役につき　大山　と金
連れ添うてとうとう空気にされちゃった　神夏磯道子
医者探し試食するようにはいかぬ　本間満津子
中国の養父は檻襤で涙拭く　岸野あやめ
一気飲みゆかしき酒が泣いている　高杉　鬼遊
表札の裏にしゅうとめおことわり　波多野五楽庵
パレットにまだ赤があり青があり　白岩　文衛
冬眠をうちの亭主は夏もする　山根いつを
妖精も妖婦になってクラス会　山川　克子
ひとしきり議論のすきな革の椅子　藤村　宏子
地団駄を踏んだ足跡だとわかり　奥谷　弘朗
ロボットよ子供を産んでくれますか　川端　柳子
薬玉を迂闊に割れば核になる　渡辺　独歩
舌にのるほどに小さな人でなし　浜本久仁於
蜘蛛の巣の要めにある祈り　坂口　公子

川柳塔賞候補作品

谷垣史好

反論を鎮める席が別にある　朝倉　大柏
長短をきそってみても猫のひげ　横山　為子
風邪の児の枕に雛の灯がとどき　鷲見　章
明るい真昼電話どこにも通じない　中原　汲香
好きだから話がもめる菜種つゆ　淡路ゆり子
本人はそれより飯にしてほしい　田中　叶
小さい子小さい役に立ってくれ　末永芙久枝
つかぬことお尋ねします仏さま　赤木　和子
強情な眉にも白毛生えて来た　高野　宵草
愛のことばを帽子かぶってみつけたり　土橋　蛍
武家屋敷かぼそい花が盛りなり　森川まさお
シャンデリア嘘をきれいに消して行く　月原つくし
文化とは冷蔵庫にある猫のえさ　樫谷　郁子
ジャンケンで負けたら親の世話をする　山田　保蔵
じゃがいもの形は誰も責めぬのに　堀端　靖子

小出智子

初蝶を街に見た日の靴光る　木本　如洲
角帯を結べば客の筋が見え　大倉　圭介
弾んでいるのは垣根を越えてから　赤木　和子
人工交配終わり恵みの雨が降る　福士　トキ
鍬杖に見る夕焼の美しさ　池田　半仙
憧れの椅子がくるりと向うむく　福田あや子
春風駘蕩妻になんにもしてやれず　上田　柳影
ほほえんでいるから怖い仏の眼　朝倉　大柏
釘打ったとこから洩れてくる噂　福田　礼子
定年を待たずに定期券が切れ　高崎　雀声
八十を数え地獄も極楽も　山下　登舟
動脈に棲む鬼一匹を飼いならす　紀市　郁栄
一番の仲よしがいた裏長屋　高杉　千歩
我家にも異常乾燥注意報　清水　康恵
恐しいことを話している電話　田中　叶

高杉鬼遊

いい人と百までの夢春の雪　古川美津枝
つかぬことお尋ねします仏さま　赤木　和子
鯉のぼり隣のを見て育てられ　今西　静子
私を時どき忘れる人がいる　清水　康恵
春愁や許すことのみ多かりし　吉川　寿美
つじつまを合わすつもりか再婚し　永田　俊子
梅雨晴間愚痴袋にも風を入れ　安田　志津
男ごときと翔んで女は戻らない　舟渡　杏花
掛け算の下手な男が貯めている　福田　礼子
一匹の蟻にも空はついて来る　祝部寿美子
医者よりも待合室で教えられ　松下　蕉露
お互いに切れてきました惚れ薬　堀畑　靖子
文化とは冷蔵庫にある猫のえさ　樫谷　郁子
ピカソ展帰れば分ったかと聞かれ　結城　君子
定年を待たずに定期券が切れ　高崎　雀声

板尾岳人

誰よりもなだめ上手な古時計　清水　康恵
寒がりでチャンスに弱いふところ手　田中　晴子
別れ道コントが一つ落ちていた　舟渡　杏花
子を産めぬ女が嫌うひな祭り　野村　京子
風に消え風に生まれしみな他人　高杉　千歩
ゴム毬の臍が知ってるわらべ唄　脇田　米朝
釘打ったとこから洩れてくる噂　福田　礼子
一人にはしては置けない影法師　望月　晴彦
さくら貝ひろいつくして喪があける　広本　文子
ふりむくと足を引っぱる鬼に逢う　藤井　高子
父の樹のそれぞれにある掟　千原　理恵
ひまわりがいつも咲いてる母の庭　山田　妙子
背伸びした女が道を間違える　西川　和子

河内天笑

憂さ晴らす酒にも女みっちい　大川　幸子
めんめんと書き足す母のかな便り　吉川　寿美
別れ道コントが一つ落ちていた　舟渡　杏花
奥の手は人間くさい味がする　藤井　高子
散歩コース今日は古本屋が休み　八塚三五島
妻でない女に弱点にぎられる　千原　理恵
七人の敵もういない夫の靴　光井　玲子
つまずいた石を確認しに戻り　桜井　千秀
みの虫のとても気楽なひとり部屋　田中　晴子
ほほえんでいるから怖い仏の眼　朝倉　大柏
遠花火ゆゆしきことに触れずおく　赤木　和子
手のひらに銭の匂いを残さない　清水　康恵
手料理のうまい男がいて困る　福田　礼子
にんげんが大好きなので家を描く　高杉　千歩
ブレザーとブラウスを買うフルムーン　松本　一郎

川柳塔柳箋

一冊　二百円
送料　二百四十円

愛染帖

橘高薫風選

大阪市　上江洌　勝子
捨て猫へかげりを見せぬ子の瞳
梅をほす三日三晩を祈るなり
腰痛を静かにおさめ梅雨明ける
青森市　工藤甲吉
生と死を見たりパンダの赤ちゃんに
北天の下に生まれて荒々し
鳥取県　新家完司
幸不幸だんだらもようの幕降りる
燭台の下は無間の闇である
笠岡市　木山遠二
人形も家族のような貌になり
アハハオホホと我が家も今日はよい日なり
大阪市　小出智子
夫にはまだ言うてない壺の罅
それからの秋を分けあうことになる
吹田市　後藤火鳥
雑草は早苗の如く靡かない
歳とるも多情多恨旧火山
大阪市　朝倉利義
入院の妻には言わぬルビー婚
入院の妻へ届けよ摩訶般若
米子市　八木千代
消えてゆく虹をおしまいまで見ていた
歩かねばならぬと歩きつつ思う
高槻市　笠嶋恵美子
禁断の木の実に触れし微熱かな
イヤリング外せば気韻消えそうで
松江市　竹内寿美子
菜の花に包まれ女死を思う
子は明日母は今日だけ空を見る
西宮市　奥田みつ子
中年の恋は古代の笛と逢う
若者の出逢いは青い稲光
滋賀県　久保和友
牾山も新緑生きる欲が出る
清潔な穴にパンダが淋しそう
兵庫県　脇田米朝
日本列島全部そのまま惚け初め
人間の最後よ灰の壺一つ
守口市　森川まさお
やせてきて深味を帯びた顔になり
合槌ばかり打つので話やめにする
寝屋川市　岸野あやめ
老いて尚誕生日ありビール干す
耳こすり言葉にならず孫笑う
尼崎市　春城武庫坊
原稿の枡目に火花つめている
スリラーが終ってドアー確かめる
米子市　野坂なみ
白梅がうす紫の絵に匂う
時々は仁王さんまで叱られに
藤井寺市　赤木和子
わかれ言葉は夏大根の辛さなり
話せるが上手ではない日本語
島根県　西村早苗
胸を病むおんなの鼻の軽き汗
ピンボケの顔だが好きで額に入れ
高知県　曽我部裕
昨日までおった会社の退社ベル
今治市　月原宵明
極彩の中でとろとろ仏さま
橋本市　岸本木魚
古都税はどうであろうと苔しずか
米子市　政岡日枝子
たたまれるのがとっても嫌な男傘
寝屋川市　堀江光子
さっきからじっとこっちを見てるバラ
羽曳野市　麻野幽玄
作業衣へ男の値打包み込み
和歌山市　坂部紀久子
満月も忘れられてる通夜の席
和泉市　西岡洛酔
愛の果てテレビドラマは他人様
伊丹市　樫谷寿馬
使う筈のない釘を一つ付けておく
米子市　光井玲子
情熱の海もいつしか凪いできた
米子市　林瑞枝
じゃが芋の傷からもれる国なまり
鳥取県　土橋蛍
女がこっち向く七変化の花
和歌山市　西山幸

叶わない夢を夢みる月見草
米子市　小西雄々

随筆で食べ側面で見る世相
近江八幡市　前川千賀子

万羽居て鶴が寂しい原爆忌
高槻市　河瀬芳子

紫の紫陽花昨日までのこと
和歌山市　神平狂虎

居酒屋でひとりの男離陸する
富田林市　岩田美代

九官鳥のため息聞いてる午後の雨
富田林市　藤田泰子

見る時の心で変る星の彩
小森靖江

訳あって下着を白で通す妻
弘前市　波多野五楽庵

みごもらぬ石榴みごもりそうな蜘蛛
倉吉市　淡路ゆり子

ママゴンの子供に着せるプログラム
米子市　林荒介

丁寧な言葉でかごめの外に出る
鳥取県　松本みをき

湯豆腐が派手に動いて気が揃い
茅ヶ崎市　山上元孝

定年のベンチにすずめ小ぜわしく
茨木市　井上盛雄

先陣の気分一番前の席
岡山県　土居耕花

たのしみは女難の相がひとつある
島根県　松本文子

寝ころんでついでに逆立ちする二人
吹田市　井上照子

温い目を思い出してるそばの味
川西市　野村静雄

病室の隅へ片付けられている
広島市　望月晴彦

憎まれぬように少なく貸して置く
新発田市　上鈴木春枝

多数決多数についていた安堵
島根県　小砂白汀

ベランダに女の急所干してある
吹田市　西岡豊

舞扇下手な弟子にも気を配り
大阪市　桝本露児

人生も拝啓　追伸　敬具です
高石市　浅野房子

鰯雲また退屈な午後になる
唐津市　箇井朴竜

バイブルを片手に吾子の死を見詰め
島根県　堀江正朗

苛立ちの顔も鏡に知らず生き
唐津市　仁部四郎

東京の名産品は週刊誌
堺市　高橋千万子

金に泣き金に笑って無が残り
米子市　沢田千春

井戸をくむリズムで暮れる故郷の路地
米子市　青戸田鶴

やがて母の面と重なる女面
平田市　久家代仕男

世情には疎く平和な凡夫婦
米子市　金山夕子

たとう紙に嫁ぐ嬉しさ寂しさと
羽曳野市　吉川寿美

一本の筋を通している寡黙
大阪市　市場没食子

自民党も山口組も派が多い
西宮市　草刈堕駄

梅雨しとどテレビの中の青い空
奈良市　森田カズエ

お金では買えぬ空気が美味かった
和歌山市　北山敏一

核で嚇し魚獲で攻めてくるソ連
静岡市　渥美弧舟

字余りと字足らず夫婦五十年
岡山県　山本玉恵

影法師味方に連れて来たものの
寝屋川市　平松かすみ

棒グラフ平均寿命だけ伸びる
堺市　小西小雪

淋しくて一ヶ寺残す朱印帖
名古屋市　越村枯梢

ロボットと俺と革命歌のデュエット
和歌山市　桜井千秀

何はともあれ犬にオシッコさせてから
倉敷市　藤井春日

卒業アルバムこの子お嫁に行ったかな
吹田市　栗谷春子

水無月に水色の花ばかり咲き
守口市　結城君子

急用に大阪弁が追うてくる
大阪市　上田かつみ

被爆者の妻の祈りに雲動く

和泉市　岡井やすお
期末テスト済んだ日電車賑々し
米子市　菅井とも子
廃船のなげきが潮にこだまする
弘前市　真喜内實
雨持たぬ夕雲さみしい爺さんさ
大阪市　川口弘生
不条理の地獄に京の寺生きる
尼崎市　春城年代
この先の道はあかるい方を撰る
八尾市　松下蕉露
歯車の一つ叛乱考える
唐津市　相葉あき
一匹の蟻が物見をする晴間
島根県　堀江芳子
菜園のきゅうり吸いつきそうな疣
唐津市　浜本義美
夏物に替えてしまって寒い梅雨
唐津市　久保正敏
質問も答も読んで議事終る
鳥取県　奥谷弘朗
四捨五入してもやっぱりペケはペケ
羽咋市　三宅ろ亭
双六でよかった振り出しへの戻り
長岡京市　山田葉子
こけるのがこわくて独楽は廻りすぎ
大阪市　松尾柳石子
露地裏で会議開いた猫に会う
豊中市　田中正坊
封切らずしばしながめる女文字
西宮市　松本一郎

人間の英知功罪裏おもて
豊中市　上田登志実
陰性になるマンションの痴話喧嘩
東大阪市　津雲一
珍らしき石もまつりて山開き
兵庫県　野々口悠也
自己を知り自画像の彩ぬりかえる
兵庫県　東浦砥代
産ぶ声の目の前に置く白い画布
河内長野市　植村喜代
子離れて思う子育てゆっくりと
仙台市　川村映輝
ポイントが解らず三本釘を打つ
兵庫県　松本ただし
胸張って見ても坐っていない腰
高知県　赤川菊野
ネムの花へ母の匂いをつれてくる
貝塚市　行天千代
一つ一つ思い出こもる鈴の数
岸和田市　武俊春
玄関の下駄は晴れのち曇り勝ち
笠岡市　松本忠三
万歳へ中途半端な手をあげる
今治市　月原つくし
裏切りをじっと見ていた銀の匙
豊中市　奥田満女
美しい人の隣の掛け心地
西宮市　山片紀雄
ある日ふと別の世界に棲んでみる
広島県　田村新造
あじさいに「美わしく老ゆ」読んでいる

高知県　山下登舟
だまし安いだまされ安い年の欲
島根県　板垣夢酔
背信と気付かぬ女の厚化粧
米子市　茂理高代
薄らいだ記憶に深いみぞがある
名古屋市　大林曲ん手
石段の数から妻が折れてくる
名古屋市　藤井高子
夕凪ぎや私が溶けて消えてゆく
京都市　松川杜的
修業大師の股から覗く鬼瓦
和歌山市　三谷周三
神童と言われて早くぼけちまい

＊

投句先　〒560 豊中市中桜塚三丁目13―15
橘高薫風宛（ハガキに3句）

NHK川柳募集

課題「弾む」　選者 **橘高薫風**
締切 **9月10日**
（ハガキに三句以内）
投句先　大阪市東区馬場町3―43NHK
大阪放送局〝さわやか広場〟係
発表　9月22日（日）ラジオ第一放送
午前11時5分から

秀句鑑賞

—水煙抄—

—前月号から—

藤村〆女

石女の部屋で人形よくしゃべり
亡母の部屋時々涙捨てにゆく
中原　みさ子

女として結婚は愛だけではないのです。その家の子孫をたやさないように誰でも一人は子供がほしい、そして母と呼ばれたいのです。子の無い部屋に人形が沢山飾られ人形と話して心をなぐさめている姿を見る。また悲しみを捨てに亡母の部屋で愚痴を言い涙する句主の姿、泣きたい時は思いきり泣くのです。涙のかれる迄、後はすっきりしますよ。貴女にはやさしい夫がいることでありがたいです。

満ち足りています心も胃袋も
赤木　和子

お倖せほんとにうらやましい限り、いつ迄もこの倖せの続きますよう祈ります。

父の日に花一輪の父の部屋
清水　康恵

何も豪華なお祝を戴くのが愛ではない、一寸した気くばりの花一輪が父の部屋に活けてある、それだけでも親子の絆の温もりがある。我が子よありがとう。

ぶら下げた鍵とブランコゆれている
清水　康恵

鍵っ子のいじらしい姿が目に浮かぶ。きっとたくましく泣かぬ子に育つことでしょう。私の子供も鍵っ子でいつも鍵を首にぶら下げて母の帰りを日暮れまで公園で待っていました。思い出しますね、苦しかった子育ての日々。「公園でひとり石蹴る影がのび」私の旧作です。この子も今は二人の父親で頑張っている。

笑わせてピエロ淋しい夢を見る
松川　芳子

サーカスのピエロ、街を鳴らして歩くピエロ、みんな生きるための芸、生涯をピエロはいつも人様を笑わす芸を作り出しているのです。床の中では淋しく泣いているかもね？

見栄張らぬ大きい大きい母の指
月原　つくし

この母の手はお姑に仕え田畑を耕し子育てをした土の匂いの大きな指だと思う。心から勲章を上げたい指です。

子亀去る渚に立って無事祈る
丹下　玉子

親亀が涙を流して産卵し、それが孵化して今、沢山の子亀が海へ海へと帰って行く姿を見送り、大きくなれよと無事を祈っている作者。「白波に消える仔亀の幸祈る」ふっと亡き酔々さんの句を思い出しました。

仕事場に座ると父がこわくなる
木本　如洲

食事の時、晩酌の父はよく喋り、よく笑わせておもしろい父だが、一旦仕事場に入ると人が変ったように仕事に取組む。無口の父で誰もよせつけず、こわい父である。このお父様はロクロを廻している陶芸家か何か居職の方ではないか。

ジャンケンで負けたら親の世話をする
山田　保蔵

時代が変りましたね。人間も動物を見習うことですね。一生懸命働いて子育てして見返りを考えない動物。一人前になると皆出て行き、最後はひとり何とかめいわくを掛けないように考えなければという淋しい時代になりました。

ドライフラワーおんな盛りも過ぎました
笠嶋　恵美子

ドライフラワーにふと人生のたそがれを見る、そんな気がしないでもない句。ドライフラワーにまでして残す花とは、よほど思い出のある花か。

うす物の夏へ乳房の眩しすぎ
石手　武

若い人の胸ばかり見ていられるのでは…。

釘打ったとこから洩れてくる噂
福田　礼子

存続のレールいたわる老工夫
伏見　すみれ

職安に空気の抜けた顔ばかり
田中　八太郎

自選百句

東野大八

法善寺煙にむせたは十のころ
法善寺母の袂のなつかしき
お多福の下織田作の長い髪
胡同の妓にもてた紺絣
惚れている女「帯はどこですの」
アル中の娼婦と語る放浪記
鞍替えの妓へせめてゆで卵
あきらめを映す夜汽車の窓は雨
花札の角丸くなる結氷期
スンガリーの月へと誘う十三夜
アカシヤの大連を恋う木のパイプ
小姐の腕やわらかきリラの花
緋牡丹の花つかの間故に生命たり
緋牡丹は想い出ばかり蝶も来ず
司馬遷にあらずこの身はキユベレー
終章のドラマ男たり得ぬ男かな
自画像の罪は少うし青すぎる
世が世ならそんな気負いの懐しき
かえりなんいざ霊柩車が着いた
棺を打つ石も一会の音と知る
初七日で恋という字も消えてゆく
再会に石の冷たさなどはない
鬼あざみ墓の狭さを苦にもせず
人滅びつくして墓も石一つ
数珠買って仏を少し蔑めり

死にかけた話他人は笑うなり
死神とお茶を飲んでる曼珠沙華
花魁をふと思い出す曼珠沙華
男には悪女の燃える夜はたのし
眉のない女不逞に帯を解く
足袋の艶女燃えたつものと脱ぐ
ニンフありなんと小さきパンティよ
寝煙草のうまさ不倫というなかれ
愛欲の熟睡深き裸体仏
女なり泣くだけ泣けば髪を梳き
洗い髪老いの情緒でふりかえる
恋人を情婦にされた供述書
七転八起のつぎへ刑事来る
三十という寂しさで彩を選る
盛装の効果は微笑して決まる
貴婦人に見えては困るＰＴＡ
よく笑う女に似合う黄色い絵
菜の花のあたたかさにはかなわない
行きずりの男見返える祭笛
よく動く眼で女学生また笑い
叱られた子が口笛を少し吹き
宇野千代を尊敬してる娘のえくぼ
釣堀に井伏鱒二が二人居る
でこぼこの鏡の横に居たピカソ
図らずもわが身と出遭うムンク展

狭いバー首に縫目のあるマダム
引眉毛ほんとの眉はこんなとこ
おれに似た小悪人もいる水滸伝
寄付に出す紙幣は汚い方にする
雑草に晴天ありと知る日銭
野良犬の身についている人嫌い
蹴る石がおれのもろさを知っていた
御先祖にかかわりもなく倒産す
狸からタヌキになれと教えられ
行き届く悔みを言ってすぐかえり
駅に住むサラリーマンの好きな鳩
逢う瀬には程よく高い蔵の窓
逢う人へ傘の雫を切ってみせ
民話あり熊の甚平と笹の花
一期一会骨董店に棲む仏
病妻の杖の風で冷える膝
梅干に怨念こもる患者食
わたしは霧子墓へこの句を書く冬日
ふるさとはひたすら遠し薄い虹
ふるさとは伊予夏柑が転げ出る
豪傑の眼に紫の山ばかり
紫の山少年は老い易き
地平線兵衣のおれが駈けてゆく
老兵の薄い肩から抜けぬ釘
肩落ちていつかゴッホの貌に似る

おれ自身を食ってるような目刺
老いてなお異国の星はまだ消えず
越す海に安らぎがある免罪符
きりぎりすおれの背骨の奥で啼く
紙の蓮みな人間は木偶になる
銀杏の葉一枚拾う旅もよし
一滴の水でひろがるナルシズム
見直した女の知恵にある怖さ
おれはダンプ情知らずと言うなかれ
牺山でカラーテレビが今日も売れ
潮騒を小ばかにしてるテトラポット
煙になる人間に要る以下余白
柳川の骨なき墓とうなぎ塚
いい話ないかとパンにバター塗る
天窓があるから開く玉手箱
理におちて別れも愉しとはいかず
延長のプランヘタンポポばかり咲く
菊百花李白のごとく酒酌まん
花道はプラットホームの向う側
惚れたのは拳で泣いた日の男
たんぽぽの綿毛にあった薄情
海峡の雨充ち足りぬものは愛
漂蕩や旅の終りの霧笛鳴る
鼻先で動かぬ丸い象の足
錠剤が老い脅かす夢十夜

自選百句

八木千代

菜の花が咲いてる春に違いない
砦のように家のまわりに花咲かす
蛇口があって時計があってパンを焼く
朝までの不安に時計耐えてきた
花時計の根が水切れをしているよ
サーカスの絵が華やかなままほろぶ
ままごとは終って破る紙の皿
蝶の絵の九十九枚は灰色に
さくらさくら炎えればほろぶほかはなし
砂時計しずかに沈む炎かな
眠り人形をゆすりつづけている少女
虹の影少女は虹と見てしまう
少女から夏を攫ってゆく渚
触れられたことではじまる桃の傷
白桃の傷から視線そらせない
桃の皮逢うて死にたい人がある
このままの彩であじさい死をねがう
旅の町このままここに住めそうな
月の出よ祈りを盗む焙り絵よ
天の川よりゆらゆらと戻るなり
笹に吊すあさきゆめみしゑひもすと
逢うてきてから不規則な呼器吸器
カラスなぜ泣いたもうもう子は産めぬ
針山を四五日突いて女の忌
泣き通すのは水守りの吹く笛か
どの幕も笑い足りない立見席
うかうかとめくる真昼のプログラム
月は遙かに海は死ぬまで満たされぬ
ひきながらひきながら潮満たんとす
命終るその日まで抱く潮の音
一本杉の血がにじみだす月は中天
美しい血だな一本杉の血だな
月草草ようやく月を取戻す
逃げ水と影踏みごっこ鬼ごっこ
鬼たちも人間ごっこして遊ぶ
影踏みの鬼に踏まれてばかりいる
そのうちに鬼まで眠るかくれんぼ
父の闇兄の闇へと歩きだす
旅人と語るほとけは野を去らず
石仏の火の眼たらんと閉じ給う
同じ日に同じ火を吐くまんじゅしゃ華
朱き実を残す名もなき花の念
眠り人形の耳に木の実が落ちてきた
指人形母を笑わせてはやれる
人形の部屋に狼火の痕がある
いつになく激しく止める椿の木
隠し絵が重くて椿落ちてしまう
悲鳴抛りあげてふたたび椿の闇
忌のまえの十日に及ぶ火の指よ
狂いそうで秋の一樹にひざまずく

絵の女箱に入れると泣きじゃくる
日没がこわくてうたうカラスの子
山を見て秋の呼吸に戻るなり
稜線をみつめて痩せた指鳴らす
ひと彩の残る枯野の深さかな
水色の旗で枕を縫いましょう
サーカスの旗をたたんでいる女
秋風にふれて破れる昨日の絵
じっくりと風の噂を見ていよう
摺り鉢の底で漫画を画いている
神棚に詩集など置かないで下さい
棚の毒薬が少しずつ消える
清潔な壜に薬を入れましょう
朝ごとの眉をほとけにみつめられ
男は鬼に女はきっとゆうれいに
川上の霧は晴れたという噂
火を吐けば湖となるしかない火口
面の下の素顔も念のために塗る
マッチ箱眠ったふりも上手でしょ
蓋をしたピアノを風のまん中に
樹を倒す斧をいっぽん売りのこす
雨に彫れば面の目鼻も母に似る
どこで撞いても一ッしかない願いごと
この次に逢うのはきっと日溜りで
泣きながら佇ってる塔もあるでしょう

三面鏡　三つ許せるまで磨く
月の弦　鉄の槌よりしたたかに
標的をしぼるとすれば月の弦
やがては闇に沈むにしても月の屋根
水襲があふれて朝を疑わぬ
わたしだけの木を植えて発つ秋の駅
からくりの箱を開ければ風ばかり
おとといの火から燃えだす紙人形
炎消せるまでいちまいの皿洗う
仮りの世の紅葉の下のおままごと
指千本折れば私も数になる
六十になると遊びの絵が画ける
人を逃がして縄の梯子もむらさきに
逃げるほど追手の数が増えてくる
雪を給う山肌の荒れいたわりて
隠し絵に昨日の雪が降りつづく
風が泣くので雪子の夢も微粒子に
旅の終りに誰と並んでいるだろう
引潮の沖から笑い声がする
結界へおぼろおぼろの落椿
落ちてから本音吐こうとする椿
境界線のところどころに椿の木
落椿　天は拍手をしてくれる
あらましは伝え終った新聞紙
ありふれた鳥が天まで辿り着く

生駒だより

麻生葭乃

武玉川お送り下さいましてありがとう存じました。頂いた其の晩翌朝の三時までかかって一気に読みほしました。

川柳のバイブルであると云う「柳多留」も、「武玉川」も私は子育ての生活に追われていたのであんまり読んでいないのです。其の理由は江戸時代の風俗習慣を知りつくしていなければ受ける感度がうすいと思ったからです。あまりに名高い句は知っていますけれど、古句の知識はまことにおはずかしい次第です。

然し私は「柳多留」の句よりも武玉川の句に私の好きな句が多いように思います。「武玉川」の叙景句は感覚的で印象が深いと思うのです。

横町に一つづつある芝の海（柳多留）
よりも
闇の途切れるうどん屋の店（武玉川）
の方が好きですし、

鶏の何か云いたい足づかい（柳多留）
よりも
鏡にせいてかかる鶏（武玉川）
の方が好きです。

投げられて鋏の心かわりけり

此の句は武玉川にある句だと思うのですが句主の感情を鋏へ移して代弁させたところに技巧もあり、女心が酌取れます。

死んで願いの叶ふ書置（武玉川）

現代の人の句に、

断固ゆるさず戒名にして拝み（一瓢）

と云うのがあります。

私は句の調子と云うものは、句主が自分の思想や情念を詠む時の呼吸にまかす可きものだと考えます。十二字詩、十四字詩が好きだからとて、いつも其の枠をはずさずに作句していては、又調子のマンネリズムに陥って終います。廿字でも廿二字でも廿五字でもよいと思います。内容とマッチしたリズムでありさえすれば……。

私はあなたのおかきになったものは必ずよんでいるのですが、私の知らぬ事があるので教えられています。その度に私は賢くなっています。

「ふあうすと」四冊に掲載された堀口塊人様の「南北をめぐる」は忘れていた人が出て来るので興味深くよみました。玉屋町のお宅へは私もちょい〳〵お邪魔したように思います。其の時頂いた色紙は「夕霧伊佐衛門の紙子姿」「暫」「八重垣姫」でありました。

先生の画筆のさきが色紙の上をすべるかと見れば三枚位の色紙は電光石火でした。当時

の柳人五、六人程で千日前の写真屋でシャシンをとった事があります。其の写真が或る日番傘に出たことがあります。不二田さんが私にそれを見せてくれました。私は桃われに結うてました。其の中に緑天さんもいられました。

南北先生の最初の奥さまは物しずかなやさしいお方でした。其の奥様のところへ来ていられた可愛らしい娘さんがありましたが、其の娘さんが水府さんの最初の奥さんなのです。お二人は仲のよい御夫婦でしたが、奥様は若くしてご長男を残してあの世へ旅立たれました。塊人様は、あの古い時代の材料をよくも保存していられたことだと感心しています。塊人様は筆もたちますが、講演もうまいものです。どんなに時間が永くても、聞手をあかさずにひっぱってゆかれます。

私は毎朝お掃除がすんでから、郵便受から手紙や新聞を台所へ持って行ってそれ〴〵仕分けをいたします。先ず新聞は、テレビと放送の番組のある面を抜き取ってあとは押入れへなげ込みます。相変らず新聞はよまぬことにしています。私へ来た通信は用事をしながら見ていますが、あなたのお手紙は其のままふところへ入れ、用事がかたずいてからゆっくり部屋の机の前でよむことにしています。そして覚えたい事は覚えようとしています。然し記憶力もだんだん減退して来てますのでだめです。芝居の話をしている時に贔屓にしている役者の名がどうしても口に出て来なかったりすると、私の脳細胞のどこかが毀れてるのか知らと心配したり、失語症の初期かと案じてみたりします。

そうなると意地でも思い出さねばすまぬ気になり、他の仕事はうわのそら、そればっかりに気をとられて一日たち二日経ちしていると、三日目にヒョッコリ思い出すことがあるのです。それは丁度、線のきれた電球を振ったらパッと灯のつくのと似ています。

こんなに忘れぽくても一人居るのには差し支えないのです。お能の面の様に無表情でも傍に人が居なければ気を使わなくてもすみます。私は声を出して笑ったことがありませんから、どの位おかしいのか、又どの位うれしいのか人にわかって貰えないのです。人が側にいなければ、こんな気苦労をせずとも裸の私でいられるのです。言いたくない時は言わいでもすみます。こんな気持ちでいる私の前へ若し初対面の人が座ったらどうなるでしょう。きっと相手の気持ちをこわばらして終います。それを知っている私はなるべく人に逢い度くないのです。このごろは誰が誘うても句会へはいっさい出席しません。喋らねばならんからです。此の非社交的な気質は父親に似ています。

此癖を捨てたら形見なにもなし　葭乃

其の段、手紙は気を使わずにリラックスな気分でものが言えるからよいのです。私の手紙がそちらへ着いてもあなたが忙しいのにと困った顔をしていられようとそれはこっちにわからぬこと、いい加減にとばしてよんどいてやれと思われようと、其の辺は我不関焉、たとえハタ迷惑でも猪口を前に置いてくだを巻く左ききの醍醐味にひたりさえすればよいのでございます。私はそんな我儘者であることを御承知置き下さい。

さよなら

五月卅一日　葭乃

大八様

（編集部注・昭和四十八年の書信です）

老人日記　麻生葭乃

山上の灯が納涼となる窓をあけ

ひと雨が欲しい生駒の蟬さわぐ

天皇様の稿料

東野大八

日本の敗戦によって名残りつきない大陸の土から見離され、故国の土を踏んだのは昭和二十一年三月であった。戦傷による隻手の身体で新妻と二人、古寺の位牌堂で八ヵ月にわたる極貧のどん底で喘ぎぬいたことはもう何度もあちらこちらに書いているので、クドい話はせぬことにしよう。

とにかくこの無一文の海外引揚者の私の手許へまずやってきた川柳誌第一号は「川柳むつみ」(奈良・深井凡凡主宰)である。この柳誌は大陸引揚柳人の連絡誌ともいえた。つづいての柳誌は「川柳しなの」(石曽根民郎主宰)であった。乾いた海綿が水を吸いとるように、この二冊をむさぼるように読んだ。貧窮の最中手にしたこの二冊の柳誌は、終生私には忘却できぬ柳恩の結晶でもあった。

かくてこの二冊のつぎに登場したのが「川柳雑誌」であった。この大きな柳誌とともに主宰者麻生路郎の名による親書が届いた。その文面は、引揚柳人の労苦を慰撫する挨拶のあと「ぜひ弊誌にも御執筆賜りたい」というのである。時に昭和二十五年二月であった。

この頃、私は終戦後、簇出した新興日刊新聞の支局長の職にありつき、どうやら飢餓線上から浮上したばかりで、まずは意気さかんな折であった。そこで天皇様の四国巡幸の随行記者団に加わった経験にもとづき、川雑へ「天皇様と川柳」というのを送稿した。このタイトルは、毎夕天皇随行記者団のスポークスマンとして、その日のことを発表する小谷侍従長をとらえ「天皇様は川柳なる文芸について御理解をもたれるかどうか」を質問した際のそのやりとりをネタとしたものである。

この天皇様と川柳の拙文は川雑昭和25年3月号に掲載されたのだが、この掲載のあと川雑会計部の名の下に金千円が稿料として到着した。私は直ちにその金を同封し、つぎのような骨子の手紙を書いた。

「私は川柳をタネに原稿料を稼ぐ情ない男ではありません。爾今無料でいくらでも書かせて貰いますので、一切御懸念なきよう」

思えばこの天皇様の一文から、川雑終刊号の四六〇号(昭和40・9)までまる十五年間書き通したわけで、更にこれにつづく川柳塔分をプラスすると、約三十五年間、執筆し続けていることになる。われながらいささか呆れた話だ。

これは余談だが、私は川雑・塔はもとより他柳誌からも執筆の代償を貰うことは甚だ苦痛である。川柳塔誌からも、また川柳が縁で

電波新聞へ寄稿し過分な稿料を頂いたことがあるが、どうもこういうことは根っから意にそわず、さっぱり落ちつけない。だから今では川柳塔は本代に肩がわりし、電波新聞へはとっくの昔から縁切りの形になってしまっているのが現況なのである。私のような新聞デスクのその場まかせの駄文は、金にするのはおこがましいという気分が今だにぬけないでいる。卑屈というのではなく、これがもって生れた私の性分なのだから仕方がない。白状すれば、その心の底のそこには、堂々たる世に問う本格的（私にとって）作品なら、ちゅうちょなく押しかけていっても頂く。これが私の夢でもあり本音なのである。古希の私の、死ぬまで変らぬこの夢こそ私の支えなのである。お笑いなきよう…。アッハッハである。

東野大八氏に初対面

空らの片袖に男の意気はらむ　一三夫

この句が載っていたのは川雑昭和30年4月号である。川雑編集長の不二田一三夫さんにこのあと会った際、私はこの句が面映いといったところ、彼は例の堅物そのものの貌で「路郎先生が、大八さんは川柳人の中では例のないおとこ気のある方や、そういったはりましたぜ。私も会えてそう思うとります」

私は心中、ははん、天皇様の稿料以来のことだな、と独り合点し何もいわないことにした。思えば川雑発行の路郎一家が、川柳普及のため、飲まず食わずの思いでムリをして発行している川柳雑誌が、一番生活的にも苦しいピークは、あの頃だったのだなと、今もって稿料を返却してよかった後味のよさを今でも快く感じている。

今月は昭和四十年九月号をもって、その翌月から川柳塔に改変した記念すべき月であるのだが、それにちなみ麻生葭乃さんの私あて書簡を抄録しておこう。（原文のまま）

「川柳塔発行後、川雑創刊号からの巻数を継承させてほしいとの御依頼が不二田一三夫さんからありました。どのみち門下の方々が共にたのしまれる柳誌ですから、私はその御要望に応じました。

川柳塔事務所に行けば、川雑のすべてがみられるようにしては、と思いましたが、不二田さんは、川柳塔は新しい作家が多く、路郎先生のお顔も知らぬ人達ばかりなので、川雑蔵書はしないとのことでした。私は川雑を見たい人は、御池ばしの中央図書館を教えてあげて下さいとたのみました。

川柳界も時代が進むにつれて、各社各派競うて句碑の建立句集の発行など、ひきもきらず、刊行物氾濫の現在に居て、どうして熟読の暇をみつけたらよいのでしょうか、次々と押し寄せる名句集の波にのまれ、窒息しそうです。

方丈記の冒頭に

「行く河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず」

とあります。このことは誰もわかっていることなのです。流行歌さえも時代の流れが物をいうています。ナツメロに比べますと表現も激しく、抑揚（ストレス）のありかたもそれぞれ個性を出しています。長明が世をはかなむ気持もわかりますが

「花しぼみて露なお消えず、消えずといへども　ゆうべを待つことなし」

と一寸感傷的でありますが、此領域から彼も遂に逃れることが出来なかったのであります—どうしようもない時代の流れに服従することは、凡ての生物の悟りであると私は思っています。麻生葭乃。（昭和51年12月4日付）

座談会『川柳塔』過去・現在・未来

〈語る人〉

西尾　栞　　黒川紫香　　西田柳宏子
高杉鬼遊　　河内天笑　　小出智子
橘高薫風（司会）

「川柳雑誌」草創のころ

薫風　暑いところお集り下さいまして、ありがとうございます。

川柳塔は九月号をもちまして七〇〇号になり、記念の座談会をこれから始めます。司会役といいますか、進行係を務めたいと思っていますのでどうかよろしくおねがい致します。

川柳塔の前身の川柳雑誌は大正十三年二月十五日に創刊号を32ページ同人二十四人、一部が三十銭で出発した訳です。

創立の句会はそれよりも先の一月十九日に大阪書林倶楽部というところで開催しているのですが、この頃はまだ栞先生も紫香先生も川柳界には足を踏み入れて……。

紫香　私は昭和八年です。

栞　昭和六年。

紫香　私の頃は本社句会も天牛の三階でね。

柳宏子　天牛の前は、今言った書林倶楽部ですか。

紫香　書林倶楽部でやったり、西区の方の会場でやったりしてたらしいです。

薫風　入口に提灯をつけて、やったんやなあー、その頃はね。

天笑　路郎先生といっしょにその頃、初めた二十四人の同人いうたらどんな人が。

薫風　これはね、大阪市の交通局の川柳以交社、そこは「みおつくし」という雑誌を発行してたんですけど、今の児島与呂志さんや井上喜酔さんらの会の先輩たちなんですが、それが発展解消して顧問だった路郎先生を盛り立てて、一つの雑誌を作ろやないかと、「川柳雑誌」が出来たわけなんです。

紫香　橋本二柳子（後の緑雨）、吉川亜人いうような方が創立同人ですね。

薫風　そんなことで番傘さんが最初大正二年ですか、創刊なったんですけど、番傘いうたら西田当百さんが中心になっていて、創刊号の巻頭句に「上かん屋へイ〳〵〳〵とさからはず」言うような、誰知らんもんない程の有名な句になっていますわね。ところが川柳雑誌の方では、そういうような句が、人口に膾炙した句がないんです。私はやっぱり両方の雑誌社の行き方みたいなのがあって、路郎先生は学者的な孤高をたのしむ感じがあって、片方は組織とか運営とかがお上手やったんやないかと思うんです。

柳宏子　番傘の方は組織作りを重点にやって来られたというのは、やっぱり受継がれた水府さん達が、性格的に拡げてゆくことがお上手やったということでしょうね。

薫風　そやからね、川柳雑誌の創刊号にはこれがあるやないかというような句がないのが残念で、調べてみたら路郎先生が創立句会の「鶴」という題で軸吟を作ってはるんです。「行末を案じるように鶴は立ち」という句があるんです。

これは路郎先生は創刊号で文章を書いて意気軒昂とやってはるけど、前途多難、そういう不安も出てるのやないかと思い、こういうような句を我々もご先祖の作品として宣伝したいと思ったりするのですけど。

柳宏子　それと、路郎先生も職業川柳ということを標榜されて、川柳雑誌の独立を広くされたために、やはりPRをする範囲が限定されたと思うんですよ。

事実これは僕実際に体験したことではないのですが、先輩の方にお聞きするところによると、川柳雑誌の支部が出来てその支部が非常に賑やかになって来ると潰されたという。こういう支部がそのまま残ってくれたらね、今はもっと強力な力を持ってたと思うんです。

紫香　先生が職業川柳人を宣言されたのは昭和十二年ですね。個人雑誌いうか川柳雑誌を個人経営する言うて、宣伝されたんで、こんなことしたら食って行けんやないか言う人が出て、いつでも困ったら言うて来いと、ぎょうさん申し出があったけれど、先生は最後の最後までやるんやと言われたと聞いています。

栞　ちょうどその時、阪大川柳会に居ましてね、柳秀さん路生さんが無茶なことするなあ、言いはってね。そして僕も不朽洞会員になれと言われて、そんなん入ってええものやら悪いものやら全然分からない時代ですからね。恩被せと言うて随分と後から入ったものです。

薫風　高沢一浪とか新潟にいはった人も随分言われたらしいですね。

柳宏子　それを最後まで貫き通されたという丈に非常に気骨のある方であり、信念を持っておられたことは確かですなあ。

〝経済〟にもきびしかった路郎

薫風　智子さんどうですか、路郎先生のイメージ、伝え聞きでしょうが、どういう風な先生やと思われますか。

智子　近づきがたいという感じしか持たないんですけどね。

薫風　きびしかったことはきびしかったね。死ぬ二日程前にも僕と林さん呼んでおこられて死にはったさかい、あんだけ雷落としといてさっと死んでしまいはると思ったのです。僕ら編集手伝いに行って、おいとまするとき必ずしんどい時でも玄関まで送ってくれはりましたね。そういうことはけじめをつける先生でした。

鬼遊　そういうところが素晴らしいところでしょうね。我々口先丈ではそれに似たようなこと言うたかて、玄関まで送り出すとか見送るとかいうことは大体しませんね。

紫香　涙が出たんわね、いつも言う話ですけど、私の家内が死ぬ時です。いっぺん見舞に行かんといかんいうて、そいで亡くなる朝、息切れたとたんに先生入って来はりました。あの時は涙出ました。

柳宏子　まあ、いま話すと神話的な感じのする話がだんだん多くなると思いますが。僕は葭乃奥さんが本当に偉かったと思う。逆らうでなしにカジとってなさった。先生から言うたら結局路郎先生もそっちの方へ持ってゆかれるのです。

紫香　路郎先生は企画を持ってはりました。例えば十二月の忠臣蔵の会であるなら賞品は赤穂まで買いに行け。私買いにやらされましてね。

栞　あの時は地賞かなんかで塩味まんじゅうもろて。

薫風　地の塩やなあ。

栞　あのお宮さん御津神社や。

紫香　あの前のうどん屋で先着四十七人迄そばを出そやないか、紫香君予約頼むで。それで出席者の顔見るたび注文に走り、あつあつ食べて貰いました。

鬼遊　そんな役したはったん。言いに行く役を。

紫香　私ら句会係やからね。

鬼遊　食う会係や。

薫風　遊び心というか余裕やね。このごろの句会は、ちょっとそういうとこなくなった。

栞　創刊号の路郎先生の巻頭の抱負に従来の雑誌は皆初心者に不親切で既成の川柳人の作品発表の場だけだった。だから川柳雑誌は

それをおぎのうて初心者の指導と古川柳研究にも誌面を使うて柱にしてやろうというようなことを確立されたのです。今でも川柳塔の柱にしているわけです。

薫風　路郎先生が大大阪の句会の帰りに一杯機嫌で呑んでて、一時半が阪神電車の梅田の終なんですが、一時三十五分にやっと駆けつけたところ、まだ電車がおるわけです。空やないお客さん一杯乗ってる本物の電車が。そしたら自分の後からひょこひょこ歩いてるのが大便所から出て来た車掌、それも本物の車掌が。昔は悠長だったんですね。

そういうおもしろい話なんかも編集に入って、なかなかきばったことも言うたはるけどユーモラスなところがあったりしてね。

まあ創刊号からそんなんです。二号では、「一句を残せ」いうことを書いておられます。

紫香　「命ある句を作れ」言うて句会の終了後、三唱しました十。

これは奥さんの方が言われたことですが、あなたは動物の句がええとこあるから動物の句ばっかり作りなさい。それからでも、発表していったらいいねんよと。

栞　今でもあんた猫の句なんか上手やなあ。

紫香　その人の特徴をまず見つけて、それから一つ拡げてゆけということやね。

栞　それは一つの指導方法の要領でもありましょう。

鬼遊　十人が十人同じようなこと言うのやなしに、個性を伸ばすということやね。

紫香　たしかにね数えはんのは上手でしたよ。それだけ人をみる鋭い眼光を持ってはったわけです。

薫風　それからおもしろいことに昭和五年に浜口内閣の緊縮財政を敷いた頃にね、句会費が三十銭から二十銭に値下げしてます。そしたら清水白柳さんが帰りにその十銭でうどんを食べられたので、ものすごくうれしかったと言うてはるんです。

鬼遊　こういうのも反骨精神でしょう。

薫風　お金のこと敏感な大阪人というか、そういうものすごく感じますね。

鬼遊　ただ変ったことするというのじゃあなしに信念というか、そういうものを生活に表現してゆくというのは凄いですね。

栞　大分後になるけど水谷鮎美さんが句集を出すという時、ちょうど暑中見舞の広告の時期だったのでお前もう少し後にせい、そやないと暑中広告も句集も売れ行きこたえるからと言われた。そしたら鮎美さん、いやもう出来てます、とこう来たわけで、俺の言うこと聞かんかというて、それから仲違いされたんです。

そういう風に非常に経済観念のきびしかった先生でした。

薫風　その伝統はやっぱり鬼遊さんが受継いで今も仲々にきびしい、この会計は。

紫香　私ね、水客・潮花と三人の句集を出

岸和田市文化祭参加
第35回 市民川柳大会

日　時　**昭和60年10月27日**（日）正午開場
会　場　岸和田市民会館地下会議室
おはなし　西田柳宏子
兼　題　「押す」　梶川雄次郎選
「穴」　野村太茂津選
「首」　森中恵美子選
「粒」　榎本聴夢選
「無」　橘高薫風選
「正体」　西尾栞選　久保田元紀選
席　題　当日発表
各題2句・出句は出席者に限る
〆切2時
会　費　五百円（大会誌呈）
賞　市長賞ほか
〈連絡先〉岸和田市土生町一六九一八
高橋操子
電話〇七二四（二二）〇〇四九
主催　岸和田市文化協会
岸和田市教育委員会
後援　岸和田川柳会

した時、殆んど先生の意向で出したんですけど、とにかく雑誌、句集には定価を付けなければいけない、ただで人に上げるようなことはするなと言われました。

柳宏子　二〇〇円でしたなあ。

紫香　その代りに前もって予約をとれるだけとれと。出ると同時に無くなってしまいましたけど。

柳宏子　路郎先生そういった点では刊行物に対しては、非常にきびしい態度とられたね。

一流指向と遊び心

薫風　それから先生は一流を目指すというか、川柳雑誌の広告も一流の広告をとって来いと、それでこの雑誌も一流に近づくんやと言うてなさった。それで同じ発想で昭和七年に川柳の夕べというのを朝日会館で開催したのが創刊一〇〇号記念で、朝日会館を一杯にしたいうのが先生の自慢でした。

柳宏子　朝日会館なら今の朝日新聞社の本社の方のビルですわ、フェスティバルの向い側の。今で言うたらフェスティバルを一杯にしたというのと同じことでしょう。

鬼遊　あの時分では会館としては一番大きかったでしょう。

紫香　あれから毎年歳末に朝日会館でやりましたよ。

栞　昭和十五年には皇紀二千六百年の奉祝で、ちょうど川柳雑誌が二〇〇号記念になったのでした。そういうふうに三越とか、みんな一流のとこでやってはった。

紫香　句会の模擬風景をやったのが三越でした。その時でしたか。

薫風　芝居もやりました。

天笑　朝日会館とか三越でやるということは一流好みプラスちょっとでもマスコミに知らせたいという社会化をねろてたのでしょう。

柳宏子　川柳の社会化というのは本社の一つの標語旗印だったんやからね。

薫風　黒川紫香さんが昭和十八年に句会部長になっておられますね。須崎豆秋が編集部長とかいうのも、これもあの人がどうしてと思う人事ですが、若い頃は文学青年だったというから。

紫香　それまではね、句会は早く亡くなった親分親分言うてた里十九が部長をしてられた。その後お前やれ言われたのです。あの頃は事務所が筑前橋にあったんと違うかなあ。

栞　あそこへ朝から奥さんと出勤してはりました。

紫香　十八年に私が句会部長になって戦後しばらくやって、柳宏子さんもやってくれはって。

柳宏子　僕が始めたのが二十九年です。

薫風　昭和十八年に黒川紫香さんが司会部長されたその年、もう十二月には雑誌奉還というて川柳雑誌はこれでお国へ返すと言って終止符を打ったのでした。

栞　それが定価三円でね、又再刊なったわけやね、終戦後丸一年で。

薫風　不朽洞の理事長に中島生々庵先生が就任されたわけですね。もう戦後に入って来ました。昭和二十七年には三百号記念の特集号を。そこへ東野大八「人間横丁」随想で登場、昭和二十七年ですか、それから今までずうっと三十三年間、月々書き続けて下さってるのです。

天笑　人間横丁は単行本になってますね。

薫風　あれですか。路郎先生は原稿料もってくれへんから恩義に感じて出版されたわけです。

柳宏子　なかなか美談や。

栞　だから川柳群像なんかもね、川柳塔としても是非完結したら出さんといけませんね。あやめ池でなにかいっぺんしましたなあ。あれは何時やったかなあー。

薫風　「夕桜とんぼ返りがしてみたし」はあのあやめ池での句です。

栞　それから山焼きね、奈良の若草山の。それから道頓堀川に納涼舟を浮べて句会したり、動物園でしたり、キャバレーでしたり。

天笑　それは路郎先生の発想ですか。

柳宏子　その頃は高い高いと言ってもおおらかで金は安かった。今時キャバレー貸切ってやってみなはれ、金なんぼ有っても足りませんよ。

紫香　その時分から遊び心というものがね川柳塔の伝統みたいなものがあって現在でもやっぱり吟行やったり。路郎先生時代はどういう経済状態やったか知らないですが、いろんなことしてはります。今その時分と経費が違うから、そんなことやりにくい、限られた人だけになっている点もありますけれども。

栞　やれば遊び心にはなんら変りはない。やっぱり路郎先生の血が流れているのじゃないかと思うわけです。

天笑　僕ら全然血縁関係ないんだけどなあ。

鬼遊　川柳やってるから繋がってしまうのでしょう。

天笑　路郎先生の顔も見てないなりに僕らどんな人物かと思って何回か想像しました。それでこの間あるテープを聞いた時、胸がドキドキしたことです。声が僕が想像していたより疳高い声ですね。

柳宏子　疳高い疳高い。

天笑　想像してたのは、親分肌な声を想像していました。僕、声聞いて神経のいきとどいた人やなあという感じしました。それと厳しい人やと聞いていましたでしょう。それで自分にも人にも厳しい人やと思うたのです。

紫香　選なんかも、あの時分は川柳塔でも近作柳樽でも、二十句募集へ二十句選ぶ人もあるし、一句しか選ばれん人もあるし、毎月出してても一句しか載らん人もある。

柳宏子　ということはね、その作家によって選をしてられたのだから、二十句出して例えば鬼遊さんが二十句出した、ところがこの句は鬼遊の句じゃないと思ったら、没にしてしまう。鬼遊さんらしい句ということで、一句抜くか二句抜くか、五句抜くかと言うところですね。

だから今紫香さんの言っておられた十句抜いたのや一句しか抜いてないとかいろんな差があったわけです。必ずしも十句抜いたからあとの月にも十句抜けるかというたら一句しか抜けなかったりしてね。それで天狗になったのはよう見てはりましたな。

紫香　そやそや。

柳宏子　こいつ天狗になってると思ったらポン。だけどそこらやっぱり慰めるとこは…。

栞　僕はこわかった人でね、付かず離れずというのが僕の先生に対しての気分でした。

鬼遊　半分怖かった。

栞　半分怖くて付かず離れず、恋の妙諦というような感じでね。付いてしまったらもうあかんし離れてしもてもあかんし。

柳宏子　しかしそれは、あの当時の不朽洞会員の先生のお弟子さん達皆そうじゃなかったのですか。

天笑　そら確かにそうでしょう。

中島生々庵先生でも桑先生でも、それ以前の人達の話聞いても路郎先生の話いうたら自然にことば改まってるでしょう。今の我々やったらなんであんなように言わんとあかんねやろ思う位に先生に対する言葉づかい改まるね。

薫風　私は割に甘えてたな。

柳宏子　薫風さんや、われわれの後のものほど甘えてたということは言える。

薫風　晩年は大分折れてなさった。

柳宏子　そらもう未だに生々庵先生なんか路郎先生の話する時はかしこまって、舌を噛まんかいなと思うほど改まった言い方しはります。

鬼遊　わたしらお会いしてないけどおそろしい人という感じはあった。だから付かず離れずいうのは、一応そういう態度とったんやないか。

柳宏子　ということはね、恐しいということじゃなくて、こと川柳に関しては厳しい人しかし川柳を離れたら非常にざっくばらんなだから僕なんか近付けたわけです。

私はプロの川柳家だ、わしの領域には踏み込んでほしくないというプライドは確かにありました。われわれを寄せ付けない厳しさを持っておられた。だからわれわれに対してびしびし言われるけれど、それに対して反論しても、とてもじゃないが、かないっこないというものがありました。薫風さんどう思いますか。

薫風　まあ、そうやなかったらあれだけの仕事出来ませんね。エスペラント語で芸術は国境を越えて飛ぶなんて書きはるし、それから市立中央図書館に短詩文学文庫、川柳やら詩やら短歌、俳句いうような短詩文芸の書庫を一室こしらえてもらって、そこへ集めるという大きい仕事もなさる。短詩文学連盟というのを関西に作ってその理事長にも推されはるし、そういうようなことでもスケールが大きかったですね。そやから実行力や見識が無かったら誰も相手にしないです。

鬼遊　思いついた企画とかそういうもんを実行に移して行きはったというのはすごい。

薫風　ワンマンやったから出来たのでしょう。

柳宏子　又それだけに惜しまれるのは、わが城を守り過ぎたがために、いわゆる羽を拡げて傘下をのばすということがちょっと出来なかった。ただ確かに今惜しいなあと思うのは、清水白柳さんがあれだけ生涯かけていろいろやってられたけど、片っぱしから路郎先生門下の作った支部はみな大きくなると潰さはった。だから、まあぼそぼそと蛙の子がやってるような、そういう句会は生き長らえた。

栞　そういうことは言えると思いますね、たしかに。

「川柳塔」創刊

薫風　さて、それで路郎先生、悲劇的な晩年だったんですけども、そして新生の川柳塔が昭和四十年の十月に創刊されました。中島生々庵先生に川柳界に復帰していただいて、不二田一三夫さんに編集を担当していただいて、出発したその当時、選者の方が清水白柳さんが九輪抄というのを担当、それから中島生々庵、北川春巣、西尾栞、若本多久志、川村好郎、松江梅里、菊沢小松園、ちょうど八人おられたので八岐の大蛇みたいに、八人の方が交代交代に選者をなさり、まあ、割りふりやなんやかやのことで総花的なことから出発したわけです。混沌時代やからね。

だから僕非常に残念でした。投句しても、選者が変ったらころっと巻頭近かった人が下の方へ行ったり、ものすごく混乱して、だから今、二十年が経って「川柳塔」は栞先生一本、それから「水煙抄」は紫香先生お一人という、これが当然の形なのです。

昭和四十一年十二月に鬼遊さんが水煙抄に登場して来なさった。川村好郎先生の選にです。その頃どういう風な感じでしたか。

鬼遊　その時分は、羽曳野病院にどんぐり句会というのがあって川村好郎先生が月一度手弁当で教えに来て下さった。現代詩をやっていたところが同室に居った男が川柳やらないかと言う。どないして作るんや、五・七・五なんでも思ったこと書いたらええと言うので、作ってみせたところが初めて作ってそんなに早いこと五句も十句も作るんかと、それでいけいけと句会まで引っぱり出されたのです。

その時分のことですから一般の人と同じで川柳いうのは駄洒落というか、そういう感覚しかなかったわけです。それで自分も作句の姿勢としてはそういうもの持ってたわけですが、好郎先生の入選句というのが道徳心というか、そういうものの匂いがきつかったのです。こういうものだけで面白い句いうものは案外少ないんやないかと思って退院するまで疑問を抱いたままだったんです。現代詩をしてたのでそのギャップというかに迷い、退院するなり黙って葭乃先生を生駒へ訪ねて行ったのです。

栞　退院してから？

鬼遊　退院して一ヵ月目です。万代の家へ

自画像 時事

黒田草舟
（前大阪府知事）

歯抜け

前歯抜け舌で噛み切るそばの味
熱弁も歯抜けぢぢいじゃ様ならず

風邪女房

女房がカゼ引きゃ亭主むさくなり
わがつくる雑炊女房の気に召さず
食器洗いいずれは女房やり直す

囲 碁

必然に勝ち偶然に敗けるらし
攻めばかり守りばかりはヘボのくせ
石持てば気弱に似ずにけんか好き
もがくだけもがいて大石御臨終
持ち込みとなって一局終りなり

福 祉

GNP伸びて福祉はちぢこまり
国の責め生きる権利が問うている

ロンとヤス

憲法の禁酒の誓い邪魔になり
禁酒など理想に過ぎるとヤスは言い
いっき飲み強いる悪友の下心

葭乃先生がお出かけになるとこへだしぬけに行った。まあ二階へ上れ言うて西陽の当る暑い部屋へ通されました。そこでおよそ二時間程話してくれはりました。その時初めて家の中で夏の暑いのにネクタイ締めて正座して拝聴したのですが、一番最初に葭乃先生のおっしゃったことは、人を訪ねる時は前もって連絡とってくれ、その日は私が行ったため路郎先生への月詣りを止めはったわけや。ということは見も知らん男やけど川柳やる奴でそのことについてわざわざ来たんやから、と特別待遇を受けたのです。

そこで私の行った目的言うのは、病院で好郎先生にこういうふうに習って明るい句を作れと言われてるけれども、生きてゆく内に明るいことばかりでなしに、つらい日もある、これは川柳ちがうのですか。先生はそれも川柳やとちゃんと言うてくれはったわけです。病院で習ったんと葭乃先生の言葉とちょっと違うと思うてまして、それから大方七、八年経ったら好郎先生の明るい句を作れということは、入院患者を対象にしてるから暗い句を作らすとだんだん減入る、そういう配慮があったことが分りました。葭乃先生は入院患者にもの言うてるのやなしに、川柳をいっしょうけんめいやってる人間に対して広い意味の川柳観を言うてくれはったわけです。

だから、誰がどこで何を言うたかいうのを鬼の首を取ったように言うのはいけない。前後いろんな時代背景とかそういうものを考えないと過ちがある。両方とも川柳だということが七、八年経って自覚されたわけです。

病院で聞く路郎というものは、ものすごく雲の上の人で神様みたいな存在でした。ましてや好郎先生の話の中から出て来るわけで、そんな人のエピソード聞きたいと思ったのも奥さんにお会いした目的の一つです。一部始終を聞いた中で面白い話は、路郎先生がものすごくせっかちな人であったということです。路郎先生が外出して帰って来る時に、生駒か万代かどこか知らないけれど奥さんが改札口まで出迎えに行くと、電車降りたら一番先に改札出て来はると。

薫風　「改札を出るも先駆者たらんとす」。

鬼遊　それが神様みたいな人が人を押しのけて改札へ足早で来るいうのがものすごく意外やった。ああ、ここに人間が居てるなあと思うわけ、いい話聞かしてもろたなあと思って、なんぼ神さんでもそういう面がある人間くささに、ああ川柳っておもろいもんやなあということをそこで教えられたのです。

薫風　あんた早いこと川柳塔賞もろたね。雪で。（第二回川柳塔賞「消えるから雪は刹那を潔く舞い」）

鬼遊　四十三年にもらってます。

（つづく）

録音・整理／藤田泰子

西尾 栞　喜寿・金婚
句碑建立五周年記念川柳大会

日　時　昭和60年９月29日（日）　午前10時開場

会　場　新阪急ホテル２階　紫の間
大阪市北区芝田１丁目１―35　ＴＥＬ 06（372）5101

□ 祝　　辞……日本川柳協会理事長　藤島　茶六 氏
□ おはなし……川柳塔社相談役　東野　大八 氏
□ 題と選者（各題２句　◉締切12時　◉欠席投句拝辞）

	「ロ マ ン」	八木千代 選
	「祝　　杯」	橘高薫風 選
	「空　　気」	寺尾俊平 選
	「思 い 出」	小松原爽介 選
	「小　　説」	渡辺蓮夫 選
	「先　　祖」	去来川巨城 選
	「太　　陽」	礒野いさむ 選
事前投句	「情　　熱」	西尾　栞 謝 選

（ご出席予定者に限ります）

事前投句されない方もご出席歓迎!!

〈事前投句〉 **８月31日**までハガキに２句
〒545 大阪市阿倍野区三明町２―10―16
ウエムラ第２ビル　　川柳塔社「記念大会」宛

□ 会　　費　5,000円（祝宴共）
□ 祝　　宴（同会場にて午後５時～８時の予定）

★宿泊はまだ余裕があります。お申込みは
〒593 堺市堀上緑町２―９―２　河内天笑まで。
お宿＝新阪急ホテル・梅田ＯＳホテル・大阪弥生会館

主催　川柳塔社

■アンケート

初心者時代の想い出

整理　樫谷寿馬

美祢市　安平次弘道

私が川柳に接したのは、叔母の義弟の山本葉光が持っていた川柳雑誌を見てからである。昭和29年正月だった。二月号から購読しているうちに、この程度ならと恐いもの知らずで投句してみた。初投句が八月号の近作柳樽に二句載ったのである。当時の入選者は二百名位で、そのうち一句組が八十名、二句組が六十名位であったから、その嬉しさは格別であると同時に少し川柳を甘く見たのも事実であった。しかし、九月は全没、それでも二句入選の自信はゆらぐどころか作句が楽しくなっていた。十月には二句、三十年新春号では遂に三句入選。もう川柳雑誌の来るのが待ち遠しくなり、すっかり川柳のとりこになっていた。今から考えると、初投句の入選も路郎先生の初心者に対する温かいご指導によるもので、思い上っていた自分が恥しくなると共に川柳を生涯の友にして下さった路郎先生に感謝しながら、「命ある句」を目指して努力している今日この頃である。

島根県　榊原秀子

嫁いできた当初の所在なさの新聞投句から先生に拾い上げていただき、今思えば、観桜句会の始まり頃だったろう。ぜひ出席をとのお誘いに、随分の勇気を出して、何の予備知識もなく出かけ、どうするものか聞けばいいものを聞くこともせず、つい傍聴人で終り、写真撮影も恥しくて仲間入りを失礼。その日「冷蔵庫」という題があったのを妙にはっきり覚えている。その後、木次大東の句会へ松江から吉岡きみえさん、今の伊藤好江さんが出席なさり、ああ、これで女のお仲間が出来たとホッとした。その頃、娘の名前で番傘本社へ投句、二句三句組だった。それがこちらの先生が川柳塔社系とわかり、何の悪気もなく、あっさり川柳塔社へ転向、以来、本名秀子で今もってのろのろ組でお世話になっている。

あの苦い経験を新人へあげまいと肝に銘じている。先輩の御無礼を記したこと、深くお詫びすると共にお許しを願う次第です。

和歌山県　寺田裕美

今でも初心者の域を出ませんが、私が川柳を始めた頃はよく先生から「発想は良いが、表現がまずい」と言われたものでした。それでも多作多読をくりかえし何とか自分の思いをよくわかってもらえるようにと努力をしました。

先輩の秀句に接した時はとても感動して、何度も声に出して諳んじたものでした。いつまでも溶けないアメ玉をなめつづけては何とか自分の血や肉にしたいと思いました。

句作を真似たり盗んだりしても自分の句にならないことへの焦りを覚えたものでした。

でもとに角「人間を詠む川柳」への憧れは今も変らず燃えています。

羽曳野市　中村優

私が初めて投句した塔誌を開けてみました。昭和五十年四月号からのお付き合いです。今は亡き菊沢小松園先生の選の水煙抄に投句。

三十年悪夢が戻る長い夏

暑中見舞活字の衣脱がせたい

入選句はこんな程度でしたが、作句に燃え柳誌を待ち侘びておりました。

先生のお手紙によるご指導に、句に行き止れば見る角度を変えよ、冷たくなってもその底に人情味を、と、ユーモアの句を志しましたが、意に反して没が続き先生の偉大さを知らされました。

出口からにゅっと顔出すなじみ客

素うどんに身の振り方を問いつめる

ほんわかと胸に食いこむ余情に川柳を見た

当時が懐かしく思い出されます。

叱られたとうりにやって褒められる

今も座右の句として戴いております。

竹原市　小島蘭幸

昭和四十年十月、川柳塔が創刊された。私は当時高校二年生だった。確かその翌年だったと思う。「主人が川柳をやっていたのだけれど、川柳をやっているのなら」と、古い柳誌と短冊を頂いた。ご主人が亡くなられた時全ての柳誌は焼かれたのだが、不思議とこれだけは残っていたのだそうだ。それは、昭和二十七年一月～六月号の川柳雑誌であった。その中で、我が郷土の大先輩、黒本芳泉の名前を初めて知った。芳泉さんは路郎選の近作柳樽欄の巻頭を常に飾る好作家であった。

一介の野人となったピクを提げ　芳泉

帯止のヒスイの色も夏となり　芳泉

エビの如く寝る母上の苦労性　芳泉

それから為芳泉へと書かれてあった短冊は

酒とろりとろり大空のこころかも　路郎

若かった私は「路郎先生の短冊を貰った貰った」と山内静水竹原川柳会会長を大いに羨ましがらせたものだ。今、なつかしく思い出す。

今治市　月原宵明

私が川柳に手を染めたのは昭和六年だから二十一歳である。ある新聞で渡辺暁童（後川柳雑誌編集部に勤務）という男が、市内で文具商を営みつつ川柳に情熱を傾け、同年輩の者数名を集めて句会を開き、勉強をしていると聞き出席したのが病みつき、然し住込みの奉公人などで出入激しい落着きの無い句会で炬燵に居るのは文庫、暁童、私ぐらい。

それでも作句、柳論と熱意高く、昭和七年に吹揚吟社を創設（暁童支部長）その一員となり、翌々九年には〝盲蛇におじず〟四国川柳大会を吟社が主催し、麻生路郎先生をお迎えした次第で、今手許にある半折はその時先生が反古にしたのを失敬したものである。

岡山県芸術祭参加
第37回 西日本川柳大会

とき　昭和60年9月1日（日）
午前8時30分開場

ところ　久米南町中央公民館
岡山県久米郡久米南町下弓削
（津山線弓削駅下車徒歩5分）

兼題　（50音順）
「内　助」　黒川　紫香選
「火」　小松原爽介選
「深　い」　田中　好啓選
「橋」　福岡　普鈴選
「枕」　山田　止水選
「誕　生」　渡辺　独歩選

席題　2題・他に特別題　締切11時

投句　各題2句以内。縦20cm・横4cmの句箋に1句ずつ明記。裏面に雅号、8月28日（必着）までに左記へ。
〒709－36
岡山県久米郡久米南町下弓削
弓削川柳社

会費　出席一、五〇〇円（発表誌・記念品・昼食呈）
投句一、〇〇〇円（発表誌呈）

賞　岡山県知事賞ほか13賞を総合成績で。

主催　弓削川柳社

当時の川柳雑誌の中から今覚えている名は福田山雨楼、橋本緑雨、西田紳楽、須崎豆秋さんなど。また私の処女作は次のうちどれか。

海女の乳藻草を取れば児がたかる
あぜ豆を盗めと月が冴えている

仙台市　川村映輝

当時、河北新報の夕刊に浜夢助選による川柳欄があった。多少興味をもって読んでいたが、句を作るまでには至らなかった。

或る日、当時郵政大臣だった田中角栄元首相がある席上で浪花節をうなっている新聞記事を見て通勤の電車内で初めて作ったのはつぎの句であった。

浪花節うなり大臣名をひろめ

河北新報に投句したところ偶然にも入選した。初めての句だけに嬉しさ一入であった。それからは夢中で作っては投句をしていた。

しかし川柳の何であるかも解らないので夢助先生のご指導をうけたり、麻生先生の〝川柳とは何か〟という本などにより幾分関心が出てきたので、川柳宮城野、ついで川柳雑誌（川柳塔）等のご指導をうけながら楽しんでいるところであるが、依然進歩の跡がなく汗顔の至りである。

大阪市　松尾柳右子

初心の思い出と言って振り返ってみて、余り進歩のない自分を見出しています。まだまだ初心を引きずっていて川柳の深さに浮かんでただよっている有様です。川柳との出合は駒つなぎ川柳会が姉柳伸宅であり、お手伝いの傍で作句させて貰いました。当時、柳伸宅の二階で二十五、六人程度、たまに故酔々さんが「見せてみ」と言ってアドバイスして下さいました。私はまだ兼題のある情景を思い浮かべて指で五七五を数えては三句作るのに大変でした。酔々さんが架空の人物、小説や過去の偉人等の引用を教えて下さり、少し視野の幅を広げさせて貰いました事は忘れられません。なかなか自分の経験した範囲位で心の奥の表現に苦作して居ります。「いつまでも川柳作句一年生」仕事の関係で月曜日位しか川柳会に出席出来ず残念に思っている次第です。

唐津市　浜本義美

私の初心者時代といえば、同町内に住んでた浜本久仁於氏から初めて川柳の手ほどきを受けたのが復員後間もない昭和二十二年頃で田舎柳人ばかり小人数で近くのお寺へ集まって駄句を並べ悦に入っていたのが私の初心者時代だったと思う。だがそれも一時的なもの社会の荒波にもまれ、唯生きてゆくだけの川柳を忘れた人生を三十年も費やして仕舞い、そして子供も巣立ち再び「川柳」を始めたのが五十三年春からである。

地方新聞柳壇への投句、虹川柳ク入会、川柳塔誌友と本格的に川柳への執着を炎やしたこの頃が真実の初心者時代とも言えよう。

故新岡回天子師や田口虹汀氏を知り彼等先輩の指導よろしきを得て今日に至ったが、何分愚才の私には一向に「川柳塔」に刻まれるような生きた句を詠むことが出来ない。

人生の価値を晴着に教えられ　（昭23作）

◇

川柳塔社常任理事会（8月1日）

出席者＝栞・形水・紫香・太茂津・柳宏子・萬的・鬼遊・文秋・重人・雀踊子・凡九郎・天笑・智子・寿馬・笛生・史好・薫風

《議事並に報告事項》

▽七百号記念事業の一つ豆秋句集「ふるさと」復刻版の編集作業は順調に進んでいる。

▽9月29日のお祝い会の準備も愈よ大詰めの段階に入り、各パートより進捗状況が報告された。

■**9月**の常任理事会は**2日**（月）

紹介／板尾岳人

カラーブックス〝川柳にみる大阪〟が藤沢桓夫・橘高薫風共著により㈱保育社より発刊、お中元の真最中（執筆8月5日）にお中元がわりに紹介することにする。

58年11月に、なにわ川柳この一句が発刊され、その序文に藤沢桓夫氏は、薫風君はもともとあまり頑健な体質の人ではないのだが、最近の薫風君の新しい川柳の普及者・実作の指導者としての活躍には瞠目すべきものがある。生粋の大阪人であり大阪の街へのふかい愛情が折からの大阪城400年祭に当り、この集を編むことを彼に思い立たせたのではないかと思われる、と書いている。

それから20ヵ月、薫風副主幹個人句集三冊と合わせて六冊目の誕生誌である。今回も「はじめに」藤沢桓夫氏は、川柳家の中には、かなりの人が「川柳は大阪が中心」という認識をもっている。そこで本書は大阪を舞台に詠み込まれた作品とその背景を軸に、川柳の穿ち、滑稽味、軽味を説きながら、川柳の文芸たるゆえんを知ろうとするものである。

本書のほとんどのペンを執ってくれた橘高薫風君、イラストをお願いした成瀬国晴氏も付かず離れずの川柳味あふれる作品をものにしていただいた。

さて本書は一五〇頁の小柄ながら川柳のエネルギーが燃焼する強さを実感出来る貴重な一冊になり、大阪の明るさ、暗さを山盛りし貴方も大阪通になれることだろう。

こいさん、くいだおれに始まり、あっちこっちに至る16章の項目に分れ

〈天牛〉（てんぎゅう）

天牛の棚を見上げた鍋井克　西尾　栞

天牛の初代社長天牛新一郎氏は今年93歳にて南海高野線千代田に御壮健（天牛三国ヶ丘書店店長談）

〈紀伊国屋〉

逢う場所は少しキザだが紀伊国屋　谷垣　史好

〈大阪の穴場〉

大阪の穴場博多で聞いてくる　大坂　彤水

大阪には、よかところが沢山ありますばい。

〈岸和田だんじり〉

だんじりと並んで走る肩車　高橋　操子

〈飛田〉

童貞を捨てた飛田が暗すぎる　宮園射月芳

岳人の3歳頃父の肩車に乗せられ松島新地の明るい女中部屋で遊んで父を待っていたことが頭の中を一瞬走り去った。

本書は最後に『ジャーナリズムの川柳に対する認識は、まだ川柳界にとって厳しいもので、狂句百年の弊は、百年に近い先人の尽力にもかかわらず、未だもとに戻らないのは残念なことである』と結んでいる。

《カラーブックス》

川柳にみる大阪

藤沢桓夫・橘高薫風共著

■文庫判　152頁　■定価　500円

発行所　株式会社　保育社

〒540　大阪市東区上町一―一七

振替口座大阪6―12346

初歩教室

題 ― 月 ―

阿萬萬的

月の課題に対して、お月様でない句もたくさんありました。先ずその句から

月満ちて予定日近し鳴る電話　久子
臨月の娘と分ちたい暑に耐える　テルミ
下五は素直に〝夏に耐え〟としてみました。
月遅れの雑誌の並ぶ待合所　仙治郎
月足らずでしたと母が言う力士　かすみ
子の月謝母がパートで稼いでる　千代女
（月謝分だけはパートで稼ぐ母）
月賦でもよいと店員よく喋り　春枝
だがお月さまに人間が着地したのは現実で
私達の夢はこわれてしまいましたね。
昔ほど月にロマンを忘れられ　喜代
（ロケットに月のロマンは忘れられ）
月の上人が歩いて夢破る　久留美
文明が月の神秘を消して行く　克子
人間の愚に夢消えた月うさぎ　てる
（人間の愚かさ夢の消えた月）
兎がいづらくなって月を下り　喜代
（ロケットの騒音兎のいない月）
しかし月は今も童話の世界に引き入れてくれる事も忘れていないようですね。
月明かり影を踏み合いわらべ唄　弧舟
（月明かり影踏み合うたわらべ唄）
月の中やっぱり兎が居てほしい　八重
夢のある童話の中の月世界　千恵子
月世界まだ沢山の夢が住む　義男
（月世界まだ夢が住む謎が住む）
孫が尋く月の兎は雄か雌　章久
（月の兎の性別を聞く子に困り）
祖母の言う月は神秘のままで出る　保夫
〝神秘〟を〝ロマン〟に変えてみたらと思ってみましたが祖母が頭に来ているので…。
そして露天風呂で見る月の句もありました。
幸は露天風呂にて月に酔う　千恵子
露天風呂アルプスの端の月仰ぎ　寿美子
月明り少し恥じらう露天風呂　勝美
恥じらっているのが男の方の句で月に酔うているのが女の方の句。一寸覗き見がしてみたいですね。
竹久夢二の絵は月を思い出させますね。
月見草夢二の美人画想い出す　千代女
（月見草夢二美人の細い眉）
月澄めば人待つ眼なり夢二展　たゞし
澄んだ月は夢二美人の印象から遠いのと違いますか。私なら半月、それも朧な月か三日月位想像をしますが。
ひたすらに君待つ夜の月見草　テルミ
月の光は冷たく何故か私達をセンチにさせるのです。これは私が老境に入ったせいかも。
残月に我身の老いを考える　倫子
傷心の肩へやさしい月あかり　克子
（傷心の肩へもやさし月明り）
明日の晴願う心に傘の月　温子
（月の宰女は何を考えて）
老い二人草の庵へ望の月　草生
（歳老いた庵へまるいまるい月）
無月なる今宵何かがおこりそう　桃花
〝無月なる〟を〝月の出ぬ〟にしてみたら…。
須磨の浜月はやっぱりロマンスで　繁男
（一寸私をセンチにさせた須磨の月）
想出は庭に佇み月を待つ　温子
（想出を語ろう庭の月に立ち）
枯れるまで恋をせよとて月の照る　カネ
命みじかし恋せよ乙女じゃないが…。
久し振り残る火種と月の道　豊太
老いらくの散歩また楽しからずや、ですね。
月がとっても青いから遠回りして帰ろ、じゃないが、帰り道の月は懐かしいものです。
残業へ月が労う帰り道　高代
遠い日の月と歩いた峠道　洋子
塾帰り月とお話して歩く　よし津
残業のビルの窓辺に澄んだ月　里子
千鳥足家路を月に導かれ　愛子
別れ道月もとぼとぼついて来る　高代
これっきりの別れに月が明かる過ぎ　てる
子の童謡月も聞いてる堤防で　繁男

（お月様にも聞かそう孫と歌うた）
背の孫の歌に合せて月の道　弧舟
（背の孫の歌と帰ろう月の道）
また、月は叙景だけでも心を打つものです。
雪月花四季それぞれに風情あり　八重
（月冴えて四季それぞれの詩を綴る）
宿からも見えて釣場の月の宿　実男
（窓からも見えます釣場のまるい月）
ローン付家の屋根にも月は冴え　やすお
（ローン付の屋根にも月は出てくれる）
夏草の勢い月を忘れさせ　勝美
（夏草の勢い月にある風情）
満月の高原泥棒影もなし　寿美子
（満月の高原動く風見える）
駅廊で月を眺めて子を偲ぶ　はる子
〝駅廊〟は素直に〝プラット〟にしたい。
名月や昔にかえる城下町　実男
〝名月や〟を〝松に月〟としたら、荒城の月を思い出しますね。
溜り水浮んだ月が震えてる　てい子
米子ではこんなことはないでしょうが。
（メタンガス　ブクブク月影震えてる）
夕月に開く夕顔夢を呼ぶ　晃世
（宵の月夕顔の白夢を呼ぶ）
梅雨の間の月が照した句碑の文字　つや子
（名月が照した句碑の文字の影）
留守居して窓辺の月に見蕩れたり　愛子
（留守居して窓辺の月を見てあかず）
そして月に恥かしい思いをしたお方もおありのようでした。
満月に女心を覗かれる　つや子
寝乱れを月に覗かれ照れて見る　サワ子
月光をまばゆく思う艶ざんげ　章久
梅雨晴間赤味帯びてる月中天　周三
（何を語ろう二人へ赤い月が出る）
糸ほどの月に恐れを持つ自責　倫子
背徳へ月の蒼さが胃に沁みる　寿子
こんな句もありました。
淀君も見たか天守閣の月　兼治郎
（淀君も見たろう天守の上の月）
地下街のお花売場に月の花　里子
（地下街でお月見をする花を買う）
まるい月空けたワインの瓶のうた　てい子
（まるい月ビヤ樽ポルカ歌おうよ）
不夜城の空にもまるい月が出る　倫子
（ネオン街に不似合いな月眠たそう）
当世時事吟の部にはいるような句。
月旅行子供が費用ためている　山久
六十路超え未知の月裏凝視する　里子
この月を眺め飢えてる人が居る　明吉
最後は例によって私の好きな佳句を並べさせて貰いましょう。
想い出は三日月形の母の櫛　カネ
黄楊の櫛の艶が見えるような気がしました。
月の道苦楽を分つ妻があり　たかし
下五〝妻がいて〟にしては。お惚気有難う。
この月の月を見に出て嫁を呼ぶ　ちよ
やさしいお姑さんですねえ。
月並なお世辞も言わず乗り遅れ　昭治
バラ色の月日信じたくすり指　春枝
お祭りを月見と共に百舌鳥の宿　はる子
敗戦で見たお月様むなしくて　芙久枝
見え隠れする月で詩がとぎれます　劣
もの分り良い月といて泣けてくる　桃花
化ける気の狸に月が大き過ぎ　義男
花道に何もいらない月明り　たかし
何となく祈りたくなる月明り　愛子
月かげり女が先に口を切り　武庫坊
一人ではなかった添寝の月の章　たゞし
塀越しにくちなし匂うて月朧　洋子
客送る戸口こんなに近い月　よし津
現身にたち戻りては月に酔う　寿子
負け試合ひと際大きい月の章　三男
牛の群れ肥えて見えるは月明り　劣
お湯割りは濃い目にしよう月の章　武庫坊

◇

題「道」　**9月10日締切**（11月号発表）
ハガキに5句以内
「夢」　10月10日締切（12月号発表）

宛先　〒598
泉佐野市中庄一〇八一―九九
阿萬萬的

軽い

森下愛論選

人の世を軽く見た娘の落し穴　千賀子
その主はここに居るぞと軽い咳　里風
母と手をつなげば軽い靴の音　大柏
カネですむ話だなどと軽く言う　カズエ
軽口をたたいて寡婦の高笑い　三五島
軽そうにして提げてやる女の荷　耕花
退院が真近で試歩の軽い足　文平
軽口を叩く上司で親しまれろ亭
病妻の軽さをそうと横にする　露児
存分に愚痴ってからの胃の軽さ　義美
子を思う割には父の日の軽さ　佳雲
三代が軽いジョークで同居する　雄々
耳朶に軽いパールの物想い　伊津志
天で逢うなどと約した軽いうそ　玉恵
会議室出れば互いに軽い口　豊
責任の軽い順序に判を押す　明水
愚痴吐かせ帰る靴音軽くなり　悠也
尻軽い女で重宝がられてい　七面山
味見皿嫁に譲って気が軽い　多賀子
商を譲って老いの軽い肩　公一
軽い出合いで重い責任持たされる　規不風
軽い咳あなたのせいの風邪にする　砥代
母背負い母の軽さを不憫がる　代仕男
返事だけ軽い帰りはもう忘れ　一進
軽口をたたき別れた友の訃よ　よ志子
雰囲気に齢を忘れた軽はずみ　勝美
俎板のリズムも軽い目出度い日　はじめ
軽い気で言った言葉を咎められ　綾珠
見通しの軽い誤算へ重いつけ　さと美
引退し足の先迄軽くなる　悟郎
気軽い返事で面倒避け通し　千秀
甘言へ軽い気持で乗った悔い　本蔭棒
打明けてそれから軽い両の肩　洛酔
許す気の瞼を軽くとじてまち　寿美
提げたとき軽い荷物が邪魔な旅　雅風
軽いから誘いにうっかり乗せられる　与呂志
軽い荷で来た女房が根を生やし　みつる
尻軽な女悲劇の種孕み　佳
肩書が取れて気軽な宴の席　朴竜
好きな事させると軽い腰になり　テル
軽量の夫に頼るエルサイズ　可住
軽々と返事仲々上げぬ腰　幸一
軽く見た石からギックリ腰もらう　悠泉
骨壺の軽さに重い過去偲ぶ　人
百点を詰めると軽いランドセル　地
寄り添うて軽い寝息の老夫婦　天

式

土居耕花選

式場にあっちと電柱指をさす　軸
その時になって袴が結べない　晴子
喪服脱ぐ未亡人になりました　芳子
洋式のトイレで尻が落ちつかず　里風
警官も一息入れる手打ち式　多賀子
千秋楽君が代の世にふと戻る　春日
新式のカメラ馬鹿にも利口にも　圭介
よかったね式の天気が晴れてくれ　盛雄
葬式に特上並の見積り書　冬子
さそり座の女の式だから派手に　倫子
旧式に生きて悔いなき老夫婦　和友
形式が嫁の鎧を重くする　覚然坊
夢抱いて愛の船出の式を待ち　京子
根廻しが効いてセレモニーすぐ終る　テル
娘の挙式迫り無口な父となる　正敏
悪友のスピーチ式を和ませる　公一
式服を着ればガラリと人を変え　悠泉
方程式の解ける日も来る鳳仙花　元江
方程式解けて奥歯が痒くなる　枯梢
声良くて今日も式辞を読まされる　玉恵
作文の祝辞が長い生あくび　七面山
格式を保つ勝手は火の車　優
　　代仕男

略式でいただくお茶の旨い事　文平
この式へ誰が離婚を考える　道子
式終えてローンが重くのしかかり　八太郎
式ひとつ済んで仲人ほっとする　与呂志
ご隠居をさせてあげたい両陛下　かすみ
式迫る父一人だけ拗ねている　米朝
派手な式別れる事のないように　重人
式場に行けば案内役でした　みつ子
先に皆言われ困っている式辞　佳雲
葬式の話母にはしたくない　妻子
ユニークな式辞笑いで締めくくる　狸村
一人だけ産む約束の式を挙げ　星斗
式場に来てもウロウロ苦労性　愛論
式服に縛られて居る父と母　枯梢
式順は九段の社に埋めてある　四郎
　佳
式無事に済んで着られるマタニティ　成人
可否もなく以下同文の順に慣れ　千賀子
式の日を増やして遊ぶ癖をつけ　サワ子
僧が来てみんな儀式の顔になる　大柏
葬式の隅で真相ささやかれ　秋峯
　人
式急ぐ訳を聞くほど野暮でない　本蔭棒
　地
八月は悲しい式があるばかり　宵明
　天
静けさに朕オモウニを思いだし　新一郎
　軸
赤飯で娘と母の式終る

突然

松岡三吉選

突然に娘が恋人を連れて来る　ちよ
好きな人居ますと親をあわてさせ　悠泉
突然の悲報に動揺隠せない　朴竜
突然に来ても嬉しい孫ひ孫　カズエ
感情に触り突然鬼女となる　豊
良い事が突然起こる筈がない　あやめ
突然の友に喪服を着るショック　秋峰
突然の訃に会いて知る人生詩　温子
単身赴任ある日突然妻がくる　枯梢
突然に来て驚かす久し振り　覚然坊
突然に妻が優しくなる不気味　芳子
初恋を突然聞いたクラス会　かすみ
予期しない時に人生曲り角　高子
突然と書出し金をかせと言う　兼治郎
突然も突然葬式で出会い　七面山
突然があってはならぬ核ボタン　寿美
突然に来た吉報に足が浮き　道子
突然の客にあわてる台所　元江
突然の訃報夕べも飲んだ友　はじめ
突然の別れの電話に貝となる　恵
突然の客に先ず見る冷蔵庫　登美子
炭坑の突然毎度とは悲し　やすお
突然の事で言い訳間に合わず　房子
突然の客へ飛びだす市場かご　山久
突然の電話記憶を呼びもどす　保夫
突然の客にまごつく妻の留守　頼一
ぱったりと会って鼓動が鎮まらぬ　芙久枝
突然の事故に人生狂わされ　喜代子
突然の返事に困るつまみ食い　彩女
突然に家の灯消した鉱山の事故　どんたく
真夜中のベルが訃報を持って来る　あき
突然の別れになった空の事故　達子
突然の死へ脚光を浴びる人　雄々
突然の敗戦だった油蟬　千賀子
突然の話でもめている遺産　狸村
突然を突然にせぬ消防署　佳雲
　佳
突然に父奪われた鉱山の遺児　倫子
突然のことで慰めようがない　妻子
突然という事にして逢うている　花梢
突然をお願いに行くポックリ寺　佳雲
突然にすれば準備が行き届き　宵明
　人
突然にしては役者が揃いすぎ　木魚
　地
突然に男が受ける果し状　砥代
　天
突然の事があるから遺書を書く　耕花
　軸
うしの日は突然でないうなぎの死

柳界展望

集録・板尾岳人

★川柳誌「緑」250号記念センリュウ・イン・ナゴヤ
日・9月22日（日）AM10時
所・名古屋市・通信ビル
題＝雑詠三題・風・緑・リズム・坂道　各題2句
雑詠三題は同一句を禁じます。選者は当日発表（席題もあり）
主催・川柳みどり会

★松江番傘創立60周年記念川柳大会
日・11月3日（祭）AM10時
所・松江商工会議所
宿題第一部　事前投句〆切り9月30日
松　大野　風柳選
祝い　橘高　薫風選
文学　礒野いさむ選
風　田中　好啓選
男　大森風来子選
民話　柴田　午朗選
投句は各題ごとに8×20cmの句箋に二句ずつ連記名。封筒に住所氏名明記
投句料千円〒690松江市南田町49松江番傘川柳社大会係
宿題第二部（当日出句）
歳時記　奥田　白虎選
月　森中恵美子選
詭　浜野　奇童選
観光　両川　洋々選
鳥　住田　三鈷選
主催・松江番傘川柳社

★第196回川柳忌句会
日・9月23日（祝）正午
所・近鉄線永和駅・長栄寺
宿題
怨む　古川　一高選
箸　合田　稔選
樹　中田たつお選
グループ　中尾　飛鳥選
雲　西村　芳川選
会費五百円　各題2句
主催・番傘川柳本社

★第2回「天都山」誌上全国川柳大会
題・「声」読込可二句吐〆切・9月25日投句料700円
選者＝森中恵美子・高田寄生木他6名　投句先〒093網走市南七条東五丁目嶺岸方・網走川柳社

★第14回かもしか誌上全国川柳大会
課題「樹」三句　佐藤岳俊
石曽根民郎・住田三鈷他7名。投句料千円・〆切9月30日着便・投句先〒030青森市松森字佃二四〇―一〇
吉田州花方・かもしか川柳社松森編集室宛

★野口北羊句碑供養・むらさき会合同句会
日・10月13日（日）AM10時
所・岐阜市長良古津・古津苑・新岐阜駅より古津下車
宿題（各二句）
代筆　高瀬　恵子選
山道　塚原　定峰選
招く　青木　惜春選
気品　武藤　伶子選
秘密　氏田騒太郎選
うす味　浅野　滋子選
合掌　稲垣　正穂選
事前投句10月5日〆切
情け　野口　初枝選
主催・岐阜川柳社

★60年度文化祭川柳大会
日・11月3日（祭）AM11時
所・東京都港区赤坂四　赤坂公会堂
雑詠一句文化祭参加作品として（旧作可）
宿題第一部〆切　13時30分
希望　山本宍道郎選
前列　藤原時化緒選
狐　浅田扇啄坊選
リラックス　竹本瓢太郎選
深い　野中いち子選
拾う　堀口　北斗選
兄弟　佐藤　正敏選
特別課題　野村　圭佑選
席題三題　各3句吐
第二部（投句）9月30日締
未来　藤島　茶六選
後列　磯部　鈴波選
虎　和田遠矢太選
ストレス　関　水華選
浅い　荻原非茶子選
捨てる　鈴木　泉福選
姉妹　臼倉　寿夫選
各題3句・各題毎にハガキ大別紙のこと
投句料千円
投句先〒350川越市南台三丁目二―三八・堀口北斗方・

残暑お見舞い申します
サークル檸檬

文化祭川柳大会宛
主催・川柳人協会

★伊木篤生編著・評伝「川柳人・小田夢路」発刊
今年84歳の川柳作家であり漢詩人である著者の心魂を傾注した一書である。頒価千円・購読希望は郵便振替口座・広島〇―一二五七七「川柳ひろしま」迄

★59年度北海道川柳年度賞登別　加納愛山
柩打つ石のジョークは許せない・うしろから見ればさみしい鬼の面・傷つけた人さし指が眠られず・本当の拍手を妻子からもらう・羽根みんな切って自由に飛べと言う

▽同人消息とお便り△
■西宮市の静かな住宅街の一角に「川柳掲示板」があり、川柳の主は故若本真彦（多久志）さんの遺志をうけ継いだ息子さんの芳彦さんである。これまで350句が登場、この掲示板のファンである近くの主婦（47歳）は「軽くたしなめられたり、思わず笑ってしまう句があってとても楽しい」と好評生涯この灯は絶やしません と若本さんは語る。（8月8日読売新聞より）

■磐石の友情に支えられて私の「夫婦岩」句集は無事生み落とされました。銀婚と作句10年の節目のほかに長男の追悼句集とはあまりにも皮肉でした。500句の羅列、まさしく私の壮年期の咆哮でもあります。（和泉博人）

■59年度第23回全国鉄川柳人連盟年度賞第一席に両川洋々氏の作品〝楢山の旅費へ年金まだ足りぬ〟が選ばれた。おめでとう。

■堀江芳子氏（同人）の母堂若林ヨシエさん（89歳）逝去（8月3日）合掌。

残暑御見舞い申し上げます

川柳ねやがわ

会員一同

寝屋川市春日町9―9
川柳ねやがわ事務局
高田博泉

残暑御見舞い申し上げます

いずも川柳会　有志

出雲市松寄下町　尼緑之助方
隔月刊　いずも　価四〇〇円（〒共）

原　独仙　中川幸一
板垣夢酔　佐々木裕
板垣草丘　大屋秋峰
吉岡きみえ　藤田軒太楼
園山多賀子　久家代仕男
落合正江　小砂白汀
小西雄々　小玉満江
松本文子　小白金房子
堀江正朗　里本たかし
堀江芳子　竹治ちかし
石倉芙佐子　尼緑之助

本社八月句会

メンズファッションセンター（ＭＦＣ）
八月七日（水）午後六時

暦の上では立秋というのに連日、真夏日が続く。そのせいか空席がやや目立った。

今月のおはなしは橘高薫風氏。このほど藤沢桓夫氏と共著でカラーブックス「川柳にみる大阪」を出版したばかり、その苦労話をうかがう。８月号の編集後記に書かれているが出版社の、特に営業の売らんかな本位の低俗な要求に抵抗するのは大変な勇気であろうと察せられ、「飲んでほしやめても欲しい酒をつぎ」の句に最初につけられたイラストを参考にと回覧されたのを見て、その感を深くした。

今月の月間賞は荻田千代三氏が獲得。

呼名賞は、里小路、藤村〆女、田中隆二の三氏に贈られた。　（Ｓ）

（受付―年代・冬葉）
（記録―射月芳・山久・亜成）
（進行―柳宏子）

出席者―武庫坊・年代・寿美・薫風・笛生・太茂津・幸・〆女・紀雄・寿美子・一郎・眉水・春蘭・千代三・水客・勝美・重人・隆二・紫香・白渓子・月子・栞・史好・冬葉・千寿子・凡九郎・英壬子・登志代・礼子・小路・章久・悦郎・文秋・蕉露・柳宏子・規不風・美幸・山久・三男・萬的・三十四・敏・智子・美房・狸村・美代子・みつる・射月芳・久子・白兎・弘生・いわる・はつ絵・みつ子・頂留子・元紀・楓楽・英子・作二郎・与呂志・光代・一二三・鬼遊・雀踊子・岳人・亜成・寿子・柳伸

席題「坂」　辻白渓子選

九段坂総理は個人として参り　美代子
大阪の街で坂道つかれない　岳人
ガレージに外車が光る坂の街　重人
女坂そろそろ結婚など考える　冬葉
急坂が背にある安い分譲地　小路
むくげ咲く坂でいつもの人に逢う　礼子
気味の悪い話を聞いた坂の上　白兎
二人三脚よたよたと行く夫婦坂　英子
よいこともあったと坂を振り返る　智子
負け犬になる坂道の影法師　雀踊子
お別れのドラが消えない坂の町　柳伸
息永い妻に引かれる夫婦坂　柳宏子
姉さんと別れた坂の曼珠沙華　千代三
坂の街に住み出不精になってゆく　楓楽
古稀をまだしっかり登る男坂　文秋
病院の坂で真相聞かされる　年代
登りより下りがつらい老いの膝　勝美
坂道の老人ホームに入らない　英壬子
少年の明日に越せない坂はない　美幸
炎天の坂初孫を連れ帰省　小路
坂道にとっても弱い万歩計　英子
坂道を苦もなく登る七光り　いわる
主義一つ持って苛酷な坂登る　〆女
単身赴任五十の坂はきびし過ぎ　隆二
旧盆の故郷へ戻った墓地の坂　雀踊子
雨の坂登ると虹に会う峠　礼子
放浪記美子が出そう坂の町　一郎
予備校の坂で笑わぬ友ばかり　鬼遊
定期券と毎日越える坂がある　幸
寺の坂見上げる度にきつくなる　紫香
坂の灯が少し威張って点いている　水客
京みやげ売るちっぽけな坂の店　紫香
おこぼれの無い清水坂は閑古鳥　章久
坂で遇うのは魚を乗せた乳母車　作二郎
いろは坂の底に温泉見えかくれ　萬的
坂のぼり切ってピアノの音に出会う　水客
異人墓地坂にラーメン屋が点る　作二郎
港から坂道となる島の人　笛生
前餅を焼く店がある坂の道　弘生
いつ来ても何か咲いている坂の家　紫香
配達のバイト嫌がる坂に住む　白渓子

席題「ライター」　久保田元紀選

待ち惚けライターまでがぎこちない　悦郎

ライターが一番ほしい形見分け　柳伸
ライターを拾ってあげただけのこと　みつ子
ポロシャツを着てライターの入れどころ　智子
ライターも恋の炎はつけられぬ　みつ子
ライターが又増えていたポケットに　月子
スナックのライターの火は高くつき　隆二
ライターから火のついている犯人像　寿美子
ライターが転がっていた禁煙車　小路
ライターの炎で過去が消せますか　冬葉
打明けるチャンスつかんでいるライター　〆女
ライターがなかなか点かぬ迷い道　亜成
ライターを器用につけた赤い爪　柳宏子
結論が出ぬままライターもてあそぶ　敏
禁煙を決めてダンヒル捨てました　一郎
火遊びが好きでライター手放せぬ　礼子
ピース喫う父はライター持たぬ主義　眉水
ライターを借りたい人が居た始発　小路
港の花火見てライターを借りられる　作二郎
百円ライターより軽い命が今日も消え　寿美
子供みたいな女がライター持っている　重人
又逢いたくてライターそっと忘れとく　太茂津
ライターもつかない程に怒ってる　紫香
ライターは嫌いマッチの火がぬくい　みつ子
ライターの炎見つめて待ってます　光代
ライターで恐ろしいこと考える　三十四
百円ライター噴水でまた待たされる　作二郎
ダンヒルの似合う男を信じるか　楓楽
ライターをすて禁煙を確める　鬼遊
百円のライターと僕をくらべよう　凡九郎
病院の隅ライターを鳴らすのみ　作二郎
近づいてくるライターそれからの仲　亜成
ライターでヤケドするほど馬鹿だった　眉水
ライターを借りた小さな恩がある　雀踊子
火のつかぬライターだから持っている　礼子
ライターが一度でつかぬ軽い鬱　元紀

兼題「指」　玉置重人選

本当の返事は指輪くれてから　妻子
幸せは軍手に添うた指の数　秋峰
小便小僧の指もしぶきで光ってる　滋雀
指に宝石女は過去を語らない　千寿子
鶴折った指では押さぬ核ボタン　英子
良心に恥じぬ指だと軍手知る　千寿子
よその子が泣いて指切り思い出し　小路
ふと触れた指にはじまる第二章　美幸
精一杯話をしてる手話の指　隆二
合図する指に抜け出す踊りの輪　柳伸
それぞれのいいぶんがある指の先　山久
春近し妻と娘が指を折る　白兎
妻も子ももう止まらない父の指　鬼遊
仏様指切りさせて下さいな　岳人
十指皆ぬくい情の母の指　雀踊子
夫々の分心得て居る十指　寿美
情熱を掬う十指に明日がある　寿子
貧しさを一番知ってる母の指　笛生
指紋押捺押さない指がよくしゃべる　眉水
ど偏屈乍ら器用な指を持ち　萬的
戦争を嫌った亡母の指人形　柳伸
不器用な指へ真心添えて編む　光代
指切りの温みを知った鬼の面　冬葉
山田邦子も五本の指のなかへ入れ　水客
引き金に指を当ててる妻と住み　千代三
雲行きに北浜の指せわしない　小路
命令の通りに動く指を持つ　規不風
指をポキポキ鳴らして今日も働くぞ　敏
指折って見れば島にもある戦後　作二郎
他人をさす指から先にたそがれる　はつ絵
どの子にも手抜きはしない母の指　月子
十指揃った恩を忘れていませんか　楓楽
花火師の小指が欠けているキャリア　千代三
優しい指で幾つたたんだ騙し舟　英子
良い指と添って大事にしています　久子

真っ直ぐな指です貧乏しています　美代子
燈籠流しの指に蛍がつきまとう　作二郎
天を指す指は汚れのないように　礼子
雑巾をしぼる手指がやせてくる　悦郎
ピアノ弾く指で枝豆食べている　礼子
すばらしい産声指が揃ってた　重人

兼題「無駄」　川口弘生選

本人としては褒章無駄でない　幸一
療養のベッドを無駄にせぬ再起　どんなく
地球自転無駄骨のように見え　妻子
無駄口の中から本音がこぼれかけ　滋雀
素うどんがすっかりのびた無駄話　狸村
無駄使いするなと出来る程呉れず　白渓子
無駄口を言うのにオシッコまだ言わぬ　英子
無駄やとは言うまい足袋の四つこはぜ　章久
無駄口を決して言わぬ父の靴　岳人
無駄積んで心の温み確かめる　武庫坊
無駄でした男と女の旅かばん　岳人
無駄だとは思う注射をまた頼む　紫香
無駄働きばかりで母は愛される　規不風
道楽も無駄でなかった芸の幅　〆女
無駄でよかった消火器を買替える　重人
總理殿無駄な軍備はやめなはれ　敏
無駄足を踏んだと思う罐ビール　紫香
暗算の出来る程度の無駄を買う　美代子
無駄ばかりしてた割には貯めている　月子
負けん気を出しては無駄な汗をかき　登志代
無駄以外僕に何が出来るんか　凡九郎
底見えてそれから無駄に気付きだす　智子
雨の午後受話機と遊んでいる女　月子
無駄骨かも知れぬが長い目で見よう　雀踊子
流れ星男の無駄を知っている　岳人
無駄のない話ばかりで肩がこり　月子
無駄なこと考えてます雨の午後　みつ子
無駄購うて溜めてるわけでない書棚　太茂津
無駄話重ねてすんなりまとめあげ　武庫坊
無駄話でやんわり誘う花言葉　悦郎
無駄骨もいつか生きる日もあろう　凡九郎
無駄金を使うてしまう宿浴衣　笛生
無駄めしも食うたがやっと役に立ち　柳宏子
プラスにはならない無駄も組んである　笛生
死を無駄に出来ぬ故人の意志を継ぐ　文秋
原爆忌無駄に死んだと思わない　作二郎
蟬しぐれ命は無駄にせぬ事だ　いわゑ
無駄買うてストレス捨てる街に出る　光代
あきないの上手な母の無駄ばなし　年代
無駄できぬ暮しだけれど花は買う　楓楽
無駄の無い動きのロボット顔がない　狸村
千羽鶴一羽も無駄な鶴がない　幸
無駄とみたこの捨て石に生かされる　紀雄
明日信じ耕す土に無駄はない　春蘭
傍目には無駄骨に見え石を積む　弘生

兼題「崩す」　金井文秋選

一疋の蚊に瞑想を崩される　耕花
相好を崩して孫に囲まれる　どんなく
少年の夢が崩れたユーターン　幸一

第32回八尾市文化祭
市民川柳大会

とき　**昭和60年10月10日**（祝）正午開場
ところ　八尾市商工会議所3階大ホール
近鉄大阪線八尾駅下車南300m
八尾市役所向い側
会費　一、〇〇〇円（呈作品集・鉢植花）
お話　田中　好啓氏
題と選者　（席題）　山本　翠公選
「軽い」　土田　欣之選
「薬」　河内　天笑選
「人形」　卜部　晴美選
「橋」　亀山　恭太選
「泡」　中尾　藻介選
「知恵」　西尾　栞選
各題2句・締切午後1時半
◇投句だけの方は〒581（八尾局私書箱第9号）八尾市清水町1丁目1－6八尾市立公民館川柳係へ。9月30日締切。作品集代郵券500円同封。
懇親会　三、〇〇〇円（当日受付）
主催　八尾市
八尾市教育委員会
八尾市立公民館
後援　八尾菜の花句会

なし崩しに返す話に負けてくる　滋雀
一角を崩して城を落す蟻　規不風
身だしなみ崩さぬ人で菊が好き　楓楽
芯のある子供に積木崩される　春蘭
ほどほどに崩れ妖しい美しさ　千代三
今ここで顔を崩せばたかられる　久子
収賄が象牙の塔の夢崩す　蕉露
だんまり桶に妻の砦は崩れない　楓楽
エリートの積木崩しにくる女　月子
ヒロシマの川に戦後が崩せない　作二郎
国襞が消えて崩れていく積木　
膝くずし甘えてみたいのも女　
下手な字を我流に崩すから読めぬ　
積乱雲すぐに崩れる性を持つ　
友情の崩れた音を聞く落ち目　
計算があって女は膝崩す　
ちょぼちょぼのレベルで友情崩れない　
老兵の姿勢崩さぬ反戦歌　
膝くずしそれから宴が盛り上がる　
古寺の崩れる土塀にある歴史　
音たてて崩れた恋もあった過去　
山崩す土建屋さんの生きる道　
土砂崩れ又責任をなすり合う　
ひと言が愛の絆を崩れさす　
思わくを秘めてる膝は崩さない　
体調を崩す酒とは知りながら　
崩れてもあきらめないで積木積む　
開発への警告となる土砂崩れ　
崩せない一線がある父の眉　

付き合いのよさが崩した夫婦仲　小路
一流になって崩れてゆく絆　登志代
化粧崩してから女よう笑う　亜成
飽食の街に崩れていく倫理　美幸
汗の無い富は二代で崩れだす　紀雄
人の好さ見せいっぱいに顔崩す　紫香
積木くずし気楽に読んで子を持たず　一二三
崩しなら払えるだろうと言う甘え　文秋

兼題「浪曲」　野村 太茂津 選

浪曲の枠から一生はみ出せぬ　滋雀
湯加減がいいらし父の浪花節　秋峰
浪曲の様なのも居る蟬時雨　耕花
浪曲も裸も好きな亡父でした　礼子
浪曲へ老母と一緒に泣いてます　月子
浪曲の判る男なら娘を遣ろう　規不風
浪曲の烈婦貞女に泣かされる　寿美
浪曲の好きな男と飲んでいる　作二郎
人間にめぐりあえたよ浪曲よ　凡九郎
義理人情浪曲だけに生きている　三男
海鳴りの宿奈良丸が聞こえそう　作二郎
文士劇浪曲うまいのがひとり　三十四
浪曲がはねてしっぽく喰いにゆく　三男
浪曲のわかる鬼なら道づれに　幸
浪曲のさわりを一つかくし芸　文秋
我が家ではまだ浪曲が生きている　冬葉
浪曲は飯より好きで父達者　栞
浪曲のようなヤクザが消えている　柳宏子
子守歌だった亡父のなにわ節　年代

浪曲のチャンネル権はおばあちゃん　三男
ステテコと団扇で虎造ぶしの父　千代三
浪曲の好きな先生の人間味　勝美
浪花節に似た過去女将は酒が好き　萬的
旅に出る男の胸の浪花節　礼子
浪曲の生涯だった父の過去　美幸
浪曲に義理人情があって好き　一郎
人生の側面にある浪花節　いわる
奈良丸眠る大和下市草いきれ　眉水
浪曲と三味の音が合う聞かせどこ　登志代
浪曲の解るおやじで辞められず　小路
佐度情話たっぷり聴かす露天風呂　英子
浪花節的だといつも笑われる　智子
まくらだけ聴かす夫の佐度情話　寿美
浪曲一代人情に生き義理に生き　一二三
パソコンをやりつつ浪花節うたう　千寿子
浪曲を地でゆく父も足細る　はつ絵
なにわ節似合うやくざが減ってきた　楓楽
浪曲好き古い男と云われても　文秋
浪曲と熱湯が好きで好々爺　美代子
浪曲の義理人情と歩を合わす　幸
浪曲へゲートボールの連れがある　白渓子
浪曲の一節亡父が会いに来る　武庫坊
西成の雨浪曲と昼の酒　雀踊子
銭湯で入墨褪せた浪花節　千代三
島を出たときから浪曲語らない　太茂津

（清記・楓楽）

締切毎月末。必ず原稿用紙使用のこと。
作品は雅号も含めて20字まで。

担当・清水健司

富柳会

藤田　泰子報

錯覚も誤解もこえた同棲中　今日子
チャンスなど何もなかった俄雨　美房
俄雨待つ立読と知る店主　富久一
赤い傘おっさん差してる俄雨　荘次
俄雨迎えに来てるよその妻　文次
俄雨降ればあの日のバラが咲く　森子
俄雨約束の女まだこない　花楠
火遊びに賭ける女と赤い屋根　美代
ほんとうはクールでなかった油蟬　千代女
お互いの夢を食べてた一部屋きり　美緒
肘鉄へクールな顔でまた口説き　柳太
傘のない美女が通らぬ俄雨　弘生
俄雨招く暖簾の前で降る　章久
味噌汁がとっても好きな僕の妻　山久
同棲へ運んでゆくのは女かも　喜代
子供より愛に生きます同棲中　ミソエ
同棲に夢まだ淡きシクラメン　優
良心と同棲したがる鬼がいる　泰子

東大阪川柳同好会

斉藤三十四報

メモ通り詰めてる父の市場籠　三十四
国策に副い船来品買う時勢　右近
人柄を買うてまかせた店が伸び　公一
欲しい物買うた満足顔に出る　綾珠
記念切手買うてささやか気のゆとり　勝美
将来性買った許すと父乗り気　良京
買う金が惜しう無いのが酒煙草　章久
説明は便利と言うから買うてみる　悦郎
月給日買物籠のリズミカル　喜風
商才は買われ人柄には惚れず　弘生
買うてみりゃただ邪魔なだけ健康具　美子
勲章をゼニで買った紳士録　雀踊子
夢を買うそんな魅力に騙される　柳宏子
値切るだけ値切って傘を忘れて来　慶三
交際の範囲を金の高で決め　雅風
バラ色の二人は交際しています　頂留子
このままでいいのとポツリ西芳寺　律子
それぞれの交際を言う共稼ぎ　滋啓
文通という交際が重くなる　湖風
請求書少し冷たい彩で来る　柳影

井上柳五郎報

辞表書く思いで出向妥協する　博友
百年の歴史がゆらぐ出向か　玉水
定数の判決受けて沈む人　幸好
言うことを聞く総裁に座を与え　柳五郎
グループで唄えば音痴ついてゆき　紫峰
グループのお里が知れる旅の恥　吟平
欠点をそれぞれ持って仲間です　美智子
グループが寄ればグラス燃えてくる　恒洋
グループのひとり白旗振りたがる　健一
ぬくい瞳に不良グループ飢えている　草風
底力ないのに野党見栄をはる　敏昭
看病疲れをかくした母の底力　進
子のために誓った寡婦の底力　佐加恵
底力おかめの面の下で燃え　照路
突然に見せる自然の底力　進平
生きざまにこれだと選ぶ鍵はない　たけ志
その鍵を放すと私の負けとなる　桃風
口止めの鍵をうっかりかけ忘れ　哲郎
鍵握る妻に揉み手する男　青銅

打吹川柳会

奥谷弘朗報

頂上に立って空気を思い切り　志つ子
場違いな空気を肌でじかに知る　美智子
幸せは空気のような妻がいる　高代
美女一人入り職場がなごんで来　節子
国連の空気五つの色をもつ　弘生
スモッグを吸って中流増えつづけ　宗光
徒ならぬ空気へ猫も膝へ来ず　佳女
言い過ぎていやな空気を漂わせ　亮二
故郷のうまい空気にUターン　文子
窓ぎわで部屋の空気が気にそまぬ　康子
張りつめた空気がゆるむ孫の声　孝美
空気枕しぼませ母の旅終る　紫映
病院で注射の痛い空気漏れ　寿満湖
直感で悟るその場の空気から　英治
ぽっくりと逝けず空気が切れとぎれ　みをき
命綱海女は空気を恋しがり　舎人
近寄れぬ空気漂う名人戦　次男
人事異動社内の空気動きだし　道子
大会の空気紅一点が変え　弘朗

にた川柳会

西村早苗報

意地悪な針の穴ですそっぽ向く　きみえ
友釣りの鮎に無情な糸がつく　幸一

脇役のレモンが味を引き立たせ　〆女
寝そべった縁で西日に起こされる　夢酔
冷や奴つつき夫婦は子の噂　裕
分別くさい蛙ふんづけられている　景子
三つ指をつかせる部屋に落とす金　雄々
女房が知恵者に見える時もある　弘朗
待たされる楽しさもある花時計　雀踊子
味付けのよさへコックの噂など　孝華
やさしさの仮面を脱いでも同じ顔　寿美子
背負い切れぬ悪名だから現われる　宗光
筆買いに只寿と書くだけに　紫吻
紫陽花の移り気五月の雨を恋う　多賀子
しめなわで囲みここから神の国　花子
新築へ貧乏人は直ぐ値踏み　独仙
同名の豊田災難とばっちり　弘幸
梅十が二つ入ってた二日酔い　雪代
ホステスも田舎ちまきにふれて飲む　早苗

城北川柳会　神夏磯道子報

式場のざわめき招かぬ金バッジ　覚然坊
委された予算があまる貧乏性　弘生
豊饒の時が流れる午前二時　新一郎
朝顔に瞳とられて刻が過ぎ　炉斉
突然に真実あかされ胸さわぎ　寿美礼
花嫁の父は無口な式の朝　カネ
漬け梅は祖母の教えを順送り　八重
式服の黒を着るのはもう御免　芙久枝
入社式社長になる夢抱いて居る　ふみ
突然の出会い握手の温い事　山久
泣きべそで迎え終った入園式　佐津乃
虫干しに秘蔵の版画色褪せる　仙吉郎
夾竹桃涅槃の風を聴いて居る　静歩

一式を揃えて他家の人となる　道子
突然に音痴が歌い出す宴　右近
億のつく結婚式のニュース見る　星斗
キャバレーの蛍狩りとは知らなんだ　満津子
披露宴の席で芽生えた恋一つ　麻黄
海岸のテトラポットは肩を組み　綾珠
ゴールドも突然紙に化けました　晃世
人生の大切なけじめに式を挙げ　悦子
上棟式無事終え頭梁嬉しそう　正之
堅物に略式の二字邪魔になり　頼一
突然に走る男にある野心　笑風
登山歴山は何かをくれました　登志代
感涙にかすむ日の丸金メダル　久留美
並んでる喪服に百合が白すぎる　ただし
ベランダでふとお隣の猫の鈴　圭介
阪神が負けたと子供早寝する　茂一郎
未来へと心飛んでる卒業式　喜代子
人間の目では覗かぬカメラマン　倫子
式までは清い体と言い聞かせ　午郎
突然の別れになった空の事故　達子
娘の挙式迫り無口な父になる　公一
四畳半どう置き換えても四畳半　はる子
万歩計いただく齢になりました　温子
スランプに四季の変りが早すぎる　悟郎
小さき小さき去来の墓に言葉なし　静子
梅漬けて女の肩が軽くなる　テルミ

豊中もくせい川柳会　田中正坊報

ひっそりと花をつくって生きている　満女
ひっそりと子ら企んだ喜寿の宴　隆
ひっそりと二人でかなでるセレナーデ　明吉
ひっそりと淋しいけれど生きてます　千恵子

ひっそりと社長が消えた曲り角　寿美子
さざ波にプールの腕前笑われる　富子
渦潮の波のワルツを見ましたか　きく子
波にのる男の背なは広く見え　廣子
まだ登り坂よと妻があとを押す　福一
富士山に登った夢は話さない　博史
頂上へ登れば写真屋待ち伏せる　花村
頂上に一度も立たず山が好き　よし子
ちょっとだけ登ると海が見える丘　紫香
心利く車掌いました老いの旅　春子
部下のミスハンコ一つでツケが来る　明
得ですね稚気愛されて赦される　登志実
とり入れておいてよかった俄雨　賀代
たっぷりと遊んだ孫のいい寝顔　正坊
鉢ばやし風の辻には綿菓子屋　作二郎

京都塔の会　松川杜的報

投げられた石をおろそかにはしない　年代
一晩の会話へ絆たしかめる　芳子
留守番の亡夫へきがねの家を明け　花代子
本尊は国宝信仰は脇仏　求芽
あれもこれもと余生に賭ける夢　杜的
料理本積んで今夜は冷やっこ　武庫坊
剝製の鷹が見ている白い山　和友
一人の時はかぶりつきたいメロンです　葉子
お見舞のメロン食べずに逝った亡夫　明代
出し合うてお見舞メロンを一つ提げ　白渓子
うまが合うスルメ千切って二人酒　眉水
雲一つ千切れて富士の上に乗る　紫香
露ほどのいのち燃やして蛍の灯　栄
露草の花で奇麗にふくさ染め　冬子
救助隊まだ来ず草の露で耐え　飛鳥

よう西瓜冷えまっせと畑の露　花村
笹の露鮎が生きている姿　〆女
露消えた頃に梯子と庭師来る　鼓城
妥協してコップの露を手で拭う　水客

うみなり川柳会　小林由多香報

うやむやに事をすませば敵があり　芳泉
患者には医者うやむやで締め括る　由多香
うやむやにされて真実芽を伸ばす　草人
中立のうやむや白い眼がとがめ　宣子
ズームアップ美人役者の皺が泣く　舟宏
深い皺一つひとつにドラマ秘め　熊生
子育てのしわ倖せが描いてある　貞山
湯上がりの妻を見直す薄化粧　雄人
憎しみのあとかたもない薄い胸　行子
陰に咲く花はばんやり薄い色　華子
薄情な亡夫です仏間の一人ごと　正
次々に子を巣立たせてボケて来る　良枝
巣造りの鳥に負けまい毛糸編む　笑王
愛の巣を二人で築く今日からは　雅女
子の巣立ち部屋に温みを置いたまま　豊生
巣を張って心静かに牙を研ぐ　葉士人
蜂の子は六角形に丸く住み　よし子
沿線の朝は列車の音で明け　一止
三点を結んだ線がややこしい　静生
一直線香車は戻るすべ知らぬ　洋々
直線へ踏み絵いくつも埋めてある

川柳ささやま　脇田　米朝報

青写真迷うて楽しい夢にする　百合子
岐路何度迷うてばかり人生路　静子
迷いから覚めたあしたに陽が登る　素水
迷いぐせのついたスカート替えて出る　文平
切る毎に迷い込みたる花鋏　法斉
隙のない女を迷わす四季の唄　とみ子
抜け道のある法律の恐いこと　ひか平
少し法にふれねば金が溜まらない　可住
法律はどうでも今夜は二人だけ　くにの
よい声とほめたらマイク離さない　大槻
カラオケの騒音壁を苦笑する　靖子
まな板の愚痴カラオケが消している　ゆう也
大島の本場で女の見栄が舞う　和子
百日を本場に賭ける灘の酒　房子
偽物が本場の顔で店へ出る　千代子
全国の本場が梅田の地下に在る　米朝
プログラム本場の喉でしめくくり　可住

三幸川柳教室　桜井　千秀報

飽食の孫に駅弁喜ばれ　愛子
駅弁の箸を休めて富士あおぐ　みね
アリバイの様に駅弁買って来る　文子
駅弁を売る人買う人ベルが急く　美子
無事でいて駅弁膝に乗せたまま　ふく代
歯車の合わぬ夫と梅雨ごもり　三千子
雨音に生きるつもりの冬着縫う　静
梅雨晴れに出ようとすれば孫が来る　千香子
空梅雨も長雨もあり夫婦坂　孝子
中継で梅雨明けを知る平和台　智水庵
相談をしようと見れば夢半ば　かなめ
業たれた人だが寝顔で罪を消し　つゆ子
シルバーシート寝顔に狸と書いてあり　由梨
この寝顔あの形相と重ならず　忠昭
寝顔さえ泣いていそうな四面楚歌　千秀
一匹のゴキブリに湧く家の中　当代
嫁きおくれ一山いくらの口になり　重次
一線を引かねば溺れそうな愛　靖子
人情味一流校では学べない　桂香
解雇だが「一身上」との情けあり　隆行

倉吉川柳会　渡辺　菩句報

手術日を迎え休毛みなそられ　とめ子
新人の背なに期待の目が熱い　しづ江
新人が美人で風が落ち付かぬ　松女
ペンネームたった一度で覚えられ　寿満湖
天皇を迎え両国意気あがり　碧水
ペンネーム俺によく似た木偶の坊　民夫
電柱も四季それぞれの風を知る　康子
新人も栄枯の夢がつきまとい　寿朗
初投句照れているよなペンネーム　幸苑
電柱も抜かれて過疎の名さえ消え　柳風
闇を斬る男ふたつのペンネーム　宗光
新人の素直が日々に消えてゆく　秋人
ペンネームだから名前が見当たらぬ　かつみ
新人の挑戦状は受けて立つ　雄々
プログラムには敗者復活戦はない　観洋
ペンネーム逢いたい人がひとりいる　文子
ペンネーム三途の川で書きかえる　みなと
亡母の忌を迎える準備ふとん干す　ゆり子
かりそめの名でほんとうの私書く　明
好き勝手言える気がするペンネーム　次男
出迎えの中にわたしの傘が無い　完司
電柱に登れば明日が見えてくる　やえ
太陽は大日如来のペンネーム　石花菜
電柱にのぼると天が近くなる　秋女
ペンネームそれはわたしの代名詞　菩句
電柱に花が咲いたと夫が鳴く　御前
プログラム終りは浄土へ行く支度　独歩

聴障川柳　稲田豊作報

罪の手を洗うてくれる母の川　鼓草
褒め上手母ちゃんに似てと褒め　みつる
新幹線一度も乗らず逝った母　たみ
泣きながら母に詫び言う我なりき　春一
孫の守り息子の嫁を母と呼ぶ　一晄
たらちねの母の匂いの懐かしく　鉄火
寝たままで四年母さん春が来た　ギ一
苦労した子育て母の皺となり　峰生
母の日に父は張り切り酒を飲む　八恵子
母の日に女上位を父許す　珍顔
爪の紅タクアン匂う二児の母　和江
巣立ちゆく子に子離れの出来ぬ母　文古
母ちゃんが在ればと思う参観日　承平
遠き日のろ山で受けた母危篤　耕村
思い出は亡母をマリヤに描き替える　豊作

川柳化粧櫓　植村客遊子報

逢った夜に酒のせいでは無いほてり　大鷹
割箸の匂いで京の膳につき　実男
プライバシー犯されそうなアンケート　岳詩
日雇の女タバコを喫うて去に　葉香
男一匹地下足袋を恥とせず　紅月
ばれるまで仮名でサインするボトル　礎石
腹の虫一匹だけがおさまらず　悲子
負け犬にならぬ覚悟で二度の職　柏秋
後進に譲ったはずがもの淋し　秋信
忙しい職で若さを取り戻し　越山
小六が赤福餅を買うてくる　みつこ
ストレスが溜ると亡夫が恋しくて　サワ子
来る舌の人を待ってるもどかしさ　みね子
立場替えて見れば外れる色眼鏡　輝月
雨に着る一寸気がさす派手な服　とし
手作りの豌豆採ってる古稀楽し　永楽
書道展孫の名前へ立ちつづけ　孝栄
魚取り尻を並べて土手で見る　詩風
似顔絵は母の癖描く五歳の娘　和子
故郷は姫路やさしい女が住む　客遊子

Y・F・C柳壇　人見翠記報

梅雨寒の電話の声を案じられ　翠記
腹鼓うってニッコリ父達者　房子
パラソルに逢うた余韻をたたみこみ　たず子
腹膨れ青雲の志も弛みだし　忍
腹立てて叱ったあとの寝顔見る　泰州
相槌をうちつつ肚で笑ってる　よし津
壺坂や花の香りで観世音　節子
絵日記にせがまれて行く海山へ　絹子
回復へお腹の傷を見せてくれ　紅葉

ハワイ川柳ウイロー社　市岡暁舟報

初恋を覚え懐し夏休み　公女
夏休み母の苦労が一つ殖え　拝山
夏休み木の根枕に大欠伸　蒼生
夏休みあれもこれもと夢多し　張賀
夏休みハワイ土産の日焼け肌　虹宵
夏休み日本で過ごす果報者　秀山
夏休み来たが返事せぬ口入れ屋　紅渓
夏休み楽しい今宵の盆踊り　陽子女
波頭子等と戯る夏休み　香夢女
名を呼べば一度に潜る夏休み　一牛
夏休み落ち付き見せる貸浴衣　利子女
夏休み夾竹桃へ暑い風　暁舟

川柳泉尾　吉川寿美報

老化などしていませんと物忘れ　シマ子
温室の外で名もない花が咲き　道子
七色のあじさいを見てもの想い　三世
ゆびぬきを母の指輪と思てた子　三千代
はずしても指輪は浮気知っており　白水
指輪から月を曇らす貫一さん　淑子
糠味噌の中で指輪が窒息し　伴子
フルムーン古い指輪も連れていく　弘子
古都の涼庶民に遠い床開き　シメ子
六月の天気ミミズも騙される　昭子
お人好し目じりが少しさがってる　葉子
言訳の出来ぬ涙が目にあふれ　シマ子
言訳が後めたくて目をそらし　文子
子供の目素直さ溢れる宝石だ　多和子
酔うた目でうちのおばはん日本一　敏

佳句地10選（前月号から）　井上喜酔選

一人ぐらしせめて余白の白いシャツ　操子
街路樹も老いも日永をもてあます　鬼遊
雑草の中に本音が生きている　田鶴子
上役に見せたい汗が乾きだす　福一
円満な秘訣を夫婦笑うのみ　夢酔
足の爪切る湯上りの隙だらけ　牧郎
梅干し一つ今日一日へ活を入れ　貢範
石仏雨は肩から濡れてくる　作二郎
匿名の善意素直に受けておく　英子
幸せはリズム変らぬ昨日今日　重人

目を入れて勝利宣言高々と　恭子
人生双六また振り出しを踏んでいる　美代子
ここで目をそらせば私の負けになる　寿美

西宮北口川柳会　奥田みつ子報

またしてもあるまじきこと墓穴掘る　年代
アメリカへ国技が光る大相撲　千世子
原因はわたしと聞いて絶句する　はつ絵
八百屋ひまメロンの位置を変えている　杜的
野苺の穴場を知っている私　百合子
ハレー彗星宇宙の穴から出るごとく　和友
手話同士決して友を裏切らず　白渓子
聴診器も一度齢を聞き直す　かすみ
単身赴任ボタンの穴のかけ違い　紀雄
勉強部屋夜中に光洩れている　保蔵
聞きこみにかわいいお巡りさんがくる　幽香
お見舞いがびっくりしてる顔のつや　散歩
破られた頁が憎い日記帳　伊三郎
光るもの似合わぬ指でくわを持つ　静子
濡れつばめ気弱な男をやり過ごす　礼子
コロンボが目を光らせた勘が冴え　冬子
びしょ濡れになって帰った蛙取り　しげお
濡れる子へ傘さしかける友なさけ　春蘭
お粗末な幕切れになる影法師　園歩
赤い灯へ二度目のひげを剃って出る　正一
穴あけて頭の中を見たい人　みつ子
西陽差す路地に夕顔咲いて呉れ　廉
父の目に光るものあり嫁ぐ朝　一郎
別離まで二人の鍋を光らせる　よし津
どの顔も大穴ねらう競馬場　きよ子
笹ゆれて母娘でさがす天の川　〆女
びっくりした後に本音の顔がある　武庫坊

マンションの壁は人情知らぬ顔　照子
霧雨に濡れて信濃路ひとり旅　(伊)春子
根性で舞う栄光の紙吹雪　笑女
芝のめに隠してあった落とし穴　柳影
ロボットが人間様を指図する　東洋男
またたいたあの星きっと亡母だろう　いわゑ
猜疑心ある日の茶碗手に重し　光代
深海魚光がほしい恋をする　鼓城
追伸が本文よりも名文句　良征
カラフルに花活けてみる梅雨最中　志津
隧道を出るとギラギラ夏の海　眉水
織姫が天気予報をきいている　(山)君子
七夕に何にも書かぬ老夫婦　寿馬
おとし穴きれいな雪を乗せておく　てる
解く時を思い結び目ゆるくする　千秀
頂点に立てばまってる落とし穴　山久
つつかれた穴から覗く札の束　歌子
穴馬券買うのはいつも妻の方　佳秋
潮が来るまでは自分の穴に居る　弘生
人知れず区切りをつけた誕生日　求芽
包丁研ぐ夫に献立考える　舟二
過去をいわない女の喉に疵があり　水声
雑草の強さを真似る卑怯者　(結)君子
猫嫌いとなりの猫とうまが合い　(栗)春子
喝采の真ん中に居る馬の脚　米朝
耳たぶへ穴ン万円のイヤリング　明代
此の方が割安ですと見くびられ　靖子
紫陽花が濡れると動くかたつむり　紫香

川柳大阪　井上喜酔報

マイホーム夢は遠くへ行くばかり　しげお
ポケットに夢が当らぬ宝くじ　天平

子の夢は育ててやろう軍手干す　重人
うっかりと妻には話せぬ夢を見た　鉄心
親の夢幼い子には重すぎる　三十四
少年の夢はエースになるつもり　与呂志
予選前草引きしてる野球場　みつる
スカウトの目が熱くなる予選場　比呂志
全員が苦労重ねてきた予選　希久志
地区予選汗で手にした甲子園　酔玉
予選しか応援できないチームです　虎酔吟
貧乏ゆすりがひどくなる予選　笑風
ミス日本探す予選の紙一重　喜酔
寄付帳へ義理の一口乗ってやる　雅巣
ホヤホヤの免許へ保険聞いて乗り　一介
乗る前に解らぬものかハイジャック　一歩
風見鶏のるかそるかの舶来品　柳好
乗りやすいタイプでいつも損ばかり　金太
乗車券見せずに乗る客にらみつけ　辰男
いつの日か必ず一度乗る車　本蔭棒
よめはんの手の平に乗る凡夫です　敏司
乗るまでは切符はあったとよっぱらい　行吉

川柳ひらい　照路報

急ぐことないさ片道切符だよ　愛子
離れても背で聞いてる母の鈴　ともゑ
女の夢は色も香りも嘘もある　愛
ぜい肉をポンと叩いて大あぐら　孝子
指輪抜く罪の重さに花を活け　幸江
車間距離ほどの間をおく嫁姑　裕子
まあまあと糸口切れて注ぐビール　せつ子
夢の橋離れ小島をひとまたぎ　年子
輪の中にへのへのもへの父の顔　トモ子
釣りマニア離れ小島で夢と消え　辰路

開発に輪をかけ地価がはね上る　良一
ライターが禁煙の決意にぶらせる　方巳
玉の汗男の顔に明日がある　博
モンローの腰が輪を書く春の風　敏和
むっつりと一人留守番煙草の輪　美代志
平和共存核廃絶の輪を拡げ　真佐緒
一輪車腰をくねくねあぜ道を　アヒル
飽食と飢餓の社会を考える　かずを
入院は吾が金言を押しつぶし　柏峯
凄まじく泣ける女の空涙　典子
踊る輪へ老いも手をふり足をふり　寿子
距離おいてあらぬ噂の中でたえ　千恵子
錆びついて離れぬままに老いてゆき　志津子
糸口は家内の助言でほぐれて来　栄翁
あじさいの青さにとけているピエロ　胤親
輪の中の目立ちたがり屋が翔びたがり　柳五郎
糸口を見付けて母の手はやさし　博友
水鏡恋の破紋の輪をひろげ　青銅
化粧などいらぬおかめの白い肌　草風
かごめかごめ泣き虫さんが僕の妻　真備雄
親離れつらき時見る西の空　照路

川柳しんぐう　川上　渓水報

緊急動議落し穴には気付かない　三千代
緊急動議煙草を消して聞く　紫香
緊急を待たす電話のオルゴール　喜酔
緊急へ十円玉の有難さ　登志代
はっきりした返事が戻る母の耳　雀踊子
蛸焼きの蛸がはっきり減っている　静歩
ひまわりの意志はっきりと陽に向う　正子
はっきりと言えたら胃など痛まない　富子
はっきりと物言う孫が恐くなる　司

昭和60年度唐津市民文化祭
「川柳塔」唐津支部結成3周年

記念川柳大会

日時　**昭和60年10月13日**(日)　10時開場　11時半開会
会場　庫津市文化会館3階大会議室
唐津市西城内　電話　2―8278
柳話　西尾　栞
兼題　城下町　浜本　義美選
遠征　岩本雀踊子選
いたずら　真島　清弘選
舌　酒谷　愛郷選
柱　高杉　鬼遊選
熟れる　大坂　彤水選
茶碗　橘高　薫風選
喜寿　黒川　紫香選
各題2句・事前投句
会費　投句料一、〇〇〇円(郵券可)
当日分一、〇〇〇円(昼食・大会誌呈)
◇投句は**9月20日**まで左記へ
〒847　唐津市栄町二五七〇―四
「川柳塔」唐津支部　久保正敏

唐津観光の旅ご案内

〈日程〉
10月12日(土)　新大阪発ひかり一号10・10→博多経由筑肥線唐津着15・17。唐津焼窯元見学→「洋々閣」泊。
10月13日(日)　文化財「曳山」見学10・00→川柳大会・観迎懇親会→「洋々閣」泊。
10月14日(月)　観光(マイクロバス)9・00→虹の松原～鏡山～七ツ釜～呼子～名護屋城趾～昼食・海中レストラン「萬坊」博多発ひかり28号15・45→新大阪着19・06

〈費用〉　五万円。

■ご希望の方は9月15日までに川柳塔社高杉鬼遊苑お申込み下さい。

川柳塔社
川柳塔唐津支部

緊急の判こへ熱い呼吸をかけ　十　郎
宿題に眠り薬が塗ってある　花　泉
理科の宿題メダカの澄んだ川が無い　千寿子
宿題が家で待ってるかごめの輪　豊　太
恋の宿題見事に解いて高島田　勇　太
遊ぶのが宿題だったらいいのにな　小六　佳菜子
ドル箱を横目に玉を買いに行く　大　輪
パチンコへ行ってストレス貯めてくる　まさ子
パチンコで稼いだ金は又とられ　華　水
パチンコにどれも疲れた顔ばかり　利　次
暇つぶすだけでは済まぬパチンコ屋　渓　水

川柳塔唐津支部　久保　正敏報

殻脱いで坐す暁天の爽やかさ　杜　竜
一匹の蟻が物見をする晴間　あ　き
出張が我が家の風呂で完了す　四　郎
同人の熱意瞼が熱くなる　虹　汀
剃刀と言われて妻の尻の下　高　明
料理する夫の手伝いしてる妻　ち　よ
魚河岸の声に港の夜が白らむ　義　美
親馬鹿で非行突然出たと言い　多駄子
パンダの子人命よりも重かった　掬　治
叛かれてまだ綾取りの順を待つ　正　敏

わかあゆ川柳会　小砂　白汀報

伝言板見てよくわかる楽しさよ　敏　明
風薫る子供も親も吹かれたい　秀　穂
風薫る空に糸引く飛行雲　ヒデ子
茶を運ぶ娘を写すたんぼ水　三　和
隣との垣を外してうちとける　英　子
ベル鳴って速記の如き伝言板　世　似
空しさは蛍の飛ばぬ里の川　輝　水
若鮎のはねる銀鱗風かおる　清　泉
山あいの蛍ダイヤより光る　かつ子
絵の中に薫るモデルはおかあさん　智重子
蛍呼ぶ甘い水などありはせぬ　歳　栄
ぴかぴかの入学式へ母薫る　悦　良
風薫る五月の古希を歌わんか　鈴　江
風薫る箱庭ほどの若芽にも　民　子
その薫天使の肌か白百合の　美　栄
銀河からこぼれ落ちたか蛍の灯　はるみ
掛算にも割算にもならず81　天痴人
川蜷を喰うたと見せぬ蛍の灯　白　汀

菜の花句会　高杉　鬼遊報

日傘くるくる噂の多い女行く　雀踊子
七夕の笹に金魚が泳ぐ風　春　蘭
胸衿を開きボトルが倒れだす　章
えかげんにせいと007には言わぬ　凡九郎
席順にこだわり心冷えてくる　郁　栄
案山子にも日傘をきせる過疎の村　勝　美
思い出せぬ人と並んで通夜の席　糸　葉
金魚鉢いくら泳いでみたとても　射月芳
子育てをすませ日傘が軽くなる　美智子
おべっかが下手で外野の席にいる　悦　郎
泳がせておこ夫の癖は見抜いてる　冬　葉
席順をやかましくいうオジン達　栞
招かれぬ嫁の座だった衿の芯　年　代
傘立に残る嫁いだ娘の日傘　蕉　露
譲られた席が温いと限らない　柳宏子
再会の衿の白さに救われる　鬼　遊
脇役の出番を待っている日傘　弥　生
神様の周りの席を買占める　武庫坊
割箸が斜めに割れてゆくスリラー　健　司
雨傘も日傘も兼ねて老いの杖　喜　風
婚礼の席で名前を忘れられ　みつる
人として衿を正せと叱られる　頂留子
ライバルに泳げないとは言ってある　美　幸

駒つなぎ川川柳会　里　小路報

おたやんのエクボがとても美しい　甘　平
恥かしさ隠す手だてを考える　庸　佑
忙中閑に呼び止められた市場竜　寿　美
先輩の資料に助けられている　笛　生
印鑑で火の粉を浴びる日を知らず　悦　郎
生々流転美しく語ろうか　恒　明
突風がスカートめくる歩道橋　柳右子
目覚しが夢の中から呼んでいる　金　太
資料とは別人情にほだされる　柳宏子
女将もうだまされません判袋　萬　的
丹精にこたえてくれた花の色　頂留子
恥部かくす化粧をとても控え目に　国　公
ジャイアンツに勝つ甲子園客を呼ぶ　弘　生
ライバルを嵌める資料をもつ鞄　柳　影
通帳と印鑑別なとこに置く　文　秋
朝迄は美しい顔で寝てほしい　重　夫
誤字ひとつ書いたと気づく長い夜　つとむ
僕の名を呼ばれる不思議な事もある　凡九郎
いい顔で資料を売っていた男　冬　葉
どことなく私に似てる丸い印　美津枝
美しく飾る言葉に罠がある　勝　美
恥全部さらしてからの失語症　美　代
呼ばれたらハイと素直に答えよう　史　好
プロポーズの資料給料明細書　律　子
印鑑の隠し場所を変えている　東　雲
恥じらいの仕草女になっている　千代三
犯科帳繰るローソクに風がある　柳　伸

人柄に似た印鑑を課長持ち　覚然坊
嫁ぐ日の顔が一番美しい　射月芳
恥かしい過去には触れぬ仏の眼　浩一郎
書留へちびた印鑑拭いて出し　邦晴
母の皺笑うととても美しい　智子
にごらない瞳にじっと見つめられ　美幸
殉教地鳩を呼ぶ子がひとり居る　作二郎
吉相の印鑑一つ嫁ぐ娘に　善信
明日はあす夕陽に感動しています　月子
動かない資料検事の風呂敷に　信治
いい事がありさんづけで妻を呼ぶ　白兎
はずかしい頃が最も美しい　天笑
成人式父が祝ってくれた印　雀踊子
気にくわん上司の徹夜した資料　小路

川柳高知　川竹　松風報

山下る背の荷物に走らされ　康子
内職を始めた妻がケチになり　菊野
待ちぼうけお茶も心も冷えたまま　千鳥
睨んでも手応えのない北の島　登舟
口紅を変えてすんなり言える嘘　春枝
合鍵を返し心の糸も切れ　美沙
日曜日孫にもあったスケジュール　功
日曜の欲しいと思う小商い　和興
日曜の段取り妻が決めている　竹萌
日曜の父の仮眠を起すまい　佳風
まろやかな新茶の味に夏を知る　幸泉
金を引く窓口だから笑わない　三吉
窓口に晴れて夫婦となる届　朱坊
窓口のえくぼ苦情言いそびれ　節子
夜景見ながら嘘を考える　松風

尼崎尾浜川柳会　春城武庫坊報

梯子段登るとわたしの城がある　江美
尺取り虫が一途に登る杏の木　礼子
家計簿はおまえ一人の罪じゃない　弘治
故郷が橋で続いた有難さ　すみ
後手になり遅れ遅れの前後策　いわお
対策がないからあみだくじにする　良征
残り火へまた策を練る厚化粧　歌子
妻の手帖にかけ込み寺の地図がある　牧郎
三面鏡わたしの謀反知っている　佳秋
へそくりは大丈夫かと子に聞かれ　貞吉
何となく他人行儀な寝起き顔　武庫坊
散歩など出来るものかと夫言い　昌子
似ていても似ていなくても孫は孫　寅之助
石南花が昨日山から降りて来た　すえ
借金を知らん顔して棺の中　夢之助
気の多い蝶が選ってる紅い花　紫香

川柳はびきの　塩満　敏報

好き嫌いリズムを乱す旅の膳　末一
白旗をかくし磨いた靴をはく　隆
荷が出来て娘日に日に遠ざかる　司
新緑に濡れて人間回復す　阿衣
続編は私が書くと妻が言う　隆二
目くばせの一人が抜けて二人減り　葉子
世も末か先生様がなぐられる　蛙声
御用御用係を召し捕るバスタオル　比沙胡
女衆借りた夫が帰る梅雨　隅谷義一
太平洋眺めて憩う旅の風呂　昇
裏町の人生映画白黒で　重樹
罪のない達磨片眼にして競い　吐来
あの人の口笛待って出る風呂屋　伴子
悟られず矢張り欲しい青い鳥　泰子

仕事終え風をみごもる駄馬の汗　忠宏
知恵づきの幼児天下を取るような　昭子
満天の星と河鹿の露天風呂　淑子
御予約の団体さんが騒がしい　一屯
予約してよかった旅の朝晴れる　重人
料理下手テキスト通り四人前　満洲子
ペン立ても一杯欲しい午前二時　弘子
裏切られ独居老人失語症　シメ子
夫婦とは見かけによらぬ隙間風　憲太郎
ビヤガーデン男女平等大ジョッキ　清二
中天の月とひと浴び露天風呂　寿美
朝風呂は天下を取った気にさせる　美代子
恥かしさまだ残ってる露天風呂　ケイ子
白い卓フォークが光る予約席　久治
予約した席に他人が坐ってる　みつる
消防車つづいて単車追いかける　徳子
チューリップ咲くまで意地の指動く　繁男
殺人犯英雄気どりにカメラうけ　喜代子
梅雨晴れの欲しいと願う旅の宿　石橋義一
あまた株手玉に指のテクニック　優
バラ色の人生豊田が黒く塗り　白水
欲ばけの掌に美しい水が漏れ　胡村
核戦争やめて欲しいと署名する　敏

南大阪川柳会　中川　滋雀報

学友と同じレベルの風の中　重人
学友の名前を見つけた紳士録　千里
学友に心の借りが一つある　隆二
卒業アルバム消息不明の友もいる　洋子
学友がボッコボッコと減る名簿　春蘭
疑問の多い男を猿の檻で待つ　作二郎
生活の知恵で疑問を振り払う　柳伸

疑えばきりなし三文判を押す　滋　雀
疑いのしこりを流す大ジョッキ　あいき
一杯飲まされて疑問は消えたんか　恒　明
ルビのいる一行赤線引いて置く　晴　風
疑問符をつけてもどった回覧誌　千　梢
愛しあう二人に疑問などはない　山　久
疑問符を打った点からもつれ出し　智慧子
ぐずついて飴を買わせる孫の知恵　善　信
嘘一つ隠しぐずつく生返事　勝　美
ぐず一人ガイド泣かせのバスの旅　喜　風
ぐずついて金にする肚見透かされ　庸　佑
ぐずついた会議社長に腹がない　慶　三
ぐずついた空なら素直に雨を待つ　円　女
現実のまっ只中に僕がいる　白　兎
三角の目で現実に生きている　雀踊子
現実の話に盃冷えたまま　柳宏子
現実にそっぽをむいている卑怯　頂留子
現実の苦さが故郷の空を恋う　寿　美
現実の話になると佗しすき　千代三
現実は見かけ倒しの火の車　公　一
現実は柿の種より握り飯　弘　生
現実と理想はいつも食い違い　綾　珠
現実を忘れさせている歌劇　柳右子
現実の辛さ家計簿知っている　雅　風
ごたごたの中でも先を読んでいる　文　秋
ごたごたを言うてる妻に羽根がない　悦　郎
ごたごたが続いて鏡に遠くいる　久　子
ごたごたは何処吹く風と淀の水　章　久
友の会ごたごた起すへつらいや　覚然坊
ごたごたの挙句の果にもらう知恵　凡九郎

川柳ささやま　脇田米朝報

故小西無鬼句碑建立記念句会

新緑はいいな寝ころぶ過疎の良さ　孝　風
一鉢の緑で団地春にする　妻　子
雑草の緑にむせる野の仏　幸
一粒の種が緑の輪を広げ　洋　敏
ゴルフへのグリーンにかえる山を剝ぎ　白猫児
酔筆の一気呵成に虹を吐く　文　衛
やんわりと筆を走らす恋の唄　とみ子
寿と書く筆先をあらためる　〆　女
絶筆となった穂先にある疲れ　紫　香
緑炎ゆ木陰に恩師の句碑が建つ　笑　女
灯り消す闇に妻いる安らぎよ　ゆう也
一隅の灯り悟れぬままに老い　ひか平
閉じた眼へ善と悪との走馬灯　法　斉
八十年宝の山の外に住み　一　盃
手の届く位置で眠っている宝　英　子
どん底で心に蔵うてある宝　可　住
ベッピンの猫も髭が生えている　雀踊子
幼稚園から檜山がよく見える　耕　花
天皇の髭黒かった日の神話　正　坊
家の事みんな知れてる幼稚園　越　山
子なし夫婦に幼稚園の話をしてしまう　栞
ストレスを流して帰る縄のれん　静　子
のれんから音痴の声がはみ出され　靖　子
一とすじの味に生きてる縄のれん　米　朝
頭からにゅっと羅漢が出るのれん　太茂津
この味を舌が覚えていたのれん　テ　ル
のれん分け漬物石も呉れました　岳　人
猫の髭ジャンケンポンで切りにゆく　敏
無精髭はやし畑打つ日の安堵　金之助
髭さんの単身赴任お気の毒　やよい

古里を描く緑の絵の具皿　文　平
道づれを得て晩年の灯が温い　なお子
ヤングの髭努力型とは受取れず　百合子

卯の花句会　辻　白渓子報

共稼ぎ洗濯物を夜に干す　純　子
弁当のぬくみを抱いて共稼ぎ　和　江
小遣いは夫と同じの共稼ぎ　あき子
お勤めはしない約束妻となる　一　郎
共稼ぎ子犬一匹お留守番　高　子
共稼ぎ同じ日付の定期券　鼓　城
残業は困るんだけど電話する　暢　子
家族じゅうキー持たされて共稼ぎ　河瀬芳子
父夜警母はパートでぼく学校　逸
共稼ぎ壱合で酔う妻がいる　如　洲
目覚ましを三つ鳴らして共稼ぎ　和　友
昨年の流行かぶっている案山子　山　久
耕耘機案山子を馬鹿にして通り　房　子
子守歌案山子は聞えぬふりをする　千　歩
イヤリングつけて案山子もギャルになる　松川芳子
刈り入れに案山子邪険に倒される　里　子
陳情団のうしろ案山子もついてくる　求　芽
角栄の案山子に杖が添えてある　梅　風
中立論吐くと案山子はそっぽ向く　井　寒
さみしくて案山子は人を憎んでる　年　代
案山子また里を離れる人をみた　陽露子
待合室欠伸こらえた顔があり　多賀子
隣から欠伸をもらう終電車　嘉　子
団体が去るとボス猿欠伸する　とおる
善人がつづいて閻魔あくびする　武庫坊
斬られ役欠伸ころして出番待つ　百合子
けっこうな暮らしに欠伸する女　敏　子

上品に欠伸してます入歯です　よ志子
末席は欠伸が出来る距離にあり　白渓子
保育器の欠伸大物かも知れず　明代
嫉妬する女にあくびなど出ない　笑雪
欠伸した顔が本音かも知れぬ　スミ子
欠伸した奴がこちらを向いている　紫香
酒やよし互いの旅路語り合う　盛雄
母親のボヤキが父権弱くする　越子
蝶蝶も旅してみたい線路みち　花代子
もうよそう新緑きれいに嫁の愚痴　静江
姫リンゴささやき合って白い花　和子
言い勝って何故に悲しい流し台　みつ子
本当の姿を茄子も忘れかけ　杜的
居すまいを正して母は金のこと　柳影
疑えば顔半分は他所の人　秀男
但し書きだけが小さな契約書　康子
紫陽花や花芯は持たぬ二ごころ　恵美子
桜桃忌不倫の酒を飲み明かす　作二郎
悪いことすると誰かに殺される　鬼遊

サークル檸檬（鳥羽吟行）　田形美緒報

中流で和田金の肉まちかねる　今日子
妻だけが中流という吾が家　花楢
中流の暮らしに遠し母子家庭　久子
中流の避暑一泊の軽井沢　美緒
中流が問屋へ行ってまだ値切り　雅子
中流の意識の下の安堵感　美子
中流の目の色変わるバーゲンで　三四子
中流の尻尾はゆっくり振っておこう　美代
中流の余暇が翔んでるパスポート　智恵子
とりあえずカーとハウスはもってます　恵
突然に孫たちあらわれ嵐のあと　登美子
中流に蛙の親子流される　泰子
スーパーへくる中流の野球帽　薫風

翠洋会　中西兼治郎報

飲みはるを惜しむやおへん身をおもい　いつを
長男の嫁であります夏休み　綾子
浮世絵の首は思ったより太い　宏子
冷蔵庫上段下段の派閥待ち　為子
飲むつもり泊るつもりの親子連れ　春子
冷蔵庫何でも彼でも詰めている　登志実
首の皺かくして深い衿を着る　照子
父親の学力試す夏休み　光子
冷蔵庫入る位の西瓜選り　良江
苦も楽もこの盃に入れて飲む　風童
ひとことが飲めず枯野に佇ちつくす　楓楽
はじらいを首すじに見せやがて恋　みつ子
救急車まで走らせた一気のみ　兼治郎
事業欲たっぷり溜めた太い首　君子
首賭ける程のことなき川の水　鬼遊

岸和田川柳会　植山　武助報

ガタガタになっては遅い旅に出る　ひで
ガタガタとふるえて見ている夜の火事　こう
ガタガタになった入歯のぐちを聞く　けい子
ガタガタのおもちゃ叩けば動き出す　さよ子
ガタガタの自転車だから放ってくる　勝晴
午前様ガタガタと鍵を開け　幸代
ガタガタの地道も絵になる故郷で　武助
ガタガタと座り心地の悪い椅子　白光子
久し振り古里ガタガタ道が消え　冨志子
そうめんを流す牛滝風物詩　ゆづる
吸いためておきたい緑を深呼吸　春栄
賽銭はピカピカ硬貨入れておく　希久志
牛滝のせせらぎを聞く五十肩　射月芳
万緑の朱の彩冴えてる多宝塔　狸村
釣り堀の鯉は手のなる方へ来ず　操子

川柳藤井寺　赤木　和子報

たくましい男が持ってる敗戦記　与呂志
父の日を総領息子は知りません　三郎
愛過剰千手観音ほくそ笑み　吸江
父の日の父より高い息子の背丈　つや
父の日は父に内緒で練るプラン　治子
言い訳をする程嘘が嘘になり　志洋
今日だけは無理がきくなり父の日だ　作秀
うやむやなとこから金が流れ出す　比呂志
浴衣着て妻に夜店をさそわれる　美房
父の日はせめて独りにしておやり　本蔭棒
建てる部と売る部ばらばら雨の洩る　祐二
耕耘機蛙のリズムで機嫌良し　伴子
なやみごと鏡と相談してる妻　たかし
好物と花を供えて父の日だ　幾
父の日を出稼ぎで飲む味気なさ　哲正
美しい女を酔わせてはならぬ　美代子
父の日はチャンネル父に任します　繁男
音頭とる上と下とで舞う浴衣　ふみ
近頃の胡瓜個性の顔がない　みのる
旧姓の声をかけ合う同窓会　末一
父の日を忘れたわけでない子沢山　昭子
訪れる人無く父の日黄昏るる　麻雄
いつまでも健康笑顔で暮らそうよ　和美
老愁をはろうてすがし青嵐　雅美
リラ冷えの目醒めに憶う淡き恋　彩
男女雇用均等法案五月晴　秋園
父の日を父は忘れて縄のれん　清心

父の日に家庭こわした父想う　かな女
笑顔から貰う言葉に刺がある　正枝
蛇口全開明日へ怒りは持ち越さぬ　和子

川柳わかやま　堀端三男報

面白くやがて悲しい蟹の泡　きみ
駆落ちを浜辺の蟹は聞いている　豊太
望郷の蟹の目玉は上を向く　桂香
故郷の浜で手招きしてる蟹　緑良
悪戯な蟹が取り持つ浜の恋　克子
退く術を知らない蟹は猿に負け　正巳
安心って自己催眠やないやろナ　凡九郎
安心はぼっくり寺で買うて来た　忠
安心の一手を赦さない積木　武雄
遺言を書いて淋しい安堵感　千寿子
安心に満ちたうちわの丸い風　信秋
母の膝だから安心して眠る　栄美子
三分でいいの安心ほしいから　稚代
大金が無いので詐欺師来てくれぬ　太茂津
蟻の列冬の遊びを貯える　紀久子
紫のベールが欲しい遊歩道　公子
遊ぶこと知らぬ親父の作業服　三枝子
殻抜けて遊ぶ術ないかたつむり　三千代
歯車が遊びを知って狂いだす　幸
機嫌よく遊びたいから今日の汗　正博
遊ぶのも芸上達の道と極め　勇太
遊び球投手の駆引き冴えてくる　登志代
遊び金に狙い定めてきたブザー　白光子
黒枠のあなたちっとも老けてこぬ　照子
枠ちょっとずらして自由の風を呼ぶ　光代
枠内の脱線だから許しとく　凡太
型枠の歪み生コン知るものか　康勝
はみ出してみれば枠内温かった　柳宏子
この枠で私は好きな絵を描こう　正子
胸底の枠に嵌めこむ過去の人　輝子
握手する笑顔で枠がはずされる　裕美
はめられた好意がにくい枠の中　文蔵
人間の弱さが枠を造りだす　三男

尼崎いくしま川柳会　角野かず子報

自転車を押して歩けばふり向かれ　定人
年金のプラン小さな墓地を買う　はじ芽
馴れぬ道杖も心も迷うなり　文夫
歯こぼれの櫛がもしもの話する　かず子
クイズには強いが暮しの知恵はなし　紀雄
悪知恵も適当にある頼もしさ　年代
母が泣いた遠い記憶の火吹竹　牧郎
泣き顔を母の両手が包んでる　君子
三日月を連れて歩けば泣く運河　伊升
プラン立てプランを破るママの癖　美代子
思春期がいるから父もおしゃれする　かすみ
嫁と練る内緒ないしょのプランあり　玉子
ママゴンが知恵の芽つみとる不倖せ　春子
泣くまいと堪えた涙が堰を切る　静江
保証印ことわる位の知恵はある　郁栄
置き薬昔なつかし紙風船　すえ
梅も漬けわが家の行事ひとやすみ　かね子
夫の留守夫の好きなテレビ見る　幸子
大正はこころで女房拝んでる　伊三郎
これと言うプランもなくて凡に生き　一郎
海に行くプラン抱いてる夏帽子　礼子
箸紙を大事にたたむフルムーン　佳秋
裏方の苦労を知らぬ紙吹雪　良征
子の知恵も借りてことわり状を書く　みち子
梅雨明けを待ってたように露出過多　紫香
皆さまの銀行皆さまに金貸さず　保蔵
プラン立てゲートボールを一つ入れ　幸次郎
あてのない小銭がたまる貯金箱　貞子
女には女を隠す知恵がある　正一
石橋を叩きもしもの音をきく　晴子
デカ過ぎるプラン抱いてる空財布　歌子
所帯もつ逢うた初めはパチンコ屋　ときお
さむらいは休日いつも魚釣りだ　常子

川柳塔まつえ七月例会　恒松叮紅報

逆転をされたカープへテレビきる　芳枝
逆転をさせる下地が揃いすぎ　幸一
流れ流れて逆転のない釜ヶ崎　妻子
優勝の記録逆転とは書かぬ　嘉寿子
逆転はなく靴ばかりちびてゆく　昭二
逆転のドラマの中に男棲む　寿美子
妻の逆転で足許掬われる　鳳人
逆転をして運命線が狂いだし　芳子
逆転があって人間やってられ　多賀子
逆転というからくりも天の声　静江
ゆくゆくは世界一周ハネムーン　ノブ
幸せな自然の世界木の芽吹き　宗弘
母のひざ世界で一番あたたかい　肇
女には女の世界あるいくさ　由郎
米とソに世界うろうろさせられる　友子
雲間越し慈愛に染まる月世界　貢範
世界地図どこかで火薬の匂いがす　愚童
ミクロンで測る世界がものを言う　渡
燃え尽きるゴッホの狂は美の世界　壮樹
古都税に仏の世界裏表　弁治郎
あの二人深い仲とは気が付かず

海底を探る科学の深いメス　翠星
草深い里でホタルの盆踊り　吾作
罪深い穴善人の顔で掘る　三男
罪深い男にまとう影法師　きみえ
罪深い男で候放浪記　鶴丸
古傷の深さへ味方一人減り　雄々
美女淑女中に毛深いのがひとり　代仕男
親と子の深い絆に灯をともす　みえ
握られた手に深さ知る初対面　正朗
商層の宿で気になる非常口　長三
空箱が邪魔をしている非常口　舞吉
非常口から犯罪の謎がとけ　与根一
捨てるには惜しい茶柱朝の顔　美治
捨て石は退くことを教わらず　孤呂二
下取りという手がはやる使い捨て　町紅

むらくも川柳会　藤井　明朗報

のんびりのつもりへ停退閑にせず　明朗
母さんのタクトで円満明るい灯　はる代
不足ない人情豊かな里に住み　富子
ひい孫と忍者ごっこもせにゃならぬ　千里
円満に暮らせと母のひとしずく　ヤス子
円満へ和む故郷の風が好き　孝華
連れ添うて不足補う共白髪　みどり
苦労した人ほど話円くする　武衛
のんびりとしていて特種取ってくる　百夫
デートする相手気になる親心　一葉
妥協せぬ相手が酒をまずくする　はじめ
学不足それでも精出す詩つくり　竹乃
湯の宿にのんびり語る老い同士　吉野
一人居へ話し相手が欲しい雨　とみ子
何よりも平和で幸せ夏まつり　林蔵

夫婦とも不足同士で五十年　文子
円満は妻と夫のヤジロベエ　延子
今朝もまた雨かと窓をしめて寝る　ゆき子
すがすがし朝を走った軽い汗　蚊声
朝露を踏んでジョギング爽やかに　克子
久しぶり母娘揃った夏祭り　なつえ
朝顔に今朝も負けたよ朝寝坊　清祥
朝市へいつも出掛ける顔なじみ　ふみ女
暑さなど平気元気な子の水着　よし美
クーラーを付けてお客の話好き　雪路
夏祭り夜店にぎわう子供客　幸子
熱い茶を飲んで暑さを吹き飛ばす　三喜子
クーラーがなくて暑さの研修会　章子
夏祭り老いも若きも楽しみに　昌子
風鈴の音もとだえた熱帯夜　峰雪
来客へ裸あわてて裏を着る　三津江
不足など言うまい豊かな世に育ち　よし子
分量のミルクだけでは不足そう　光子
上を見て不足を言えばきりがない　福子
円満がとりえ世話役ことわれず　鶏生
のんびりとし過ぎてとかく物忘れ　秀子
のんびりと余生は妻の手にあまえ　正朗
円満な空気が好きな福の神　芳子

川柳たけはら　森井　菁居報

おしゃかさまなんでいしになったのか　五歳昌之
ふうせんをとばしてはじまるうんどう会　小二晴美
赤白青ふうせんの色にじの色　小二晶美
かわいそう一本足のハトがいた　小三由博
兄ちゃんの百点みんなさわぐなり　小四方昭
お父ちゃんソフトで勝って飲んでいる　小六鉄二郎
蚊がいるなあっちこっちがかゆくなる　小六美保

戦争の話を聞いてもピンとこず　小六亜貴子
風邪ひいた母さんきげん悪い朝　中一恵子
百点の答案家へと速い足　中二仁昭
国立をめざす問題集の意気　高一紀
十七歳青春ってこんなもの　高二真弓
若さだと思えば友が許せそう　淑子
減量へメニューの数が多すぎる　節夫
慈雨法雨心にしみる筆供養　鈍舟
拳骨の目が笑うてるお父さん　蘭幸
先頭のミスをみんなにカバーされ　房子
薩摩娘の絵づけ生きてる薩摩焼　敬子
舞扇背中の丸うなった妻　静水
雑兵よあくせくしろと四季めぐる　菁居
父の日の父の絵ロマンスグレーなり　比呂子
プライドが拾いかねてる一円貸　静佳
結論を明日に延ばして傘を干す　鬼焼
倖せは主婦なり時計ばかり見る　令子
救急車呼べぬ夜中の立ちくらみ　こうじ
見せまいとするからこっそり見てやろう　笑子
中流はおしめの下に寝はしない　白狐
新芽濺刺伸びる力に教えられ　貞子
つけ馴れぬ面はやっぱり捨てようよ　一路
装えば女同士になる母娘　康子
占いを信じてみたい空青し　博子
軍拡は儲かりまっせと風の私語　のばら
これからの余生を妻と過ごす城　不動
火の玉になって九十の十七字　シゲヨ
生かされて大海原に陽が昇る　千年枝
大安の廊下を急ぐ色直し　勲
酒たばこやめて戻ってきたリズム　俊夫

■各地句会だより

もくせい川柳会

田中正坊

「川柳塔」を一本の樹木にたとえると、同人・誌友を中心に構成されている各地の句会は、根にあたるのではないでしょうか。しっかりと根が張ることによって、木はグングン伸び、大樹に生長します。それらの根の一つとして、七月に一周年を迎えた豊中の「もくせい川柳会」のプロフィールを紹介します。

昨年六月、私の住む旭丘団地の自治会が、橘高薫風先生を講師として「一日川柳教室」を開いたのが契機となって句会結成の話がまとまり、新設の市立中央公民館にサークルとして登録しました。そして七月二十三日、ピカピカの新しい会場で第一回例会を開いてスタートしました。

会員は、かつて戸田古方さんの指導を受けられた会長の安藤寿美子さんら数人をのぞけば、副会長の私、会計の上田登志実さんはじめ、柳歴の浅い新人で占められており、それだけに会の運営にあたっては、先進の句会のすぐれた点をとり入れるよう努めています。

その一つは、自由吟をメインにすえるとともに、席題を互選していることで、第一回例会では、

笑いつつちゃんと計算できている　しず

が、最高点を獲得しました。

会の講師は薫風先生で、選者は講師と役員が交代であたっていますが、この未熟な会を応援してやろうというご好意から、ベテラン作家がつぎつぎと指導に来られるのもこの会の特徴で、これまでに黒川紫香先生はじめ高杉鬼遊・小出智子・板尾岳人・大路美幸・墨作二郎・西森花村のみなさんをゲスト選者としてお迎えしています。

毎月の例会は、第三月曜日午後一時半から、句会報は、私が簡単な電子タイプで印字したものをコピーしています。そして毎月、「川柳塔」の各地柳壇に一句ずつ抜粋して送りますが、この一年間につぎの七句が〝佳句地10選〟に入り、満中きく子さんの句は、59年度の〈佳句十選〉に選ばれています。

平凡に生きる喜び新茶汲む　きく子
ひげ生えた迷い子巷に満ちあふれ　隆
姉さんの婿になる人かわいそう　博史
笑ってる顔のないのが免許証　明
寅さんの港にいつも居るさくら　正坊
ヒロインになった気で出る映画館　〃
どのペンにかえてもやっぱり僕の文字　〃

このほか、今までの例会で秀句に選ばれたものに、つぎのような句があります。

あの日からどこか淋しい笑い顔　寿美子
手枕のしびれを母はそっと引き　富子
後の月　川面に揺れて笑ってる　賀代
砂丘行く白一色の雪を踏み　よし子
泣けそうになって玉葱切りかける　英子
一願の地蔵の前に立ち迷い　美祢子
崩れゆく心の城に夜のバラ　福一
西国は心の杖を探す旅　千恵子
ポストの底届いた音で義理がすみ　春子

こうして一年間、はじめ十四人で発足したのが、例会のたびに一人、二人とふえて二十一人となり、七月十五日、一周年記念句会を開き、年間の句会全出席者に薫風先生の色紙を贈呈しました。

また、新たに「もくせい月間賞」(盾)を設けることとし、第一回は辻川慶子さんが受賞しました。なお、慶子さんの尊父は、むかし、「川柳雑誌」阿倍野支部に属しておられた辻川喜仙さんです。

波にのる男の背なは広く見え　慶子

今後ともよろしくお願い申しあげます。

９月各地句会案内

	日／時及び題	会場と投句先
川柳 わかやま	8日(日) 午後1時より 見栄・賭ける・拾う	県文化会館4F 〒640 和歌山市駕町15　野村太茂津 句会費 300円　投句料 60円切手3枚
西宮北口	9日(月) 午後1時より 月・門・自由吟	西宮中央公民館 阪急神戸線西宮北口駅南出口歩5分 〒661 尼崎市武庫之荘5－25－17　春城年代 句会費 300円　投句料 200円(郵便切手可)
菜の花	10日(火) 夕6時より 汗・鰯雲・這う・カンニング	八尾西郷会館　近鉄大阪線八尾駅南西歩5分 〒581 八尾市山本町5－4－6　内海幸生
川柳塔 まつえ	14日(土)午後1時半より 海賊・偲ぶ・思想	慈雲寺　松江市和多見町 〒690 松江市雑賀町1686　恒松叮紅 句会費 300円　投句料 300円(切手可)
堺川柳会	17日(火) 夕6時より 浮く・飢え・薄い・うしろ	堺青少年センター3F　阪堺線綾之町西南 〒590 堺市堀上緑町2—9—2　河内天笑
富柳会	19日(木) 昼1時より 月・合図・やすらぎ	富田林市中央公民館 〒584 富田林市寺池台3－22－18　藤田泰子
南大阪 川柳会	19日(木) 夕6時より 大切・直接・繕う・手初め	寺田町高松会館 大阪市阿倍野区天王寺町北1丁目3-11 〒544 大阪市生野区生野西1—5—2　金井文秋
高槻川柳 サークル 卯の花	19日(木) 午後1時より 枝豆・野仏・自由吟	高槻市民会館301号室　阪急電車高槻下車歩5分 〒569 高槻市桜ヶ丘北町3－19　辻　白渓子 句会費 500円　投句料 200円(小額切手)
川柳 ねやがわ	22日(日) 〆切2時 プレゼント・腕まくら・気配 自由吟	寝屋川市立総合センター 〒572 寝屋川市春日町9－9　高田博泉
駒つなぎ 川柳会	23日(月) 夕6時より くすり・差支え・月・大げさ	寺田町高松会館　国鉄環状線寺田町駅南歩5分 〒572 寝屋川市成田町19—28　里　義治(小路)
東大阪 川柳同好会	28日(土) 夕6時より 風・書店・三枚目・旅	東大阪市立社会教育センター2F 近鉄布施駅北5分 〒579 東大阪市新池島町1-4-14　斉藤三十四 句会費 500円　投句料 60円切手3枚

★特に記載なき場合　句会費 500円、投句料 300円（郵券可）

原稿送り先（〆切・毎月20日　予め決定している場合は何ヵ月分でも結構です）

〒596　岸和田市荒木町1－29－1　宮園射月芳

本社９月句会

日時　九月七日（土）午後六時

会場　メンズファッションセンター3階
東区内本町一―一　電06・941・1918
地下鉄谷町4丁目下車（2番出口）交差点西南角

兼題　おはなし　西田柳宏子
「亀」　江口度選
「器用」　樫谷寿馬選
「干す」　板尾岳人選
「無事」　黒川紫香選

席題　二題　当日発表　各題三句以内厳守

会費　五百円

★投句は柳箋に一葉一題、郵券200円同封のこと。

川柳塔社

10月の兼題　［例種］　［指定］［ゴール］

10月本社句会は表紙裏参照

本社句会の日どり

11月句会……11月７日（木）
12月句会……12月６日（金）

〈61年〉

1月句会……1月７日（火）
2月句会……2月７日（金）
3月句会……3月７日（金）
4月句会……4月７日（月）
5月句会……5月７日（水）
6月句会……6月７日（土）

●募　集●

十一月号発表（9月15日締切）

川柳塔（10句）西尾栞選
水煙抄（10句）黒川紫香選
愛染帖（3句）橘高薫風選
課題吟（各題5句以内）
「勇気」　植村客遊子選
「糸」　榎本吐来選
「洗う」　矢野佳雲選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★水煙抄欄の投句は一般誌友の方です。

十二月号発表（10月15日締切）

川柳塔（10句）西尾栞選
水煙抄（10句）黒川紫香選
愛染帖（3句）橘高薫風選
課題吟（各題5句以内）
「箱」　田口虹汀選
「乱」　西岡洛酔選
「紳士」　越村枯梢選

★愛染帖・課題吟へは同人・誌友を限らず。
★用紙は川柳塔社柳箋をご使用ください。

９月の常任理事会は２日（月）

定価　五百円（送料55円）
半年分　三千二百円（送料共）
一年分　六千三百円（送料共）
昭和六十年八月二十五日印刷
昭和六十年九月一日発行
編集兼発行人　中島蓬太郎
印刷所　藤原童心社
〒545
大阪市阿倍野区三明町二―一〇―一六
ウエムラ第2ビル202号室
発行所　川柳塔社
電話（06）六二九―六九一四番
振替口座大阪8―三三三六八番

＝編集後記＝

☆川柳塔七百号の編集後記を書く感慨深い思いの中に大正十三年、川柳雑誌発行以来の、代代の編集長、編集子のご苦労を想起する。☆私が川柳雑誌の編集会議に初めて出たのは昭和三十三年旧正の十九日だった。☆川柳雑誌の最盛期、路郎晩年の衰退期から、川柳塔創立時の混迷を経て、現在は誠に安定した歩みを続けている。しかしながら安定期こそ最も気持を引締めなければならぬ時で、この度編集員を増やし、持ち場を細部分割して迅速正確を期すことにした。

☆九月号は創刊七百号で、十月号は川柳塔改題二十年の記念号となる。この大きな節の意義ある企画として須崎豆秋句集「ふるさと」復刻版を、ふるさと以後の百句と併載して出版することにした。川柳界の一茶と称された豆秋の横顔を克明に描いた須崎豆秋論（高鷲亜鈍）を解説の代りに附記した。納得して頂ける一冊と自信をもってお奨めする。

☆座談会と東野大八さんの特別寄稿で特集号らしくなった。「初心者時代の思い出」の同人アンケートも、昭和の初期から近年に至るまた中央と地方の柳界事情を狙ったものである。

☆九月の発主幹の祝賀大会の準備打ち合わせ会も追い込みにかかって、とにかく楽しい会だったと印象に残して頂けるよう一同張り切っている。お誘い合わせて一人でも多くご参加下さい。

☆私事で恐縮だが、「川柳にみる大阪」が保育社からカラーブックスの一冊として、七月二十四日に店頭に出た。天神祭の宵宮に出るのも因縁と思えば思える。藤沢桓夫先生との共著なので、新聞各社にも大きく取り上げて頂いた。紀伊国屋や旭屋の大書店でも、表紙を上に二冊並べる陳列からレジ前に積むような好待遇を得て売れ行きも順調らしい。川柳人以外の人にも親しんで頂ける大阪川柳案内なので、友人知己の方にお奨め下さい。五百円という安さも魅力です。（薫）

▼角川書店から中曽根康弘氏の句集が発刊された。別にどうと言うこともないがなぜか釈然としない。総理が俳句をやり、句集を作って悪いことはない。むしろわれらが現職の総理が俳句をたしなむことを慶ぶべきだが、そんな気になれないのだ。それは、日本国政治と日本国民との乖離によるのではなかろうか。例えば元首相と新潟県民の間柄ならば、熱烈歓迎されたことだろう。

▼防衛費一％枠撤廃論、選挙区定数六増・六減案、税の不公平感など、国民を逆なでする民主々義国家の主権者の句集など、誰が買ってやるものかと怒ってみたが、広告の一行に〝二百七十句。英・仏・中国語の訳付〟とある。これはサミットのお友達用なので、あなたに買ってもらわなくともよいのです。と広告の写真が笑っている。

▼保育社からカラーブックスで「川柳にみる大阪」が発刊された。藤沢桓夫・橘高薫風両氏の共著で、掲載句三百三十余句。川柳が展開する大阪風物詩である。イラストと写真に目をうばわれて句の味わいを損ねるきらいはあるが、見て読んで充分たのしむことができる。百人百色、何をどう読むかはご自由であるが、サミット用の総理の句集と違ってこれは、川柳社会化運動のために一冊でも多くの人に読んでもらいたいものである。（き）

☆通勤時間を過ぎた昼前の私鉄電車というのは、たいがいすいている。ゆっくり座って大阪へ出て行くのだが、学校が夏休みに入るとそうはいかない。家族連れがどっと増え、終点まで十五分間立ちん棒ということも珍しくない。そんな電車で、座席を子供と若い母親たちが占領し、疲れた顔のおとな達が吊皮にぶら下がっている、ちょっと異様な光景にぶつかると、その日一日イライラしてしまうのである。

☆元気な子どもは、たとえ座席が空いていても立たせるべし―と思うのだが、今どき、そんな考えは古いのかナ。足腰の鍛錬になるし平衡感覚も養えるのに…。

☆そんな子供らも、おとなしく座っていてくれりゃこちらも辛抱し甲斐があろうが、これがまた行儀が悪い。甲高い声で喋り合い、やたらに物を食う。チョコレートで汚れた手なんか振り回されると気が気でない。

☆五月の太茂津さんの古稀のお祝いの会の帰り、南海電車の中で七、八人の女子中学生の一団が余りに騒々しく、発主幹が大喝一声、車内をシーンとさせたことがある。しかし僕には主幹ほど勇気も声量もない。いつも苦々しく傍観しているばかりだ。

☆子供が好き、と自分では思っていたけれど、本当にそうなのか分らなくなってきた。（史）

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可
昭和六十年八月二十五日　印刷
昭和六十年九月一日発行（毎月一日発行）

日刊
電波新聞

投稿欄案内

川柳　選者・橘高薫風
（掲載日）毎週水・土曜日

俳句　選者・小寺正三
（掲載日）毎週火・金曜日

短歌　選者・佐々木信夫
（掲載日）毎週月・木曜日

〈投稿規定〉
はがき一枚に三句（首）以内（川柳・俳句・短歌と明示すること）。投稿随時。
自由課題・秀句には掲載紙贈呈。
〈投稿先〉
〒五三〇・大阪市北区中之島三―二・朝日新聞ビル6F・電波新聞大阪本社「学芸部」あて。

5つの個性・5つの色味!!
アイスキャンデー
ミルク・アズキ・パイン・チョコ・宇治金時

なんば戎橋筋本店
なんば高島屋百貨店
泉北高島屋百貨店
京都高島屋百貨店
阪神百貨店
松坂屋百貨店
そごう百貨店
京阪モール店
サンストア中之島店
サンストア淀屋橋店
アベノ近鉄百貨店
上本町近鉄百貨店
東大阪近鉄百貨店
奈良近鉄百貨店
京都近鉄百貨店
なんば新川店
虹のまち店
ドーチカ店
南海難波駅店
国鉄大阪駅店
梅田大丸百貨店
堺東店

551 HORAI
大阪・なんば
蓬莱
TEL 641―0551

雑誌 05703―9